

# 高河原遺跡発掘調査報告

～伊勢市宮後・吹上～



2015（平成27）年3月

三重県埋蔵文化財センター



## 例　　言

- 1 本書は、三重県伊勢市宮富一丁目・二丁目・吹上一丁目に所在する高河原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この調査は、新国道電線共同構整備事業に伴い、平成22年度から同25年度にかけて、断続的に記録保存調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。  
調査主体 三重県教育委員会  
調査担当 三重県埋蔵文化財センター  
平成22年度（現地調査） 調査研究1課 主幹 田中久生　技師 高松雅文  
平成24年度（現地調査） 調査研究1課 主幹 伊藤裕偉　技師 櫻井拓馬  
平成25年度（現地調査） 調査研究1課 主幹 伊藤裕偉  
平成26年度（報告書作成） 調査研究1課 主幹 伊藤裕偉
- 4 調査にかかる諸費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が負担した。
- 5 報告書作成にあたっては、下記の方々から有益なご助言を得た。記して感謝申し上げます（敬称略）。  
小林秀（三重県生活文化部）、藤澤良祐（愛知学院大学）、堀内秀樹（東京大学）。
- 6 本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 7 当報告書の作成業務は当センター調査研究1課が行った。報告文の作成と編集は伊藤が行った。

## 凡　　例

### ＜地図類＞

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、2006三重県共有デジタル地図（平成19年測図）。これらの地図は、全て世界測地系（測地成果2000）に対応している。
- 2 2006三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号；三総合地第93号）。
- 3 調査区は座標表示をしていない。挿図の方位は座標北である。調査区の方位は、工事面から座標方位を割り出して表示した。なお、磁針方位は西偏6°50'（平成19年）である。

### ＜造構類＞

- 4 現地土壌の色調と土質は、小山正志・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版、2003年第23版）を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
- 5 造構番号の頭には、見た日の性格によって、以下の略記号を付けている。  
S E ……井戸

6 造構は、調査時に付加した造構番号を踏襲している。

### ＜遺物類＞

- 7 当報告での遺物実測図類は実物の1/4である。
- 8 実測図のうち、上下の外郭線（口縁部・底部など）に切り目を入れているものは、残存が少ない（1/12以下）が、既存事例に基づきおおよその大きさを推測して示したものである。
- 9 当報告書での用語は、「わん」は「碗」に統一している。

10 遺物観察表は、以下の要領で記載している。

- 番号……………挿図掲載番号である。  
実測番……………実測段階の登録番号である。  
様・質……………「土器器」「磁器」といった区分をここに示した。  
産地……………形態や手法から見た生産地を記した。  
器種等……………遺物の器種を示す。  
次数……………報告中の調査次数を記した。  
造構・層名等……………遺物の出土した造構や層名を記した。  
法量(cm)……………遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での「接地点」ではない。  
調整・技法の特徴……………主な特徴を外面（外：）・内面（内：）で示した。「A→B」はAの後にBが施されたことを示す。

胎土……………小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。  
色調……………その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。  
残存度……………指し部位置を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。

特記事項……………遺物の特徴となるその他の事項を記した。

### ＜写真図版＞

- 11 挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
- 12 遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

## 本文目次

I 調査の契機・経過と行政的諸手続	(1)
1 調査の契機と協議経過	
2 発掘調査の経過と法的措置	
3 発掘調査と記録の方法	
4 整理作業とその方法	
5 出土遺物の分析と保存処理	
II 遺跡と周辺の諸環境	(4)
1 位置と地形	
2 歴史的環境	
3 中近世都市山田の考古学的状況	
III 調査の成果～層位と遺構～	(10)
1 調査区の地形と層序	
2 各調査区の状況	
IV 調査の成果～出土遺物～	(15)
1 概要	
2 土器類・石製品類	
3 木製品類	
V 調査資料の科学分析	(43)
1 分析の目的	
2 高瓦遺跡出土漆器の分析	
3 その他の木製品樹種同定	
4 自然科学分析結果の所見	
VI 高河原遺跡と近世都市山田～調査のまとめと検討～	(51)
1 高河原遺跡の変遷	
2 高河原遺跡と山田低地部の景観	
3 出土遺物の特徴	
4 近世土師器の形態と変遷	
5 総括	

## 挿 図 一 覧

- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 第1図 遺跡位置図          | 第14図 出土遺物実測図(8)          |
| 第2図 高河原遺跡周辺地形図     | 第15図 出土遺物実測図(9)          |
| 第3図 背光五輪塔（建国寺跡出土）  | 第16図 出土遺物実測図(10)         |
| 第4図 調査区位置図         | 第17図 出土遺物実測図(11)         |
| 第5図 調査区平面・土層断面図(1) | 第18図 18世紀宮後・西河原町の状況      |
| 第6図 調査区平面・土層断面図(2) | 第19図 山田惹絵図（17世紀後半）       |
| 第7図 出土遺物実測図(1)     | 第20図 山田低地部の流路と微地形・道路     |
| 第8図 出土遺物実測図(2)     | 第21図 中世後期の山田低地部地形環境復元想定  |
| 第9図 出土遺物実測図(3)     | 第22図 高河原遺跡出土の初期伊万里       |
| 第10図 出土遺物実測図(4)    | 第23図 高河原遺跡出土土器器種別・生産地別組成 |
| 第11図 出土遺物実測図(5)    | 第24図 中世後期から近世の土器組成       |
| 第12図 出土遺物実測図(6)    | 第25図 高河原遺跡出土近世土師器分類      |
| 第13図 出土遺物実測図(7)    | 第26図 近世南伊勢系土師器編年案        |

## 挿 入 写 真 一 覧

- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 写真1 県道鳥羽松阪線（高河原遺跡）の現況 | 写真5 光明寺石塔群        |
| 写真2 24-4区付近           | 写真6 出土木製品の使用木材(1) |
| 写真3 工事中の25-1区         | 写真7 漆皮膜断面         |
| 写真4 高河原神社             | 写真8 出土木製品の使用木材(2) |
|                       | 写真9 出土木製品の使用木材(3) |

## 表 一 覧

- |                     |                         |
|---------------------|-------------------------|
| 第1表 高河原遺跡出土土器観察表(1) | 第7表 高河原遺跡出土土器観察表(7)     |
| 第2表 高河原遺跡出土土器観察表(2) | 第8表 高河原遺跡出土土器観察表(8)     |
| 第3表 高河原遺跡出土土器観察表(3) | 第9表 高河原遺跡出土土器観察表(9)     |
| 第4表 高河原遺跡出土土器観察表(4) | 第10表 高河原遺跡出土木製品・石製品観察表  |
| 第5表 高河原遺跡出土土器観察表(5) | 第11表 漆器の断面観察結果          |
| 第6表 高河原遺跡出土土器観察表(6) | 第12表 高河原遺跡25-2~4区出土土器組成 |

## 写 真 図 版 一 覧

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 写真図版表紙 高河原遺跡出土近世遺物 | 写真図版11 出土遺物(5)土器類   |
| 写真図版1 調査区(1)       | 写真図版12 出土遺物(6)土器類   |
| 写真図版2 調査区(2)       | 写真図版13 出土遺物(7)土器類   |
| 写真図版3 調査区(3)       | 写真図版14 出土遺物(8)土器類   |
| 写真図版4 調査区(4)       | 写真図版15 出土遺物(9)土器類   |
| 写真図版5 調査区(5)       | 写真図版16 出土遺物(10)土器類  |
| 写真図版6 調査区(6)       | 写真図版17 出土遺物(11)土器類  |
| 写真図版7 出土遺物(1)土器類   | 写真図版18 出土遺物(12)土器類  |
| 写真図版8 出土遺物(2)土器類   | 写真図版19 出土遺物(13)土器類  |
| 写真図版9 出土遺物(3)土器類   | 写真図版20 出土遺物(14)土器類  |
| 写真図版10 出土遺物(4)土器類  | 写真図版21 出土遺物(15)土器類  |
|                    | 写真図版22 出土遺物(16)木製品類 |

# I 調査の契機・経過と行政的諸手続

## 1 調査の契機と協議経過

### a 総説

ここで報告する高河原遺跡は、新国道共同電線溝整備事業に伴い、平成22年度から平成25年度にかけて、断続的に調査（記録保存）を実施したものである。事業主体は三重県県土整備部（都市政策課）、実施機関は伊勢建設事務所で、調査を三重県埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。

### b 事前協議の経過

高河原遺跡は、県道鳥羽松阪線道路敷きを中心とした周知の埋蔵文化財包蔵地である。当遺跡範囲を含む当該道路敷に、電線の地中埋設化を目的とした共同電線溝整備事業に関しては、平成17年度に当センターが行った県公共事業照会（平成18年度事業実施予定案件）で伊勢建設事務所から通知がされた。

双方で当該文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、掘削範囲は狭く、かつ交通量の多い道路であることから、工事着工にあわせて立会調査を実施していくこととなった。また、工事の着工は平成19年度以降になるとのことであった。

## 2 発掘調査の経過と法的措置

### a 調査の経過

当センターでは、周知の埋蔵文化財包蔵地外であっても、遺跡の広がりが懸念される場所は、事業部局のご理解のもと、工事着工時に立会を実施する方向で協議を行っている。高河原遺跡近隣に関しても、着工時に立会を実施することで了解を得た。

平成21年度に至って遺跡近隣に工事が及んだ。平成22年2月8日から同年3月16日までの間に、月夜見宮北西部にあたる当該県道と市道藤社御園線交差点から市道八日市場高向線交差点までの間にについて、工事着工時の立会を随時行った。この工事エリアでは、遺構・遺物は確認されなかった。

高河原遺跡内に工事が及び、調査（工事立会）を実施したのは平成22・24・25年度であった。



写真1 県道鳥羽松阪線（高河原遺跡）の現況

### b 調査の状況

**平成22年度** 平成22年度は、月夜見宮北東隅付近の当該道路敷の工事地点で4ヶ所、立会調査を実施した（22-1～4区）。調査は、平成22年12月6日から同23年1月13日までの延べ3日間、調査面積は合計40m<sup>2</sup>である。平成22年度調査区では、湿地状の堆積土とともに、良好な状態の近世土器類・木製品類が多数出土した。

**平成24年度** 平成23年度の着工は無く、次いで実施したのが平成24年度である。平成24年度は、平成22年度調査区よりも東部の地点に5ヶ所（24-1～5区）の立会調査を実施した。調査は、平成24年5月17日から同月31日までの延べ5日間、調査面積は合



写真2 24-4区付近



写真3 工事中の25-1区

計75m<sup>2</sup>である。平成24年度調査区では、湿地状の堆積土が確認された一方、段丘層と考えられる基盤層が確認されるという大きな成果があった。

また、この年度に実施した工事立会により、遺跡の範囲拡大が明らかとなった。そのため、範囲拡大に関する所定の事務手続きを実施した。

**平成25年度** 平成25年度は、平成24年度調査区と重なりつつも東側の地点で4ヶ所（25-1～4区）の立会調査を実施した。調査は、平成25年4月22日から同年5月22日までの延べ4日間、調査面積は合計39m<sup>2</sup>である。出土遺物の最も多かったのがこの年度の調査であった。

なお、都合3ヶ年の発掘調査にあたっては、当該工事受注業者である株式会社山野建設が土工部門の管理を行った。

#### b 発掘調査の普及・公開

発掘調査が工事立会形式であったため、発掘調査後の現地説明会は開催できなかった。調査成果の一部は、県公共事業にかかる発掘調査の成果報告会である「おもろいもん出ましたんやわ@三重2010」（平成23年4月16日開催）、「同2012」（平成25年3月9日開催）、「同2013」（平成26年3月15日開催）で、「同2014」（平成27年3月14日開催）当遺跡出土資料の展示や、パワーポイントによる説明を行った。

#### c 文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法（以下、「法」）の諸通知は、以下により行われている。平成24年度には、遺跡の範囲拡大にかかる手続きも行っている。・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県

教育長あて県知事通知）

平成25年1月24付、伊建第1720号

・遺跡範囲拡大にかかる手続き

平成24年7月31日付、教理第161号（県教育長あて）

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知（伊勢警察署長あて県教育長通知）

平成23年3月31日付、教委第12-4436号（II2調査区）

平成24年8月6日付、教委第12-4408号（II4調査区）

平成25年9月25日付、教委第12-4408号（II5調査区）

### 3 発掘調査と記録の方法

#### a 挖削の方法

調査は工事立会形式である。重機による掘削を進め、造構や遺物が確認されたところで人力掘削に切り替える方法を行った。

#### b 地区設定と遺構番号

調査地は、4m×3m程度の小規模なものである。

該当年度に枝番を付けることで調査区の名称とした。

「22-1区」とは、平成22年度の1ヶ所目、ということである。

造構番号に関しては、明確な造構は1ヶ所のみである。

#### c 出土遺物の回収

出土遺物は、出土造構と出土年月日を記載した専用のラベルを現地で付与した。また、小地区割りを行っていないため、造構に伴わない遺物は出土地点や層がわかる表記を与えた。遺物類は当センターへ搬送し、洗浄などの作業を行った。

#### d 遺構図面

調査時の状況を、工事図に合わせて記録した。記録は調査日誌付設の方眼紙に作成した。略測図（遺構カード）は作成せず、調査日誌の記録で代用した。

調査区の実測図は、上記の記録を基に1/50で作成した。

#### e 遺構写真

調査の状況は、デジタルカメラの記録のみである。

### 4 整理作業とその方法

#### a 遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ1枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分（A遺物）と、報告書未掲載分（B遺物）とに区別して保管している。

#### b 図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真をデジタルカメラで撮影した。遺物写真的撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

#### c 記録類

以上にかかる発掘調査の記録類は、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、調査日誌、写真類（デジタル画像）がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

## 5 出土遺物の分析と保存処理

### a 出土資料の科学分析

今回の発掘調査では、記録保存の一環として、遺跡の性格解明のための分析を実施した。分析対象は、木製品の材質と漆成分分析である。これらは平成26年度の委託業務として実施した。オープンカウンタ方式による見積徴収の結果、漆器類の塗膜分析と樹種同定は株式会社吉田生物研究所が、他の木製品の樹種同定は株式会社古環境研究所が受託した。その結果は第V章に掲載した。

これらの分析は、保存処理委託に出した遺物のみを実施している。

### b 保存処理

常態での保存が困難な出土木製品は、保存処理を実施したものがある。処理した木製品は合計14点である。

保存処理は平成26年度の委託業務として実施した。漆器を中心と公表した4点は、オープンカウンタ方式による見積徴収の結果、株式会社吉田生物研究所が受託した。箸や板材などを中心として公表した10点は、同じくオープンカウンタ方式による見積徴収の結果、株式会社古環境研究所が受託した。

保存処理対象外の木製品類については、自然乾燥を行っている。

(伊藤)

## II 遺跡と周辺の諸環境

### 1 位置と地形

高河原遺跡は、三重県伊勢市宮後一丁目・宮後二丁目・吹上一丁目の境目を通る、県道鳥羽松阪線道路敷きを中心に広がる遺跡である。宮後町は外宮（豐受大神宮）膝下の大都市山田の中心にあり、現在も伊勢市中心部の住宅密集地である。遺跡の東端は月夜見宮の北堀に接し、西端はJR伊勢市駅南口付近に至る。

現在の県道鳥羽松阪線上にはほぼ等しい遺跡範囲は、市街地であるがゆえに遺跡範囲の確定が困難なことに起因する。埋蔵文化財泡袋地としての範囲はさておき、当遺跡が中近世の巨大な「観光都市」<sup>(1)</sup>である山田（中世には「ようだ」と発音した<sup>(2)</sup>）を構成する一部分であることは論を俟たない。

当地の地形環境を見よう。高河原遺跡付近は標高約3mで、宮川下流右岸に広がる低湿地部にある。宮川旧流路によって形成されたと思われる微高地が、高倉山丘陵の北部を東西に伸びており、高河原遺跡はその東端の位置にある。この微高地は、大世古一丁目付近で最高所（標高約6m）となり、高河原遺跡までの500mほどの間に4mほど標高を下げている。高倉山丘陵との間に、宮川旧流路に由來の一端を持つと思われる谷が入り込んでいる。ここから、山田市街地部と高倉山山塊との間に、河川に囲まれた外宮神域がある、といった環境が、中世以前の当地に見られたと考えられる。

### 2 歴史的環境

外宮および山田の近隣地域における歴史的諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する<sup>(3)</sup>。

#### a 古代以前の山田周辺地域

宮川河口低地部では、左岸の微高地上に旧石器時代以降の遺跡が確認されている。標高約1.7mの圓之内遺跡ではナイフ型石器が採集されている。発掘調査が実施されているわけではないので断定できないものの、三重県下で最も海岸寄りにある旧石器時代遺跡として注目されている。宮川河口左岸部ではこ

れ以外にも旧石器～縄文時代の遺物が採集されている。とくに近鉄五十鈴川駅南に接した丘陵上にある桶子遺跡・宮後遺跡では、旧石器時代のまとまつた石器類が採集されている。今後の実態解明が期待される。

縄文時代では、やや内陸部の佐八藤波遺跡が著名である。ここからは中期・後期・晩期の縄文土器・石器がまとまって出土しており、当地を代表する縄文遺跡である。佐八藤波遺跡近隣では複数の縄文遺跡が確認でき、宮川中流域における縄文時代の活動が活発であったことを物語っている。

弥生時代では、前出の宮後遺跡で前期の土器が採集されているが、この時期の確実な集落遺跡は見つかっていない。中期では、宮川中流の中ノ垣内遺跡で前半頃の堅穴住居が確認されている。後期では、下流部の隠岡遺跡で堅穴住居群が確認されている。

伊勢市街地の外縁部には、隠岡遺跡と同様な地形環境にある丘陵尾根が数多くあるが、ほとんど住宅地となっている。隠岡遺跡に類した弥生時代集落は、元々は伊勢市街地縁辺に数多く展開していたと考えられる。大五輪遺跡もそのひとつで、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が採集されている。

古墳時代では、前末期から後期前半にかけての群集墳である落合古墳群（伊勢市津村町）が宮川中流域に造成される。5世紀前半の3号墳からは初期須恵器のほか、蛇行劍・蕨手刀子などが出土している。中期以前の大型古墳が見られない地域における小規模古墳のあり方を典型的に示すものである。古墳時代後期には、藤波古墳群のように低台地上に形成される群集墳のほか、丘陵部にもいくつかの古墳が確認できる。伊勢市鹿海町の赤土山古墳群では、6世紀前半代の優秀な埴輪を伴っている。

後期末頃には、外宮神域にある高倉山古墳が造成される。全長18.5mの長大な横穴式石室は、全国的にも屈指の規模を誇る。高倉山古墳は、後述の神宮（外宮）成立に関しても大きく関与するものとして注目されている。

この他にも、横穴式石室を主体とした群集墳は、



第1図 遺跡位置図 (1:40,000) (国土地理院「伊勢・明野」)

丘陵部や平地部に点在する。近鉄宇治山田駅西方にも、横穴式石室を有した箕曲七塚古墳群があつたが、消滅したという。また、宮川河口部付近で特徴的な古墳に、横穴式木室と呼ばれる、木材を用いて埋葬施設を構築するものが見られる。南山古墳や星河古墳群がその代表である。

古墳時代集落は、比較的低地部にも多く展開している。なかでも特筆できるのが、外宮（豊受大神宮）宮城内の状況である。ここからは古墳時代後期以降の須恵器・土器類のほか、滑石製子持勾玉の出土が伝えられている。外宮の初現期を考える上で極めて重要なデータといえる。

古代律令期の山田の地は、「倭名類聚抄」<sup>(4)</sup>記載の度会郡沼木郷・箕曲郷・駅家郷が含まれると想定されている。明確に地域を示す素材は無いが、高河原遺跡付近の宮後町域は沼木郷に含まれていたようである（後述）。

奈良・平安時代は、神宮周辺に多くの集落遺跡が展開していくよさそうなのだが、今ひとつ明確になつていない。とくに奈良時代集落の確認事例は少なく、外宮の機能が古墳時代後期にはじまると考えた場合、尚のことその実態がよくわからない。

### b 中世・近世の山田周辺地域

平安時代後末期から戦国期にかけての「中世」と呼ばれる時期は、外宮とその膝下の山田を核に、様々な活動が展開される時期である。

平安時代末期には、外宮近隣の丘陵部に多くの経塚が形成される。小町塚経塚や蓮台寺滝ノ口経塚などが著名である。これらの遺跡で確認されている経筒の銘から、神宮の神職が埋葬に数多く参加している実態が窺われる。

平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての遺跡は確認事例が多い。宮川中流域では、前出の佐八藤波遺跡、中ノ垣内遺跡をはじめ、中新田遺跡、寺原B遺跡、下沖遺跡など、掘立柱建物を中心とした集落跡がある。下流域でも、明確な遺構が確認されているのは隱岡遺跡程度ではあるが、沖積地から当該期の陶器碗（山茶碗類）が多く確認されている。

### b 山田の都市的発達

11世紀後葉から12世紀代の院政期および荘園制の展開により、日本列島における「富」の循環は、前

代までは次第に変貌していった。神宮でも、正権宜層の下部に置かれていた権柄宜層の活動が活発化し、神宮領御蔵・御厨が急増するようになる。このような動向のもと、居住地としての山田も次第に変貌していったと考えられる。

山田の住人には、度会氏を筆頭とした正権宜や権柄宜層のほか、神宮の職掌に関わる様々な工人などが考えられる。また、各種の物資が集積される中で、様々な商人の居住・出入りもあったと考えられる。そして、南北朝期以降の山田では、「神宮御師」や「御師」と呼ばれる人びとの活動が顕著となる。

御師は伊勢信仰を全国的に広げる役割を果たすとともに、個々の御師に属する「檀那」と呼ばれる信仰者や集団を擁した。御師は檀那に伊勢信仰にかかる様々な宗教アイテムを配布する代わりに御祓料を徴収し、さらには彼らを參宮へと誘って自身の星数（御師屋敷）に宿泊させた。また、御師自身が様々な商売を行うこともあった。

山田に住む人びとの量的に多数を占める、神宮正権宜や権柄宜職を重代職とする一族（度会氏・荒木田氏）以外の人びとは、「地下人」と呼ばれている<sup>(5)</sup>。彼らは神官階層から次第に経済的独立を果たし、15世紀中頃までには「山田三方」と呼ばれる自治組織を形成した。有力御師家で構成される山田三方は江戸期にも継続し、在地支配に大きな影響力を持っていた。

15世紀末から16世紀初頭頃の時期に、神宮御師と山田の地下人はより一層の発展を遂げる。本家と分家から構成される近世のイエ構造は、当地では15世紀末頃にはほぼ完成している<sup>(6)</sup>。これと呼応するかのように、神宮信仰に伴う御師・檀家関係も民衆レベルで全国各地に敷衍し、その制度が整つていった。

これら様々な要素が複雑に関係しながら、山田は全國屈指の「都市」へと成長していったと考えられる。山田が「都市化」する時期を明確に指摘するのは難しいが、遅く見ても15世紀後葉頃には一定程度の集住状況、すなわち「都市化」が見られたものと推測しておく。

なお、山田近隣には中世城館がほとんど見られない。これに関しては、神宮という場の性格が大きく影響していると考えられる。



第2図 高河原遺跡周辺地形図

### 3 中近世都市山田の考古学的状況

冒頭でも触れたが、山田地内には高河原遺跡をはじめとした埋蔵文化財包蔵地が点在する。しかし、遺跡の実態としては総合的に「山田都市遺跡群」とでも把握するべきものである。

山田地内でのまとまった面積の調査事例は無いが、「伊勢市史」編纂事業に伴い、数地点で試掘調査が実施されている<sup>(17)</sup>。また、それ以外にもいくつかの考古学的情報がある。ここでは、高河原遺跡の関連情報と近隣の埋蔵文化財包蔵地に関して概観し、当地の考古学的資料について整理しておく（第2図）。

#### a 高河原遺跡と「高河原」

高河原遺跡は、昭和37(1962)年の道路工事（現在の県道鳥羽松阪線）に伴う工事に際して遺物が出土したことで認識されるに至った。当時の出土遺物は、土師器羽釜と壺であったという。

宮後町には、現在の行政地名（小字）として「高河原」の名は無い。『宇治山田市史』によると、高河原遺跡周辺は「宮川支流の流域で西川原・東川原・高河原などの名もあり」り、「當所（小字平尾…筆者註）の北方に載世古とて小高き地のあるが、その邊が古昔の高河原」だという<sup>(18)</sup>。

13世紀初頭に成立したとされる『神宮雜例集』には、延暦16(797)年に離宮院が「從度會郡沼本郷高河原」から同郡湯田郷へと移設されたという記載がある<sup>(19)</sup>。ここから高河原は、離宮院の故地という認識がある。また、正確な地点は不明だが、高河原社といいう社祠がこの付近にあったようである<sup>(20)</sup>。合祀され、今は月夜見宮の境内に鎮座している（写真4）。

以上のように、明確な地名として今に残らないのは残念であるが、地域の伝承や社祠の存在によって、この地付近が「高河原」と認識されていたことは確認できる。

#### b 近隣の調査成果

**都鄙試掘地点** 高河原遺跡の南西約100mと近接した位置にある。現地盤高約3.5mで、地表下約1.5mの間に須恵器1点を含む中近世土器類が出土している。中世土器は13世紀代の東海系無釉陶器碗（山茶碗）、15世紀末から16世紀前半代頃の土師器類のほか、明代と考えられる染付皿が出土している。



写真4 高河原神社

出土遺物の状況を見る限り、この地点は15世紀後半代には確實に居住域として利用されていたと考えられる。

**前川郷試掘地点** 月夜見宮の南西にあたり、標高約4.5mである。「伊勢市史」に掲載された出土遺物写真からは、当地では16世紀代から18世紀代にかけての遺跡展開があると見られる。

**大豊和紙工業敷地内試掘地点** 「伊勢市史」では「大豊和紙工業敷地内」として報告されている地点で、近世の神宮御師・福井三郎兵衛屋敷の北部にある。現地盤高は約5.0mである。

「伊勢市史」に出土遺物は掲載されていないが、解説によると、12世紀代の山茶碗や15世紀代の陶器・土師器類のほか、中近世の木製品などが多く出土している。

**中央公民館跡地試掘地点** 高河原遺跡とはJR・近鉄線路を挟んで東側にあたる。試掘調査により、12世紀代頃の山茶碗が数点出土している。

**吹上公園内遺跡（光明寺跡）** 世木神社の東部にある。現在、伊勢市岩渕三丁目に所在する光明寺の旧地である。ここを本拠とした光明寺惠觀は、南北朝期に南朝方として活動した人物として著名である<sup>(21)</sup>。

現在の光明寺には、伝結城宗広塔をはじめとした宝篋印塔・宝塔・層塔が見られる。花崗岩を原材料とした石塔群（写真5）で、南北朝期を中心とした良好な石塔群といえる<sup>(22)</sup>。

#### c 石造物の状況

神宮膝下の山田だが、数多くの仏教寺院が建立されていた。寛文6(1766)年段階に、山田地内には371



写真5 光明寺石塔群

ヶ所の寺院があつたといつ<sup>四</sup>。そして、墓地に造立された石塔類は、発掘調査事例が少ないなかで、中近世の状況を検討できる有効な素材である。

山田地内には岩瀬・大世古・天神丘の3箇所に大規模な墓地が造成された。この3箇所は、複数集落(町)が一所の墓地を形成する、いわゆる「憩墓」にある。これらの墓地には、五輪塔・板碑系石塔などが造立された(第3図参照)。

これら憩墓の石造物は、形態や紀年銘から、概ね16世紀前葉頃を画期に急増すると考えられる。天文年間を初現に一族単位の造墓がはじまり、現代まで継続しているものも少なくない。石造物に窺えるこの傾向は、山田の都市形成とも大きく関係していると考えられる。

### c 中近世都市山田の実態

高河原遺跡近隣の調査成果等を見てきた。資料は乏しいが、平安時代末期から近世にかけて、継続的に人びとが活動する場であったことは確認できる。

「山田都市遺跡群」が内蔵する諸資料は極めて豊かで魅力的なものであることが窺い知れるのである。

(伊藤)

#### 【註】

- (1) 塚本明『近世伊勢神宮領の財穀觀念と被差別民』(清文堂、2014年)。
- (2) 伊藤裕偉・藤田達生編『都市をつなぐー第13回中世都市研究会ー』(新人物往来社、2007年)。
- (3) 遺跡の状況については、伊勢市編『伊勢市史』第6巻考古編(2011年)を主な参考文献とした。
- (4) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名



第3図 背光五輪塔(建国寺跡出土)

類聚抄』(1968年、臨川書店)。

(5) 西山克『道者と地下人へ中世末期の伊勢』(吉川弘文館、1987年)。

(6) 伊藤裕偉『中世伊勢湾岸の湊津と地域構造』(岩田書院、2007年)、千枝大志『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』(岩田書院、2011年)。

(7) 岡田登『第五章 試掘調査遺跡』(前掲『伊勢市史』第6巻)。

(8) 宇治山田市役所編『宇治山田市史』上巻、p737~738、1929年、1988年復刻、国書刊行会)。

(9)『神宮雜例集』(『群書類従』卷4)。

(10) 註(7)文献、p737~738。

(11) 南北朝期の光明寺恵觀に関する論考は多いが、代表例として岡野友彦『北畠親房と恵觀』(『伊勢市史』第2巻、中世編、2011年)を挙げておく。

(12) 浜口主一『光明寺境内石塔群』(『伊勢市史』第7巻、文化財編、2007年)。

(13)『山田三方会合記録』(宇治山田市役所編『宇治山田市史』下巻、p966、1929年、1988年復刻、国書刊行会)。

#### 【参考文献】

- ・平松令三監修『三重県の地名』日本歴史地名体系第24巻(平凡社、1983年)。
- ・伊勢市民俗調査会編『伊勢市の民俗』(1988年)。
- ・伊勢市教育委員会『伊勢市の文化財』(1981年)。
- ・伊勢市編『伊勢市史』第2巻中世編(2012年)、第3巻近世編(2013年)、第6巻考古編(2011年)。
- ・三重県教育委員会『三重県石造物調査報告』I(2009年)、II(2013年)。

### III 調査の成果～層位と遺構～

#### 1 調査区の地形と層序

##### a 調査地の地形

調査地は県道鳥羽松阪線道路敷きで、月夜見宮の北部からJR伊勢市駅の西端にかけて約300mの間である（第4図）。標高は2.5m前後である。

道路敷きのため、現況は平坦な状態であるが、第Ⅱ章で触れたとおり、ここには宮川旧流路である清川が通っていた。清川は、江戸時代末期の絵図にも表現されている河川だが、その正確な位置や時期毎の規模は明確にはなっていないのが現状である。

##### b 調査区の基本層序

調査区は13ヶ所で、いずれも小規模な縦坑状である。最も西端の調査区が22-1区、最も東端は25-2区である（第4図）。

工事に伴う立会調査であるため、層序の記録はそれほど緻密にはできなかったが、およその傾向は読み取ることができる。それぞれの調査区を総合すると、基本層序は上から順に以下の通りとなる。

第I層：アスファルトおよびそれに伴う砾石（土層図第1層）

第II層：近代以降の盛土層（土層図第2層）

第III層：赤褐色粘土層（土層図第3層）

第IV層：灰色～黒色系粘土およびシルト

第V層：黄褐色粘土層（基盤層）

第I・II層は、近代から現代にかけて造成された層である。薄くとも路面下50cm、25-1～4区では120cmを越えている。先述の、旧河道（清川）埋め立てにかかる盛土と考えられる。

第III層は、近世段階の盛土と考えられる。24-1区3層、24-2区3層、24-5区4層、25-3区3層がこれに相当する。Ⅲ層の細かな時期区分は、今回の調査では行えなかった。

第IV層は滲水性のある粘土およびシルト層で、22-3区3層以下、24-1区4層、24-2区4層以下、24-5区5層以下、25-1区4層以下、25-2区3層以下、25-3区3層以下、25-4区3層以下、がこれに相当する。時期差があり、25-1区で19世紀

中葉以降、それ以外では18世紀前半後の形成と考えられる。遺物を多く包含する層で、とくに22-3区、25-2～4区の出土量は特筆に値する。これら遺物の多くが18世紀初頭から19世紀前葉頃のものである。

今回の調査は、工事に伴って開削される深度までで止まる。そのため、近世前期以前の状況は明確に把握できていないことを申し添える。

第V層は、当地の微高地を形成する基盤となる層と見なされる。24-4区でのみ確認できた。

#### 2 各調査区の状況

確認した遺構は井戸1基のみで、大半は落ち込み状遺構や旧流路である。

以下、第5・6図を基に、個々の調査区について見ていく。

**22-1・2区** 月夜見宮の北部に位置する。今回の調査地のなかでは最も西に位置している。土層の採録はしていないが、河成と考えられる粘質土・シルト層中から、17世紀末から18世紀後半頃を中心とした多くの土器類・陶磁器類が出土した。

**22-3区** 月夜見宮の北部で、22-2区の東側である。路面下約1.2～3.0m（標高約1.5～-0.5m）の間に第IV層の堆積が見られる。第IV層下部は中粒砂および練混じりで、河成の堆積層と考えられる。第IV層の上部にあたる黒色シルト層中に、17世紀後葉から18世紀後半頃の土器類・陶磁器類が多く含まれていた。

**22-4区** 22-3区の南側である。土層の採録はしていない。掘削深度が浅かったこともあり、出土遺物は少ないが、車軸の一部と考えられる木製品（第17図362）が出土している。

**24-1区** 今回の調査区では東寄りで、旧三交百貨店前にあたる。掘削深度は2.2m（標高約0.5m）と浅い。当調査区の第3層は、基本層序の第Ⅲ層にあたり、近代以降の整地である。瓦を多く含む土坑が切り込まれており、中から18世紀後葉以降の土器類が出土している。

第4層は、基本層序の第IV層にあたる。17世紀後葉～18世紀後葉を中心とした土師器・陶磁器類がまとめて出土している。

**24-2区** 24-1区よりも、やや月夜見宮寄りの調査区である。路面下約2.7m（標高約0m）まで掘り下げた。第3層は基本層序第III層にあたる。17世紀後葉頃の陶磁器が出土している。

第4～7層は基本層序第IV層にあたる。第6層は有機質を多く含んでいた。遺物は少量だが、中世後期まで遡る可能性がある。第7層は河成の砂礫層で無遺物層と判断した。

**24-3区** 24-2区の西側である。全体が旧地下通路内にあたっており、近世以前の状況は残っていないかった。

**24-4区** 後述する24-5区のさらに西側である。路面下約0.7m（標高約2.1m）で黄褐色粘土層（基本層序第V層）にあたる。この層は段丘形成土と考えられ、今回の調査で確認した唯一の基盤層である。第3層は耕作土状の土壤で、当地付近に農業用地のあった可能性を示している。この調査区では、他には明確な遺構は無かった。

**24-5区** 24-3区の西側である。路面下約1.0m（標高約1.7m）で第4層上面に至る。第4層は、基本層序第III層に相当する。

第4層上面から井戸S E 1が掘削されている。S E 1は直径約0.8mの円形で、検出面から0.9mの深さまで確認した。第4層以下は無遺物層である。

**25-1区** 今回の調査区では最も東端である。路面下約2.0m（標高約1.0m）で第5層に達する。第5層は近世陶器を含み、基本層序第IV層に相当する。第2・3層は江戸時代末期以降の層である。湿地性の土壤である。

調査区の北部には、長さ2.4mと2.0m、幅と厚さはそれぞれ20cm・10cm程度の角材を方形に4段以上組んだ施設があった。番線で括り、煉瓦で補強している施設のため、時期は近現代と考えられる。第3

層上面辺りから切り込まれている遺構と考えられる。

**25-2区** 24-1区と道を挟んだ対面にあたる。第2層は片岩や焼土を含んだ廃土で、明治時代頃の整地層かと考えられる。

第3～5層は湿地性の土壤で、近世の遺物を多く含んでいた。掘削深度は路面下約2.3m（標高約0.5m）である。第4層は炭混じりで、とくに近世土師器・陶磁器類の出土が多い。第5層は有機質を含む層で、一部に製品類も見られた。

**25-3区** 24-5区と道を挟んだ対面にあたる。路面下約1.3m（標高約1.2m）で第3層（基本層序第IV層）に達する。

第3層以下は湿地性の土壤を示す。第4層は灰色粘土層で、17世紀末から18世紀前葉頃を中心とした多くの近世土師器・陶磁器がまとめて出土している。この他にも、木葉や木ぎれ、木製品（漆器）や、形状を留めていないが貝殻片など有機質も多く含んでいた。第5層は中粒砂で、少ないながらも水流のあったことがわかる。

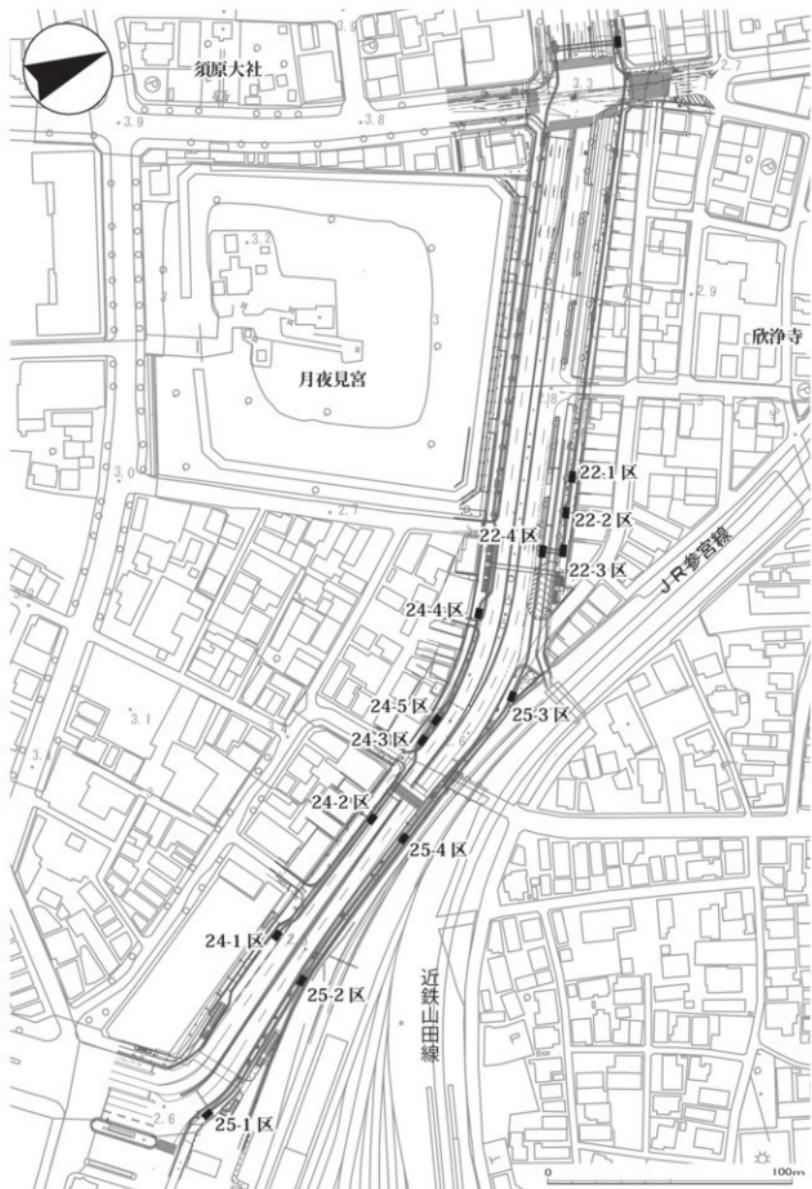
第6層は第4層に類似した層だが、黄褐色を呈し、ややシルト質である。この層からは17世紀後葉頃の土器類が出土しているが、包含量は第4層よりも少ない。

掘削深度は路面下約2.3m（標高約0.2m）で、第6層はそれよりも深くまで及んでいる。

**25-4区** 24-2区と道を挟んだ対面にあたる。路面下約1.3m（標高約1.4m）で第3層上面に達する。

第3層以下は湿地状の土壤で、基本層序第IV層に相当する。第3層には多量の近世土師器・陶磁器のほか、有機物や炭化物が多く見られた。第4層にも有機質を含むが、土器類の包含は少ない。第4層上面から打ち込まれたと考えられる杭を調査区の北部で確認している。湿地ないしは河道に伴う杭列と考えられる。

掘削深度は路面下約2.3m（標高約0.4m）で、第4層はそれよりも深くまで及んでいる。 (伊藤)



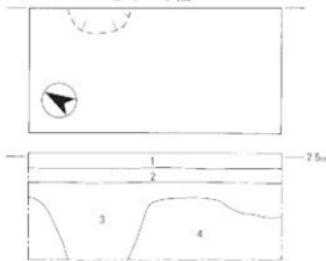
第4図 調査区位置図 (1:2,000)

22-3区



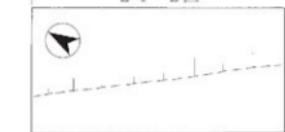
- 1 アスファルト・砂石
- 2 砂土
- 3 赤褐色土
- 4 黄色シルト 10R 2／1
- 5 黑色土
- 6 黑褐色中粒砂+礫 10G 2／1
- 7 黑褐色中粒砂+礫 10G 2／1

24-1区



- 1 アスファルト・砂石
- 2 砂土
- 3 赤褐色シルト、瓦多い
- 4 灰色シルト、粘性強い (湿潤状堆積土)

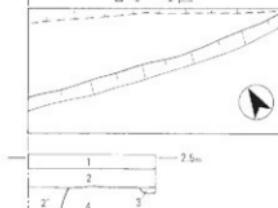
24-2区



1	2
3	
4	
5	
6	
7	
8	

- 1 アスファルト・砂石
- 2 砂土
- 3 黄土。樹根なし
- 4 黄オーラビ色混淵シルト、粘性強 7.5G 4／2
- 5 灰灰色シルト、粘性強 7.5G 6／1
- 6 黄色粘土、有機質含む 10R 3／3
- 7 灰灰色砂礫。難透 100mm 前後 10G 6／1

24-4区



- 1 アスファルト・砂石
- 2 砂土
- 2' 砂土
- 3 黑褐色シルト (田耕土) 10R 3／2
- 4 黄褐色粘土 (基盤土) 10R 6／4

24-5区

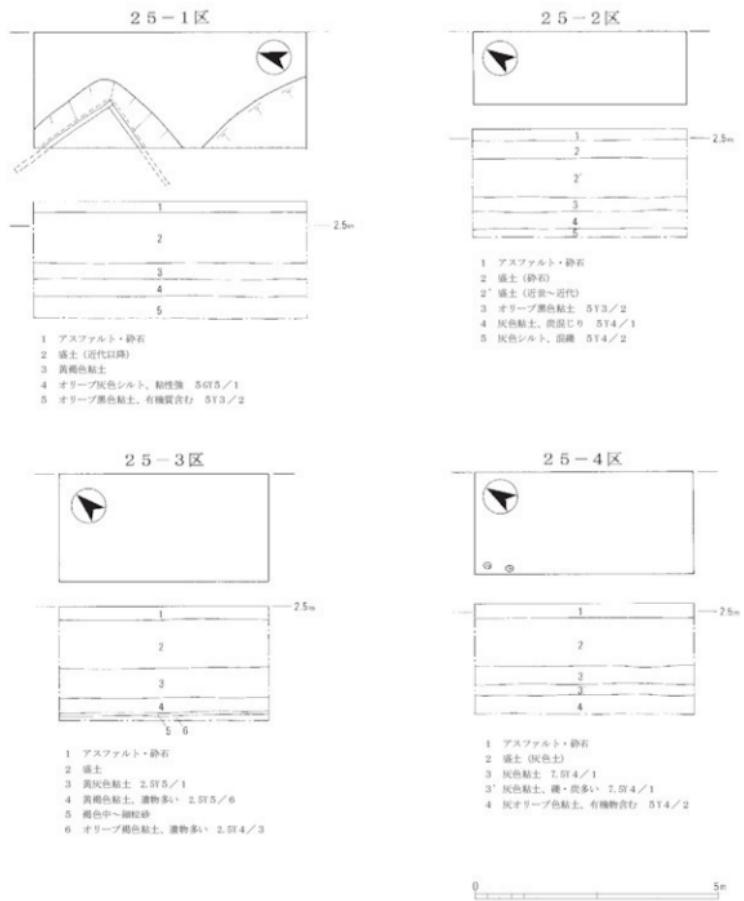


1	2
3	
4	
5	

- 1 アスファルト・砂石
- 2 砂土。
- 3 黑褐色シルト、粘性強。明黄褐色ブロック含む 10R 3／2
- 4 灰褐色シルト、粘性強 7.5R 4／2
- 5 灰灰色シルト、粘性強 10R 4／1
- 6 灰灰色砂礫 10R 5／1

0 5m

第5図 調査区平面・土層断面図(1) (1:100)



第6図 調査区平面・土層断面図(2) (1:100)

## IV 調査の成果～出土遺物～

### 1 概要

高河原遺跡の調査で出土した遺物は、平成22年度調査区(22-1～4区)で整理箱に5箱(約18.2kg)、平成24年度調査区(24-1～5区)で3箱(約13.0kg)、平成25年度調査区(25-1～4区)で9箱(約46.1kg)である。内訳は、近世の土器類(土師器・陶器・磁器)および瓦類が中心で、少量の石製品や木製品が見られる。

実測図を第7～17図に示した。図示した遺物の出土点や詳細については、出土遺物観察表(第1～10表)を参照されたい。

なお、出土陶磁器類の器種や時期比定については、瀬戸美濃産陶磁器類は藤澤良祐氏<sup>(1)</sup>に、肥前産陶磁器類は堀内秀樹氏<sup>(2)</sup>のご教示に拠るところが大きい。

### 2 土器類・石製品類

22-1区出土土器(1～37) 1～18は近世の土師器皿類。1～3は小皿A、4～17は小皿D、18は小皿Cである。3～5は近世Ⅰ期(17世紀末～18世紀初頃)、他は近世Ⅱa期(18世紀前半)に相当する<sup>(3)</sup>。19は土師器羽釜で、口縁端部は内面に折り返しがある。20～24は土師器鍋類で、22～24は焙烙形を呈する。18世紀前半までのものと考えられる。

25～27は陶器。25・26は瀬戸産天目茶碗で、18世紀中葉頃のもの。27は碗で、信楽産の可能性があるがよく分からぬ。

28～32は磁器。28は肥前産の碗で、外面にコンニャク印判による火炎文があり、18世紀前半頃のもの。29は型押し成形の碗で、内面見込みに呉須筆描で柳葉文が表現される。30は肥前産の皿で、18世紀前半頃のもの。31は肥前(伊万里)産の白磁。いわゆる「初期伊万里」で17世紀前半のもの。型押し成形で精緻な芭蕉文?が表現されている。32も「初期伊万里」の鉢で、内面は型押し成形。外面には鳳凰が描かれていると見られ、内面見込みには芭蕉かと思われるものが描かれている。いずれも呉須筆描である。

33～35は陶器。33は美濃産の鉢で、内面に櫛描の

花文と波状文がある。34・35は瀬戸産の擂鉢で、34は17世紀末頃、35は17世紀前葉から中葉頃のものである。

36・37は石製品で現。いずれも方形を呈し、36はやや小形である。粘板岩質で、近江高島産のものと考えられる。

22-2区出土土器(38～49) 38は美濃産陶器の小碗。ケズリ出し高台である。登窯第7小期にあたり、18世紀中葉のもの。39は肥前産磁器の広東碗で、18世紀末頃のもの。呉須筆描で、内面見込みに菊花文、外面には蔓草文が表現される。高台内面には落款がある。40は肥前産磁器で望月碗の蓋。18世紀後半頃。呉須筆描で、外面は鳥文と○に寿の文様を表現する。内面は花菱文を口縁部に、見込みに波瀾文と○に寿の文様を配している。

41は瀬戸産陶器の丸皿。登窯第5～6小期にあたり、17世紀後葉から18世紀初頭頃のもの。42は瀬戸産陶器の中皿。鉄釉筆描で木葉文を表現する。登窯第8～9小期、18世紀後葉から19世紀前葉頃のもの。

43は肥前産磁器の皿。いわゆる「初期伊万里」で、17世紀前半のもの。内面には渡り鳥・家屋・木などの風景が描かれている。44は波佐見産磁器の皿で、18世紀後葉から19世紀初頭頃のもの。内面には呉須筆描の扇花文とコンニャク印判による五弁花文、外面には草花文が描かれている。高台内面には花押状の落款がある。

45は瀬戸産陶器の片口鉢で高台部。46は瀬戸産陶器の皿で、内面には櫛状工具による波状文がある。

47は瀬戸産陶器の壺。外面には櫛状工具による横線文がある。48・49は瀬戸産陶器で擂鉢。48は登窯第6小期で17世紀末から18世紀初頭頃、49は登窯第8小期で18世紀後葉頃のもの。

22-3区出土土器(50～69) 50は東海系無釉陶器の碗で、いわゆる「山茶碗」。知多産と考えられ、藤澤良祐氏による山茶碗編年の中第5型式(12世紀後葉～13世紀初頭)に相当する<sup>(4)</sup>。51は加工円盤で、肥前産磁器碗の体部を転用している。近世中後期のものであろう。52は土師器小皿Cで、近世Ⅱb期、

18世紀中葉頃のもの。

53は瀬戸産陶器碗で、いわゆる「刷毛目碗」。灰白色釉を黄色系素地に刷毛塗りしている。登窯第8小期、18世紀後葉頃のもの。54は陶器碗で、赤褐色系の素地に呉須筆描で松を描き、白色透明釉を重ねる。产地は不明だが、京都方面のものであろうか。

55は波佐見産磁器碗。呉須筆描で、外面に雪輪・草花・梅を表現する。18世紀中葉から後葉頃のもの。高台疊付付近は意図的に削られたうえ、研磨されていて。56は肥前産磁器の碗。外面は赤・黒・緑の色繪で、精緻なものである。17世紀後葉頃のもの。

57は肥前産青磁の鉢。内面は片彫りで鱗状の文様を削り出す。内面見込みは、蛇の目動刺しが見られる。17世紀中葉頃のもの。58は肥前産磁器の鉢で、いわゆる「初期伊万里」。内面は呉須筆描で、芙蓉手文の区画があり、見込みには草花文が描かれる。17世紀前半のもの。

59は肥前産青磁の壺。口縁部は短く、直立気味である。内面の施釉は、上半部にのみ見られる。17世紀後半のもの。

60は瀬戸産陶器で、いわゆる「漬入」である。上面形は小判形をしている。外面には鉄釉筆描で竹文が表現されている。61は瀬戸産陶器の擂鉢。18世紀後葉頃のものであろう。

62~64は土師器。62は茶釜形、63・64は鍋である。いずれも18世紀代のものと考えられる。65は肥前産磁器の碗で、大型の広東碗。呉須筆描で、外面には漁師が描かれている。18世紀末頃のもの。66は肥前産磁器の碗。呉須染付で、内面には花文、外面には芭蕉文と幾何学文が帯状に巡る。18世紀後葉頃のもの。破断面には漆による補修痕が見られる。

67~69は美濃産陶器。67は皿で、いわゆる「向付」。端反皿の外縁を4方向にカットし、上面形が正方形に見える形態に整形している。上から見て角にあたる部分には鉄釉が施される。登窯第5~6小期で、17世紀後葉から18世紀初頭頃のもの。68は筒形香炉。体部下半に屈曲を持ちつつ、内彎気味の口縁部となる。登窯第6小期頃（17世紀末~18世紀前葉）のもの。69は灯明台。皿状に整形した下部に、同じく回転成形による受部を取り付けている。登窯第7小期頃（18世紀中葉）のもの。

24~1区出土土器（70~90） 70は土師器小皿A。

近世I期のものである。71は磁器で仏飯具。肥前産と考えられるが、瀬戸産の可能性もある。底部は輪高台状となる。外面には呉須染付で○に寿を三方に配している。18世紀後半のもの。

72は肥前産磁器の鉢。破片だが上面形は八角形と考えられ、そのうちの一角のみ残存する。内面は八角の区画毎に呉須筆描で描かれる文様が異なっているよう、遺存部分では二つの風景画が見える。外面は唐草文である。18世紀前半頃のもの。73は瀬戸美濃産陶器の碗で、いわゆる「柳葉碗」。外面には鉄釉筆描で何かが描かれている。18世紀末から19世紀初頭頃のもの。

74は肥前産磁器の皿で、いわゆる「初期伊万里」。内面には呉須筆描で魚が描かれる。17世紀前半のもの。75は肥前産磁器の皿。内面には呉須筆描で精緻な唐草文が描かれている。高台内面には文字状の落款がある。18世紀中葉から後半頃のもの。

76は美濃産陶器の皿。内面屈曲部に段が形成され、その内側に鉄釉で草花が模様される。登窯第5~6小期で、17世紀後葉から18世紀前葉のもの。77は瀬戸産陶器の皿。内面には呉須筆描で草花のような文様が描かれる。登窯第9小期で19世紀前葉のもの。

78~80は土師器鍋、81・82は土師器羽釜である。78は直線的に開いた体頸部から短く口縁部が開くもの。80は「く」の字形に口縁部が開く。81・82は羽釜。内側する口縁部に面を持つ口縁端部となる。口縁端部は内側に折り返されている。これらの土師器煮沸具は、概ね18世紀代のものと考えられる。

83は美濃産陶器で天目茶碗。ケズリ出し高台で、内外面に厚く茶色の釉が掛かる。登窯第1小期で17世紀初頭頃のもの。84は瀬戸産陶器の丸碗。やはりケズリ出し高台で、内外面に暗褐色の釉が厚く掛かる。登窯第1小期のもの。

85は京焼陶器の碗。ケズリ出し高台で、外面には鉄釉筆描の風景画が描かれる。高台内面には楕円形に「清水」の押印落款がある。17世紀中葉頃のもの。

86は美濃産陶器の丸皿。貼付高台である。登窯第6小期で、17世紀末から18世紀初頭頃のもの。87は陶器の蓋。伊賀産か。底部は糸切りで、内面には貼付による捕部が付く。

89は瀬戸産陶器の盤。外面には貼付雲竜文を施し、軸は緑釉（ルス）である。登窯第8小期、18世紀後葉頃のもの。90は軒桟瓦。橙色を呈する。軒丸部は五角形を呈して無文、軒平部は唐草文が見える。18世紀後半から19世紀前半頃のものであろう。

**24-2区出土土器 (91・92)** 91は美濃産陶器の鉢。いわゆる「笠原鉢」である。内面には鉄筆篆（刷毛）描で草花文を配する。登窯第3～4小期で、17世紀中葉頃のもの。92は瀬戸産陶器の擂鉢で乙類。登窯第5小期で、17世紀後葉頃のもの。

**24-5区出土土器 (93～106)** 93は瀬戸産陶器の碗で、いわゆる「刷毛目碗」。登窯第8小期、18世紀後葉頃のもの。94は陶器碗で信楽産か。95は波佐見産磁器碗で、いわゆる「くらわんか手」。外面は呉須筆描で雪輪文と梅文が配される。18世紀中葉から後葉頃のもの。96は瀬戸美濃産磁器の端反碗。外面には内容不明の呉須筆描の施文がある。登窯第10～11小期で、19世紀前葉から中葉頃のもの。破断面に焼き継ぎ痕がある。97は肥前産磁器の小杯。高台内面には「大化明製」と書かれ。被熱を受け、釉が変色している。17世紀後半頃のもの。98は肥前産磁器の碗。外面に呉須コンニャク印判による松葉文が押されている。外面には、焼成時に付いた匣の圧痕がある。18世紀中葉から後半にかけてのもの。

99は美濃産陶器の徳利。体部と口縁部内面に灰釉が掛かる。登窯大7小期、18世紀中葉頃のもの。100は瀬戸産陶器の擂鉢。口縁部内面に弱い段が付く。登窯第7小期のもの。

101は軟質陶器（土器）の風炉。直胴形で、口縁部は姥口状を呈する。口縁部に方形の切り込みがあるが、全体形は不明。102～105は土師器。102は茶釜蓋。中央の摘部は欠損する。103は茶釜で肩が張り、鉗部は短い。104は焰烙。105は鍋で16世紀代のもの。106は瀬戸産陶器で大窯第4段階（16世紀後葉）の天目茶碗。

**25-2区混鍵灰色粘土層出土土器 (107～120)** 107は肥前産磁器の合子。外面は型押し整形で、外面中程から内面にかけては施釉が見られる。近世後期のもの。108は美濃産陶器の灯明皿。内面には重ね焼き痕が見られる。

109～112は肥前産磁器。109は碗。外面には呉須筆

描で雪輪文と竹文が表現される。18世紀末から19世紀初頭頃のもの。110は筒形碗。外面には呉須筆描で剝菊文と斜格子文が表現される。18世紀後葉から19世紀初頭頃のもの。111は青磁染付の皿。内面には呉須筆描で松と松毬が配され、外面は青磁釉である。高台は、いわゆる「蛇の目回形高台」である。18世紀前半から19世紀初頭頃のもの。112は皿。内面は型押し整形で、呉須筆描で風景画が配される。17世紀後半頃のもの。

113～117は瀬戸産。113は磁器碗で、外面には呉須筆描で草花文が描かれる。焼継（補修）されており、高台内面には焼継職人の印である「キ」字状の記号がある。登窯第10小期、19世紀中葉頃のもの。114は陶器菓子鉢。内面には鉄釉筆描で草花文が配される。115・116は陶器擂鉢。115は登窯第5小期で17世紀後葉、116は登窯第7小期で18世紀中葉のもの。117は甕。全面に暗青灰色の釉を施す。19世紀代のものである。

118は产地不明の陶器で外耳鍋。黒色釉を前面に施す。口縁部に輪状の把手が付いていたと考えられ、その痕跡が残る。119は土師器焰烙。18世紀後葉から19世紀初頭頃のものであろう。120は常滑産陶器の甕。口縁部は体部から外開きに成形し、その後内面に素地を付加することで整形している。17世紀後半頃のものと考えられる<sup>(5)</sup>。

**25-2区灰色粘土層出土土器 (121～133)** 121は肥前産磁器の小形合子。外面には呉須筆描で卷物状のものが表現されている。口縁部のみ無釉。19世紀前半から中葉頃のもの。122は肥前産磁器で望料碗の甕。外面には呉須筆描で幾何学文と草花文が、内面見込みには6分割区画に松葉文が配される。18世紀末頃のもの。123は波佐見産磁器の碗。外面には呉須筆描で雪輪文、内面には格子目文が表現され、高台内面には筆描の落款、碗内面にはコンニャク印判で五弁花文があしらわれている。18世紀末から19世紀前葉頃のもの。124は肥前産青磁の鉢で大型品。18世紀後半頃のもの。

125は瀬戸産陶器の碗で「せんじ」と呼ばれるもの。高台は貼付である。登窯第8小期、18世紀後葉のもの。126は美濃産陶器の灯明皿。口縁部内面に素地を付加し、切り込みを入れて灯心受けとする。登窯第

10・11小期、19世紀中葉のもの。127は瀬戸産磁器の皿。内面には呉須筆描で花文と見られるものが表現されている。登窯第8・9小期、18世紀後葉から19世紀前葉のもの。128は瀬戸産陶器の中皿で、口縁端部が反る。内面には鉄軸筆描で格子目文が施される。登窯第7・8小期、18世紀中葉から後葉のもの。129は美濃産陶器の筒形香炉。底部は、3足のうち1足のみ残存する。登窯第6・7小期、17世紀末から18世紀中葉頃のもの。130は瀬戸産陶器の擂鉢。登窯第1段階で、17世紀初頭から中葉頃のもの。

131・132は土師質土器で火鉢。無袖だが外面には波状文が見られる。口縁部内面付近に破損が多く、被熱による影響と考えられる。133は土師器焰燈で、18世紀後葉から19世紀前半頃のものであろう。

**25-2区褐色灰色整地出土土器 (134~151)** 134は肥前産磁器で端反碗の蓋。外面には呉須筆描で童子・鳥・鰐齒文が、内面には麒麟と鰐齒文が表現されている。19世紀中葉頃のもの。135は肥前産磁器で広東碗の蓋。内外面に呉須筆描で蝶と草花が表現される。摘部内面に四文字あるが、記載内容は不明。18世紀末頃のもの。

136は肥前産磁器の碗。外面には呉須筆描で井干を行く、コンニャク印判で菊花を押す。18世紀末から19世紀初頭頃のもの。137は肥前産磁器の皿。内面には呉須筆描で植物が表現されている。18世紀後半から19世紀前葉頃のもの。138は肥前産磁器の大型の皿。内面には呉須筆描で扇文が崩れたと見られる草花状の文様が施される。外面は唐草文である。18世紀末から19世紀前半頃のもの。

139は瀬戸産陶器の碗で、いわゆる「刷毛目碗」。登窯第9小期、19世紀初頭頃のもの。140は瀬戸美濃産磁器の皿。内面には呉須筆描で区画を行った中に何らかの施文を施している。高台内側の袖は搔き取られている。19世紀中葉頃のもの。141は美濃産陶器の中皿。内面見込みには段が付く。登窯第3・4小期、17世紀中葉頃のもの。

142は美濃産陶器の徳利。体部外面は3方に整形後の圧迫によるくぼみが付く。登窯第8小期以降、18世紀後葉から19世紀にかけてのもの。143は美濃産陶器の内耳鍋。屈曲して聞く口縁部に、内外に拡張した口縁端部が付く。144は瀬戸美濃産陶器の鉢。口縁

部は外側に折り返される。登窯第10小期、19世紀中葉頃のもの。145は瀬戸産陶器の鉢で、登窯第2段階、17世紀後半から18世紀中葉頃のもの。

146・147は瀬戸産陶器の水甕。口縁端部が内側に突出し、外面にはヘラ状工具による流水文と櫛齒状工具による刺突文が施される。146は登窯第8小期(18世紀後葉)、147は登窯第9小期(19世紀初頭)である。148は瀬戸産陶器の擂鉢。高台が外側に突出し、内面は底まで一括した擂目が施される。登窯第11小期以降、19世紀後葉頃のもの。149は瀬戸産陶器の十能。把手部は中実で、全体に赤褐色の鉄軸が施される。150は瀬戸産陶器の植木鉢。黄色系の袖がかかる。登窯第7小期、18世紀中葉頃のもの。

151は軒平瓦。軒桟瓦かも知れない。瓦当面には唐草文が施される。瓦当面右上に押印があり、○に「川口」とある。

**25-3区黄褐色シルト層出土土器 (152~163)** 当調査区の第6層からまとまって出土したものである。廃棄の同時性は高いと考えられる。

152~156は土師器皿類。152・153はD形小皿、154はC形小皿。D形の2点は口縁部に油煙痕が着く。155は皿で、C形の大型のものか。あまり類例が無い。156は台付小皿で、中世後期のものに類似がある。

157は瀬戸産陶器の天目茶碗。登窯第5小期、17世紀後葉頃のもの。158は美濃産陶器の小杯。内面にトテン痕が3ヶ所ある。高台はケズリ出しである。登窯第3・4小期で、17世紀中葉のもの。

160~162は土師器鍋。頸部がややすぼまる形態のもの。17世紀後葉頃のものであろう。

163は常滑産陶器の甕。軟質である。17世紀後半頃のものであろう。

**25-3区灰色粘土層出土土器 (164~210)** 当調査区の第4層からまとまって出土したもので、廃棄の同時性は高いと考えられる。

164~170は土師器の小皿。164・165はB形、166~170はD形。D形の5点は法量差が見られるが、いずれも口縁部に油煙痕が見られ、灯明皿として用いられたことがわかる。

171は磁器碗で、中国明代の景德鎮窯産。内面見込みには呉須筆描の团龍文が表現されている。

172は肥前産陶器の碗。いわゆる「京焼風」である。

外面には呉須筆描で何か表現されている。17世紀後葉頃のもの。173は磁器の碗。瀬戸産と考えられるが、肥前の可能性もある。肥前ならば17世紀後葉頃のもの。174は肥前産磁器の小杯。呉須筆描で、内外面に山水文を施す。17世紀後葉頃のもの。

175は美濃産陶器の丸碗。釉は緑味の灰白色である。登窯第5～7小期、17世紀後葉から18世紀前葉のもの。176～178は瀬戸産陶器の天目茶碗。いずれも登窯第6小期、17世紀末から18世紀前葉のもの。

179は肥前産磁器の仏壇器。高台内面はドーム状に削る。17世紀後半から18世紀前葉のもの。180は肥前産磁器の大皿。高台はケズリ出し、内面見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。17世紀後半から18世紀初頭ころのもの。181は肥前・内山窯産と考えられる陶器の大皿。内面は木葉状の型押し文が見られる。内面見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。17世紀後葉頃のもの。182は肥前産磁器の大皿。内面には呉須筆描で木葉状の文様が施される。17世紀中葉から後葉頃のもの。

183は瀬戸産陶器の香炉。袴腰形である。輪高台を貼り付け、その外側に3方に脚部を付けるが、輪高台があるため、三足はほとんど機能していない。184は瀬戸産陶器の壺。口縁部上面は研磨されている。登窯第1段階、17世紀初頭から中葉頃のもの。185・186は瀬戸産陶器の擂鉢。185は登窯第6小期で17世紀末から18世紀前葉頃、186は登窯第1段階のものである。

187は常滑産陶器の甕。断面の観察から、成形時に内側へ折り返している状況が確認できる。17世紀前半頃のものであろう。

188～210は土師器煮沸具類。188は十能で、把手部は欠損する。189・190は茶釜形。189は体部下半に锷があり、その下を内外面とも横方向にヘラケズリしている。191～193は羽釜形で、3個体とも形態が異なる。191は内彎する口縁部で内側に折り返しが見られる。192も口縁部は内彎し、口縁端部のみ外側へ聞く。193は「く」の字形に開く鍋に锷を付けたような形態である。

194～210は土師器鍋および焙烙。いずれも底部を除く体部下半の内外面に横方向のヘラケズリを施し、体部上半はオサエ・ナデ調整で仕上げるものである。

また、194を除き、口縁端部を内側に折り返す手法が見られる。鍋と焙烙を明確に区分できる基準は無いが、器高（想定を含む）と口縁部径の比が1：4以上のものを焙烙、それ以下のものを鍋としておく。

194は鍋。平底風で口縁部がややすぼり気味に立ち上がるるもの。南伊勢地域での系統が追えない形態で、あえて類例を探せば土佐（高知県）の中世後期事例に似る<sup>(6)</sup>。195はボール状の体部をなすもので、中世後期の鍋Cの系統である。

196・197は丸い体部に「く」の字形に開く口縁部が付く鍋で、系統的には中世後期の鍋Bにつながるものである。また、前述した羽釜193と形態的に類似している。

198～206は、やや尖り気味の底部で頸部があまり縮まらずに口縁部へと至る形態である。中世後期の鍋Bの系統と考えられる。上記の基準により、ここでは鍋に含めるが、焙烙との違いはほとんど無い。

207～210は焙烙。中世後期の鍋Bから分化して成立する器形である。207は図示するとかなり扁平なものとなる。破片資料のため、歪みが強い部分を反転実測した影響である可能性も考えておく必要がある。209・210に見られる平底状の底部は、南伊勢系の焙烙で一般的に観察できるものである。

**25-4区出土遺物** (211～343) 25-4区は、全調査区を通じて土器の出土量が最も多かった調査区である。灰色シルト層に集中している。

211～273は土師器皿類。211・212は口縁部径が6cm程度の小形のもの。口縁部にヨコナデを施さないもので、小皿Aに相当する。213～219も口縁部径は6cm程度の小形品だが、口縁部はヨコナデが施され、底部と口縁部との間に屈曲がある。小皿Dの小形法量版と考えられる。

220～223は口縁部径が8cm内外のもので、小皿Cである。口縁部にヨコナデが施され、底部と口縁部との間に弱いながらも屈曲が見られる。224～231は口縁部径が8～10cm程度のもので、小皿Bである。底部と口縁部との間に弱い屈曲がある。底部が丸いのも特徴である。

232～241は口縁部径が10cmほど、242～272は口縁部径が11～13cmのもので、いずれも小皿Dである。口縁部にヨコナデが施され、底部と口縁部との間に

比較的明確な屈曲が見られる。口縁部に油煙痕が見られるものが多く、灯明皿として利用されることが多い器形と考えられる。

273は土師器皿。比較的厚手で、底部から屈曲を持ち、短い口縁部が付く。

274～287は土師器煮沸具類。274・275は茶釜形で、274は肩の張る形態をなす。276～278は羽釜。276・277はやや内側する口縁部だが、278の口縁部は直線的である。いずれも口縁端部を内面に折り返すものである。

279～283は鍋で、口縁部径は26～30cmである。284～287は焙烙で、口縁部径は30～40cmである。鍋・焙烙とともに、丸底の体部、あまり縮まらない頸部、短く開く口縁部という形態である。体部下半は、底部の中心を除きヘラケズリされる。

288は肥前産磁器の仏龕具。外面には呉須筆描で雨降文が施される。高台は、いわゆる「台形手尻」で、中実の脚部内面を断面台形に削り込んでいる。18世紀前葉頃のもの。289は肥前産磁器の猪口。外面には呉須繪にて草花文が表現される。口縁端部が無釉のため、蓋が伴うと考えられる。17世紀末頃のもの。290は肥前産磁器の小碗。外面には呉須筆描の施文があるが、内容は不明。釉薬が白濁しており、不良品と考えられる。18世紀前半頃のもの。291～293は肥前産磁器の碗。いずれも呉須筆描の施文があり、291・292は外面に草花文、293は見込みに葉が描かれている。292の外面は呉須コンニャク印判による竹文が施される。291・292は17世紀末から18世紀前葉、293は18世紀後半から19世紀初頭頃のもの。

294は肥前産白磁の碗。口縁部は直線的に広く聞く。乳白手で、「柿右衛門素地」とされるもので、施文の無いものは珍しい。17世紀末頃のもの。

295～298は肥前差磁器の皿。295は呉須筆描で外面にデフォルメされた唐草文(楓花文)、内面には草花文が施される。17世紀末から18世紀初頭頃のもの。296は呉須筆描で内面に花文、外面に捩花文を施す。17世紀末から18世紀初頭頃のもの。297は内面見込みに呉須筆描の团龍文が表現される。破断面には漆による焼き継ぎ痕が見られる。17世紀末頃のもの。298は呉須筆描で内面にS字連続文、外面に唐草文が表現される。17世紀末から18世紀初頭頃のもの。

299は肥前産青磁の鉢。内面は片影りで花文かと思われる文様が刻まれている。17世紀後半頃のもの。

300は肥前産白磁の壺。直口で、外面に白色釉が掛かる。口縁端部上端から内面にかけては無釉だが、頸部付近に一部施釉が見られる。

301～338は陶器。301は瀬戸産で猪口。登窯第8・9小期、18世紀後葉から19世紀前葉頃のもの。302～305は肥前産の碗。302は灰白色の釉を刷毛塗りする「刷毛目碗」で、18世紀前葉頃のもの。303～305は、いわゆる「京焼風陶器」。いずれも内面見込みに铁軸筆描で山水文を施す。17世紀末から18世紀前葉頃のもの。

306・307は碗で、306は肥前産ないしは瀬戸産。306は口縁部が直線的に聞くもの。307はケズリ出し高台のもの。いずれも17世紀後半から18世紀初頭頃のものと考えられる。

308～310は肥前産の皿。308は内面見込みの釉を丸く削り取っている(蛇の目釉剥ぎ)。肥前内山窯産と考えられ、17世紀後半から18世紀初頭頃のもの。309・310は「カブト鉢」と俗称される二段屈曲の皿。内面見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。309は18世紀前葉、310は17世紀末から18世紀中葉頃のもの。

311は美濃産の中皿。内面には鐵軸筆描で木葉文が表現される。口縁部に折りが見られる。登窯第7・8小期、18世紀中葉から後葉頃のもの。

312は肥前産陶器。いわゆる「陶胎染付」で、簡形火入、線香立てのような用いられる方をするもので、内面は無釉である。外面には呉須筆描で唐草文が表現される。17世紀末から18世紀前葉頃のもの。

313は備前産陶器の徳利。外面は「糸目」と呼ばれる横線文が施されており、「糸目徳利」とされるものである。底部外面には、正六角形の枠内に「赤」の字を配した刻印が押されている。17世紀末から18世紀前半頃のもの。

314は产地不明の猪口。京焼風である。外面は褐色釉、内面は白色釉である。

315～320は瀬戸美濃産の碗類。315は小碗で、登窯第6小期、17世紀末から18世紀前葉頃のもの。316～318は丸碗。318は外面に鐵軸と筆描灰釉が施される。318は登窯第3・4小期で、17世紀中葉のもの。316・317は登窯第6・7小期で、17世紀末から18世紀前葉

頃のもの。319・320は碗で、黒褐色・灰色の2色釉を掛け分けている。登窯第5～7小期、17世紀後葉から18世紀中葉頃のもので、319の方がやや古い様相を持っている。

321は美濃産で蓋物（合子）である。蓋が合うため、口縁端部のみ無釉としている。登窯第5・6小期、17世紀後葉～18世紀前葉頃のもの。

322は皿で、瀬戸産であろうか。底部はヘラ切りされる。323は瀬戸産の皿。腰が張り、口縁部は外反する。内面には鉄軸筆描による梅花文が施される。登窯第6・7小期、17世紀末から18世紀中葉頃のもの。324は瀬戸産の皿で「輪禿皿」。内面見込みに蛇の目釉刺ぎが見られる。登窯第5小期、17世紀後葉頃のもの。325・326は美濃産の皿で「摺繪皿」。いずれも内面には鉄軸摺繪による花文が表現される。登窯第6小期、17世紀末から18世紀前葉のもの。327は美濃産の中皿。内面には眞須筆描で木葉文が表現される。登窯第7小期、18世紀中葉頃のもの。

328は美濃産で、小壺。2方向に把手が付くと見られるが、出土した把手は1ヶ所のみである。底部と口縁部とは接合しないが、同一個体と考えられる。登窯第5～7小期、17世紀後葉から18世紀中葉頃のもの。

329～331は片口鉢で、329は瀬戸産、330・331は美濃産である。片口は、口縁部付近に入れた切り込みに接続させている。329は登窯第7小期で18世紀中葉頃、330・331は登窯第5小期で17世紀後葉頃のもの。

332～336は瀬戸産陶器の擂鉢。いずれも口縁下部に段を有して開く形態である。332は登窯第5小期、333・334は同第6小期、335・336は同第8小期のものである。

337は常滑産の陶器で火鉢かと考えられる。釉の無い、いわゆる「赤物」である。口縁部は丸く收められる。338は常滑（知多）産陶器の甕。口縁外側に面を有する、いわゆる「N」字状口縁である。口縁部の摩滅が顕著で、長期間使用されていたと考えられる。15世紀代のものである。

339～342は瓦。339は丸瓦で、凹面には綻目とケズリ痕がある。340は平瓦。凸面に成形時の外枠痕が見られる。341は軒桟瓦の軒丸瓦当面。三巴文と周囲に珠点が配される。342は軒桟瓦の軒平部瓦当面。唐草

文の一部が遺存する。

343は砥石。側面には原材からノコギリ状の工具で裁断した切断面が残る。泥岩製である。

### 3 木製品類

各地区から出土した木製品類をここにまとめた<sup>(1)</sup>。漆器・割物（344～349） 344～346は漆器皿。345は口縁端部のみ黒色を呈する漆で、内外面には橙色の漆を塗布している。高台部の欠損する344も同様な所作による調整が見られる。346は全面に赤褐色の漆が塗布されている。高台内面には「大吉」の文字が漆で書かれている。

347は漆器の椀。高台は柱状を呈する。内面は赤色の漆を塗布する。外面は黒色を呈する漆のみ、高台脛付に漆は塗布されていないようである。高台から見える木目からは、この椀は「ブンギリ法」でアラガタを作り、木目に並行する方向で木取りする「縦木取り」によって作られていると考えられる。

348は小形の折敷底板かと考えられる。側面にカブスがある。赤色の漆が塗られた面と黒色を呈する漆の面があり、赤色の漆の側が上面になると考えられる。漆が塗られた後に、中央付近に2ヶ所の孔が開けられている。

349はロクロ成形（削物）の大皿ないしは鉢。口縁端部は広い面を形成するが、体部側は薄く作られている。漆の塗布は見られない。

漆器の塗膜構造とその分析については、第V章を参照されたい。

曲物底板（350～353） 350～353は円形の底板。350は柄杓の底板か。351・352は桜の樹皮と考えられる綾紐が4方向（351は3ヶ所のみ残存）に見られる。353は外縁部が一段下がり、目釘穴がある。351～353は、小形の曲物の底板と考えられる。

箸（354） 354は白木製の箸。全長25.8cmなので、8.5寸の成形であろうか。両端が先細りに整形された両口箸で、面取りをしているため、断面は八角形を呈する。塗り箸ではないが、精緻な整形といえる。

棒状具・板材（355～360） 355は棒状の部材。断面方形に成形し、両端に円孔が見られる。圓面下方の円孔部分には、横方向の擦痕がある。356は小形の薄い板材。圓面左側は削れており、そこに小さな抉り

込みが見られる。

357は、一方を欠損するが、全体に丁寧な研磨が見られる棒状の道具。欠損部分側はさらに強く研磨され、細く整形されている。外面には漆状の付着物が数ヶ所観察できる<sup>(\*)</sup>。

358は薄い板材。曲物の残材とも考えられる。359もそれに類したものか。一端に目釘孔がある。360は方形に成形された板材で、一角に釘孔が見られる。蓋（361）361は樽の蓋と見られる。一部しか遺存していないが、復元した直径は32cm弱なので、内法の直径が一尺ほどとの樽の落とし蓋と考えられる。直径4cmほどの円形の穴がある。

車軸状木製品（362）362はロクロ製（剣物）で、中央には貫通する孔があり、鉄管が嵌め込まれている。孔の片方は漏斗状に開く。外側には、中心孔に達しない程度の深さで12方向に方形孔が盤で開けられ、別材が差し込まれていた。図上で下方とした側は、漆が塗られている。つまり、かなり丁寧な造作による製品といえる。

用途については断定できないが、車（人力車など）の車軸である可能性が高いと考えられる。他には、火消しの籠なども考えられるが、可能性は低い。

下駄（363）363は下駄の差歎。正面形は台形を呈する。枘は鋸で縦方向に刻みを入れた後、横方向から盤で不用材を除去して成形している。差歎の接地面はすり減り、使用時に付いたと考えられる小石も嵌まり込んでいる。

（伊藤）

### 【註】

（1）瀬戸美濃産陶磁器類の大部分は、藤澤良祐氏の実見のもと、型式・所属時期等をご教示頂いた。瀬戸美濃製品の時期は、藤澤氏ほか『愛知県史』別編窯業2中世・近世瀬戸系（2007年）に掲る。

（2）肥前産陶磁器類の大部分は、堀内秀樹氏の実見のもと、所属時期等をご教示頂いた。また、堀内氏「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年考察」〔江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ〕資料集、江戸陶磁土器研究グループ、1996年）、九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年』（2000年）を参照した。

（3）近世土師器類の区分は、伊藤裕像「円座近世墓群の出土遺物」〔円座近世墓群発掘調査報告〕三重県埋蔵文化財センター、2014年）および本書第VI章4に掲る。また、中世の南伊勢系土師器に関しては、伊藤裕像「南伊勢・志摩地域の中世土器」〔三重県史〕資料編考古2、三重県、2008年）を参照。

（4）藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』（高志書院、2008年）。

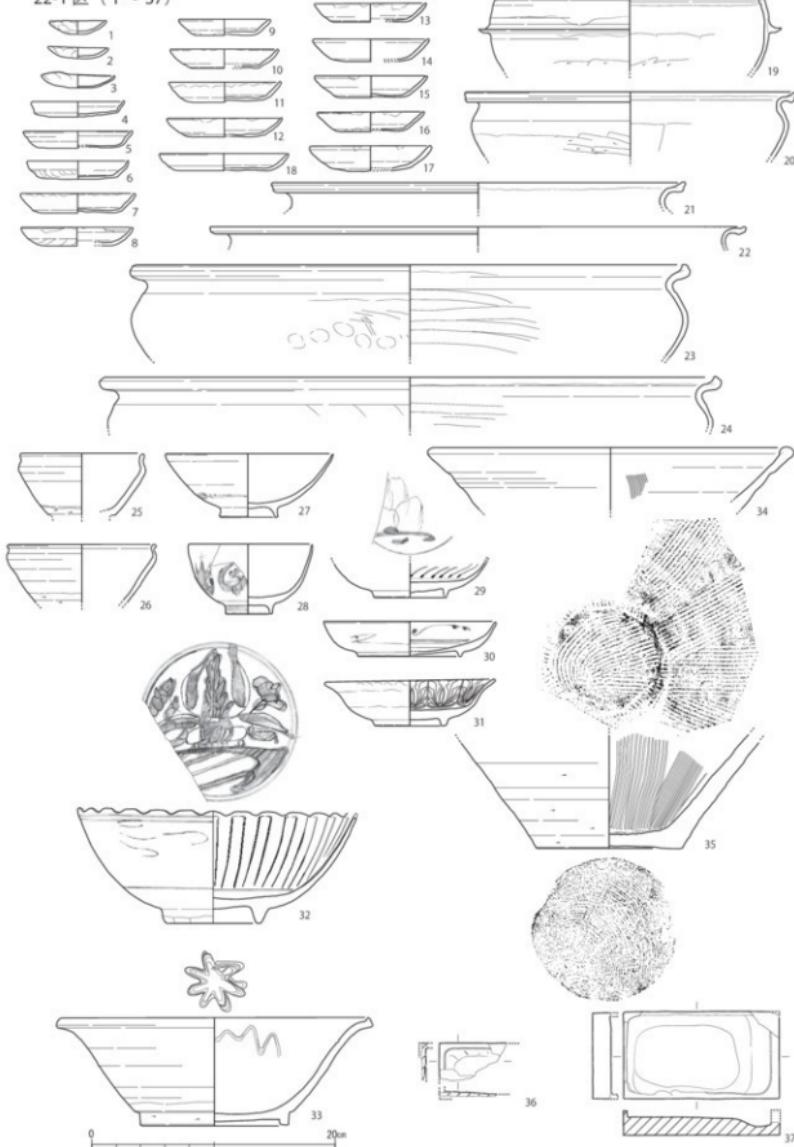
（5）近世の常滑産陶器については、中野晴久ほか『愛知県史』別編窯業3中世・近世常滑系（2012年）

（6）類例として、高知県春野町の木塚城跡出土資料を挙げておくが、もちろん直接的な関係は現状では想定できない。春野町教育委員会「木塚城跡」Ⅱ（2004年）。

（7）出土木製品については、江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』（柏書房、2001年）を参照した。

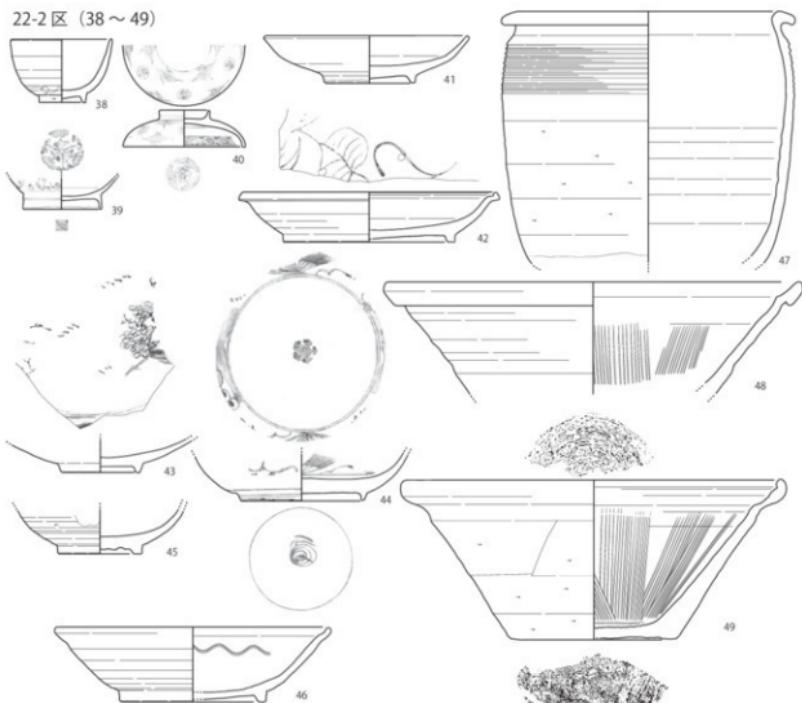
（8）保存処理を行った際、株式会社古環境研究所からその存在の指摘を受けた。

22-1 区 (1 ~ 37)



第7図 出土遺物実測図(1) (1:4)

22-2 区 (38 ~ 49)

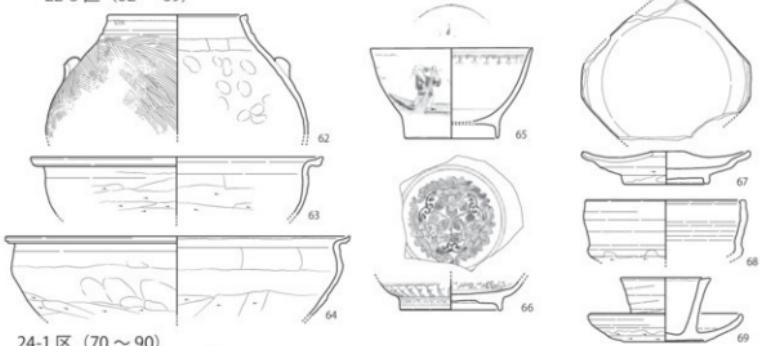


22-3 区 (50 ~ 61)

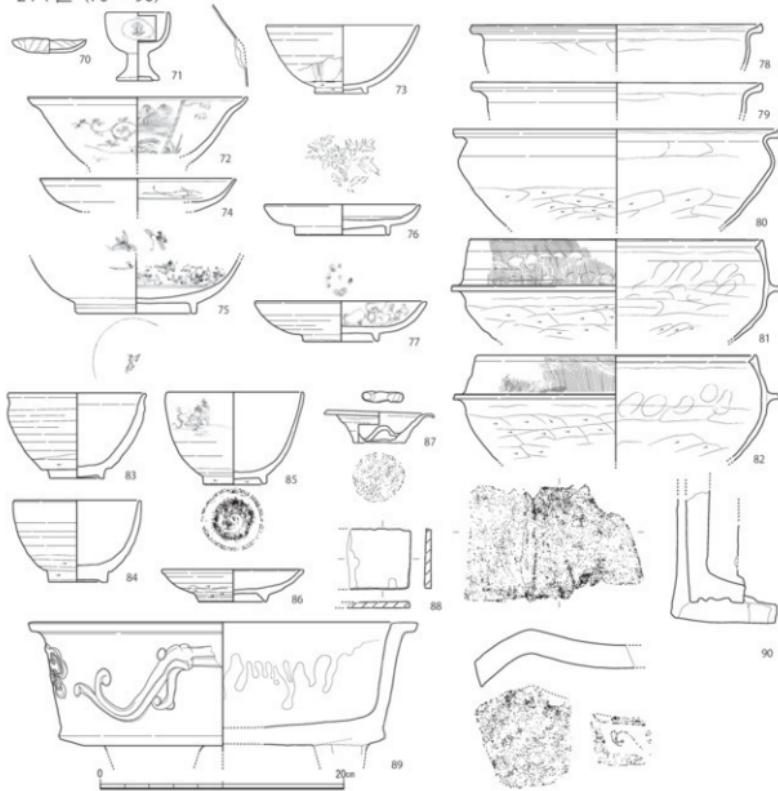


第8図 出土遺物実測図(2) (1:4)

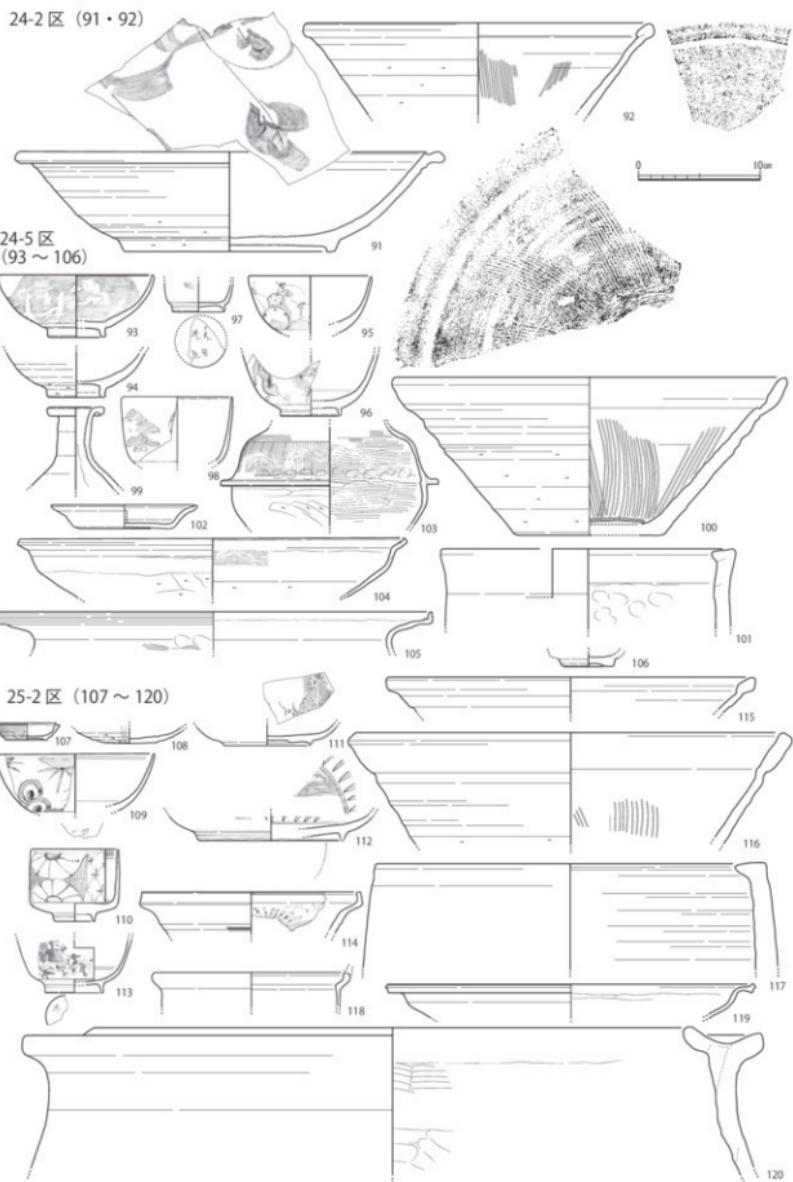
22-3 区 (62 ~ 69)



24-1 区 (70 ~ 90)

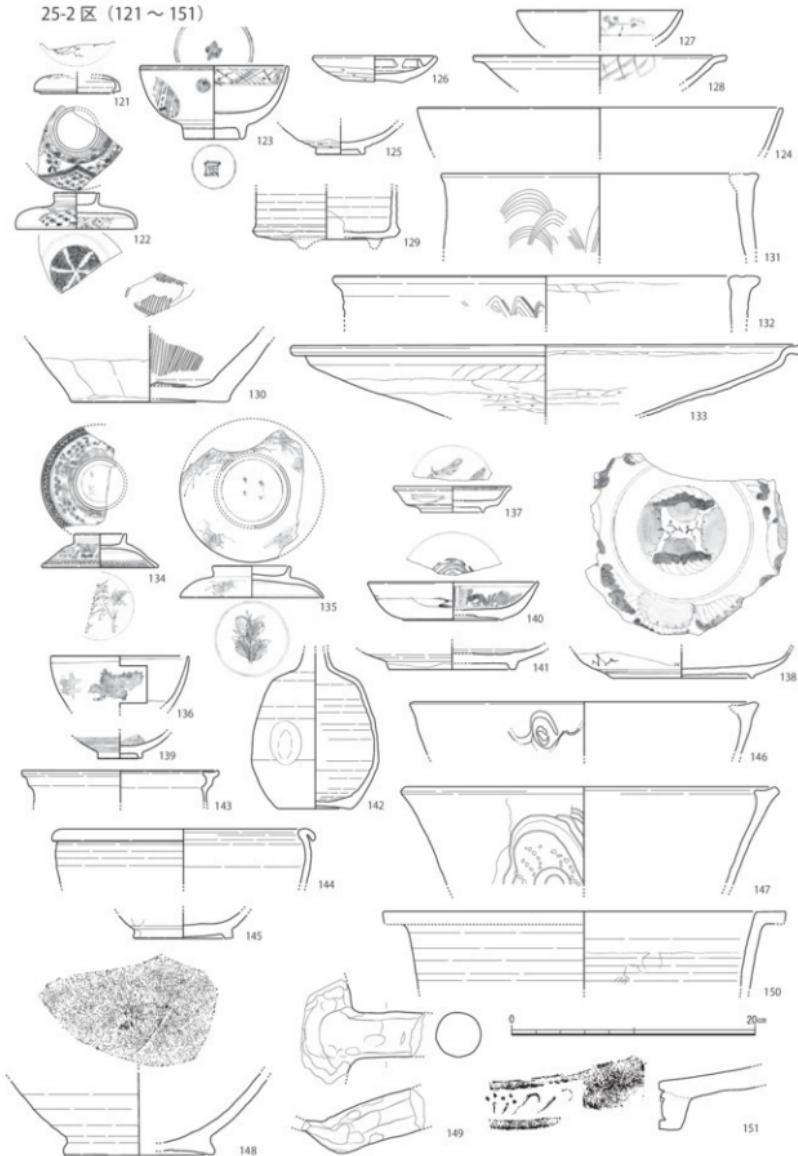


第9図 出土遺物実測図(3) (1:4)



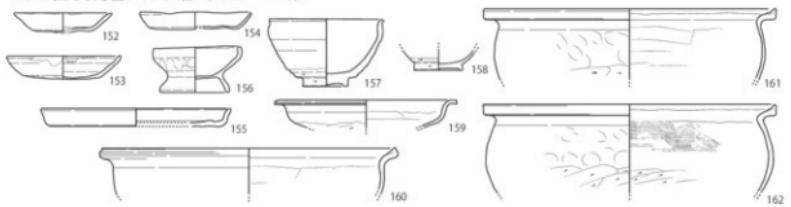
第10図 出土遺物実測図(4) (1:4)

25-2 区 (121 ~ 151)

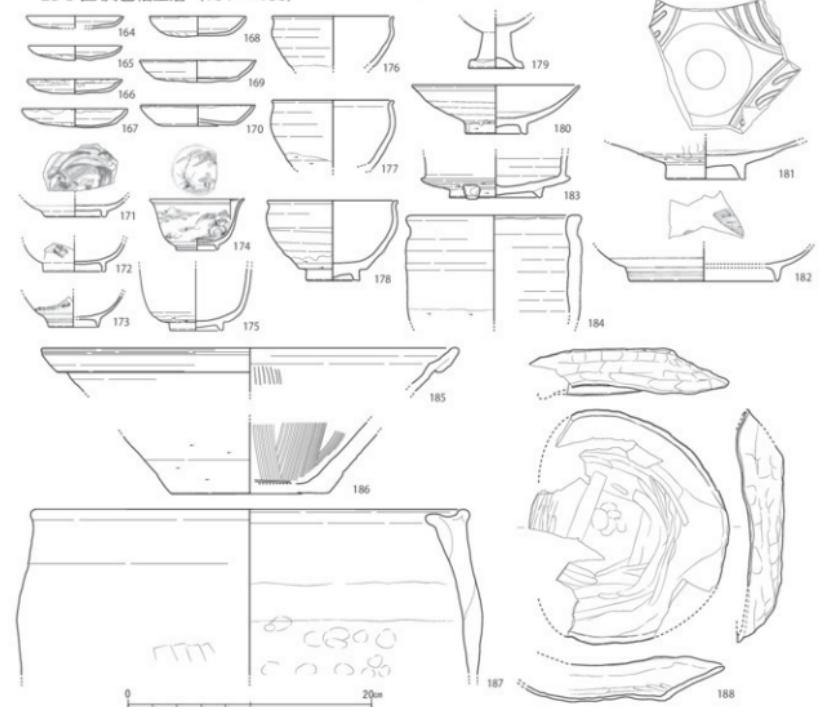


第11図 出土遺物実測図(5) (1:4)

25-3 区 黄褐色シルト層 (152 ~ 163)

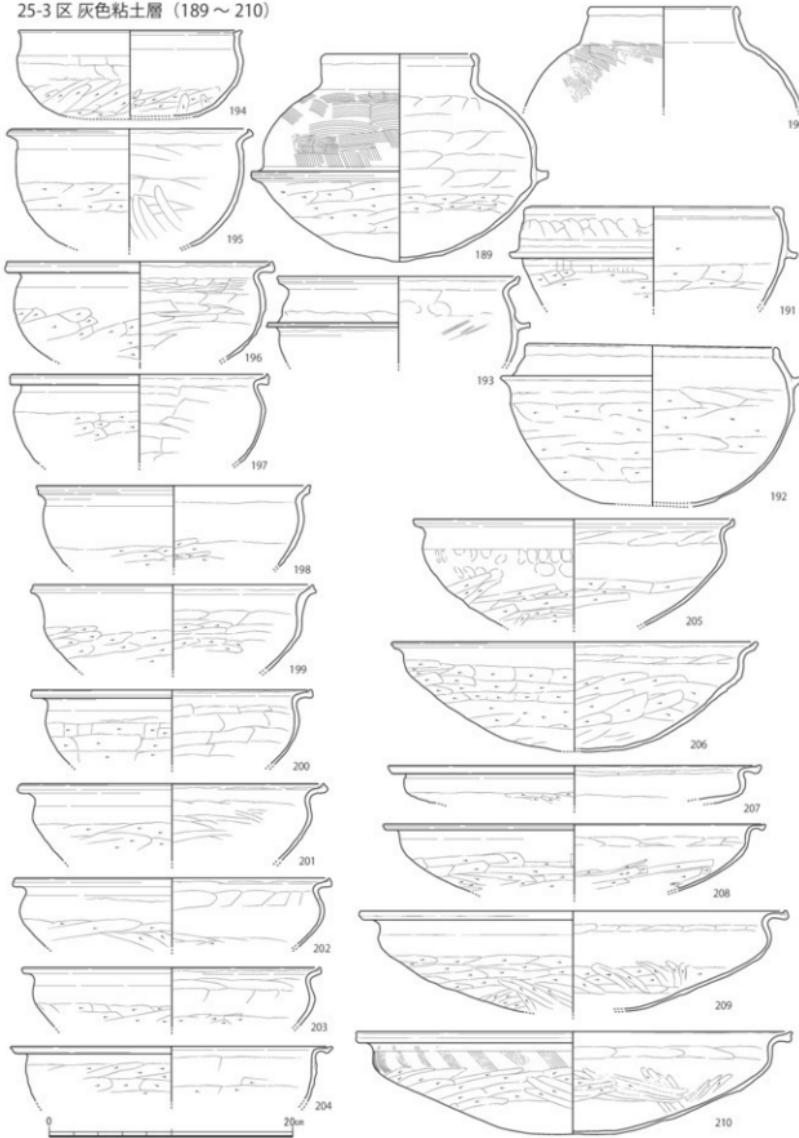


25-3 区 灰色粘土層 (164 ~ 188)



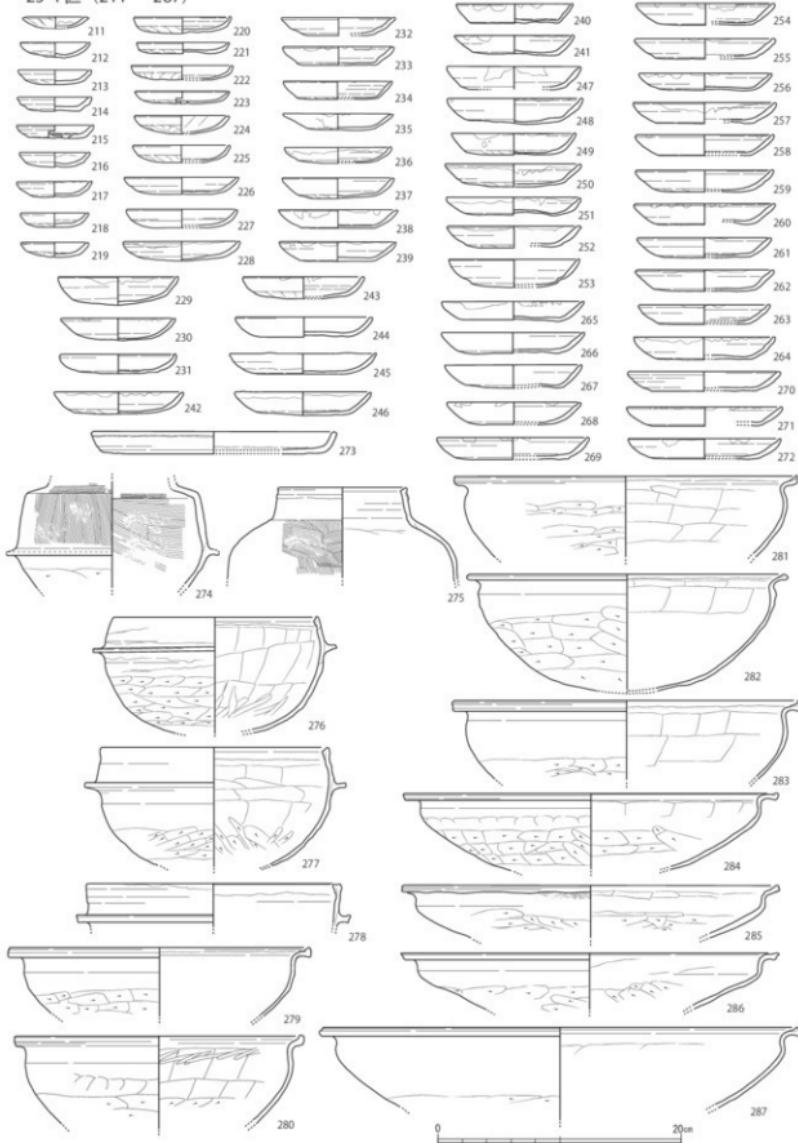
第12図 出土遺物実測図(6) (1:4)

25-3 区 灰色粘土層 (189 ~ 210)



第13図 出土遺物実測図(7) (1:4)

25-4 区 (211 ~ 287)



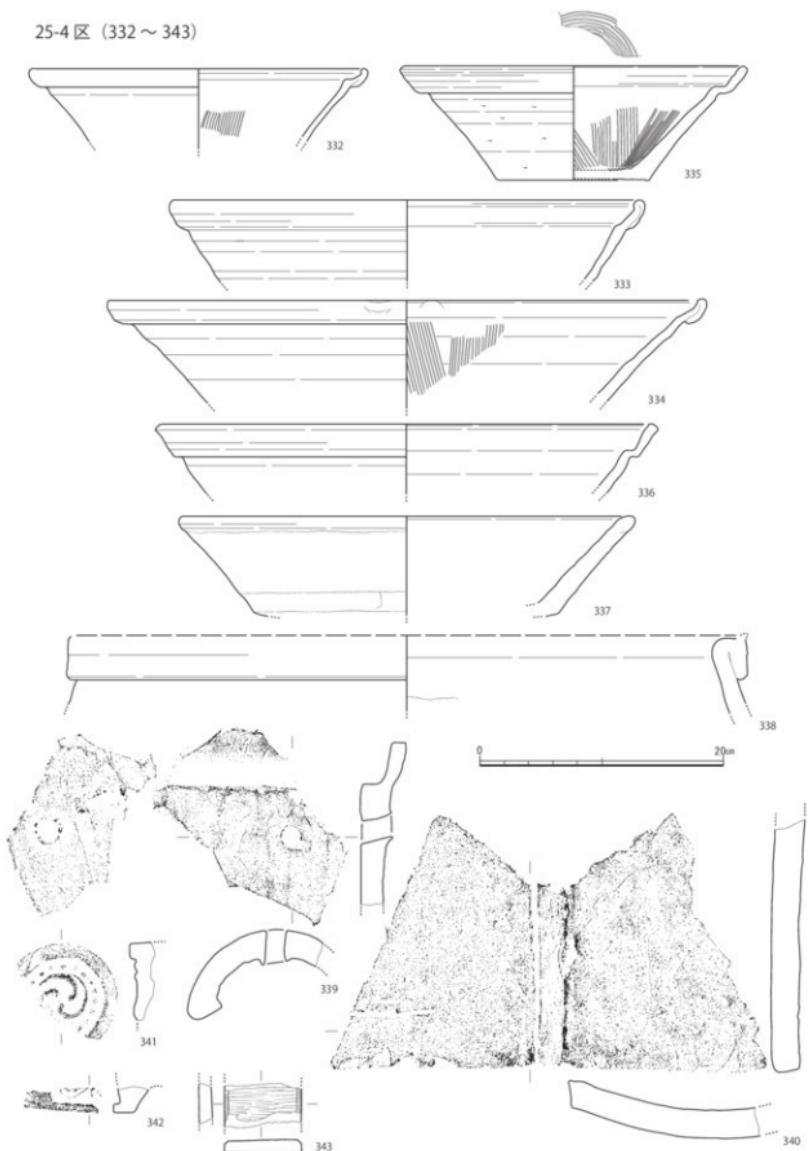
第14図 出土遺物実測図(8) (1:4)

25-4 区 (288 ~ 331)



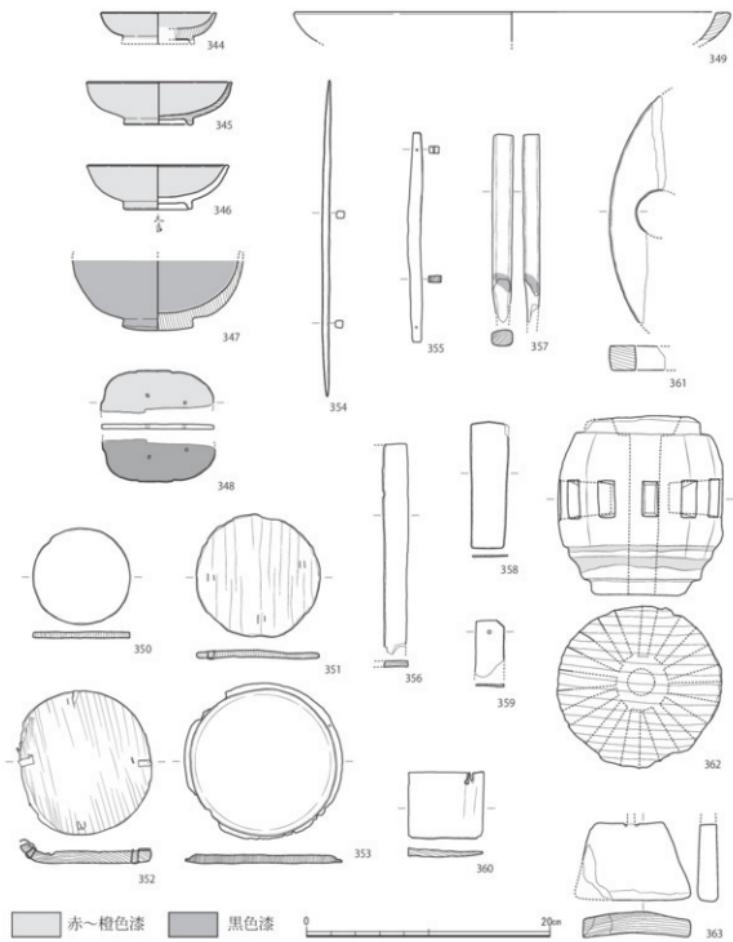
第15図 出土遺物実測図(9) (1 : 4)

25-4 区 (332 ~ 343)



第16図 出土遺物実測図(10) (1:4)

木製品 (344 ~ 363)



第17図 出土遺物実測図(11) (1:4)

第1表 高河原遺跡出土土器観察表(1)

番号	実測 値	様・質	度量	基準等	次数	造様・形名等	法面(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項	
1	6-5	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)4.6 (底)1.7 (高)0.9	内 オサエニナガ 内 ナガナガ	更	T3YR6/3に似る様	口縁4/12	小皿	
2	7-9	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)5.0 (底)1.7 (高)0.9	内 オサエニナガ 内 ナガナガ	更	T3YR6/2 白目	口縁3/12	小皿	
3	7-10	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)6.1 (底)1.7 (高)1.1	内 オサエニナガ 内 ナガナガ	更	T3YR7/8 程	口縁3/12	小皿 底面に成形時の孔	
4	8-9	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)7.6 (底)1.7 (高)1.1	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR6/3に似る裏面	口縁完形	小皿	
5	7-15	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)9.0 (底)1.7 (高)1.1	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR6/1 植付	口縁3/12	小皿 植付器	
6	7-2	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)9.4 (底)1.7 (高)1.1	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR6/4に似る裏面	口縁5/12	小皿	
7	6-1	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)9.5 (底)1.7 (高)1.1	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	S3Y7/6 程	口縁3/12	小皿 油煙痕	
8	7-6	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)9.5 (底)1.7 (高)1.1	内 ナガナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR6/4に似る裏面	口縁3/12	小皿 油煙痕	
9	6-7	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.5 (底)1.5 (高)1.5	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	Z3Y7/2 黒面	口縁3/12	小皿	
10	6-3	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	S3Y7/4に似る程	口縁2/12	小皿 油煙痕	
11	6-2	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR7/8 程	口縁6/12	小皿 油煙痕	
12	6-4	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR7/8 程	口縁4/12	小皿 油煙痕	
13	7-7	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 ナガナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	Z3Y7/1 黒面	口縁3/12	小皿 油煙痕	
14	7-4	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	T3YR7/4に似る程	口縁2/12	小皿 油煙痕	
15	6-6	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	Z3Y7/1 黑面	口縁3/12	小皿 油煙痕	
16	7-6	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)1.6 (底)1.6 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	S3Y7/6 程	口縁2/12	小皿 油煙痕	
17	7-1	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)10.0 (底)2.1 (高)1.6	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	S3Y7/6 程	口縁2/12	小皿 油煙痕	
18	6-6	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)10.6 (底)1.4 (高)1.4	内 オサエニナガコナデ 内 ナガナガコナデ	更	S3Y7/4に似る程	口縁2/12	小皿	
19	3-3	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)22.0 (底)1.6 (高)1.6	内 脱型付ナガニタコナデ 内 オサエニナガコナズミコナデ	やや 更	T3YR6/3に似る程	口縁1/12	外表面から下に保付器	
20	3-4	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)27.2 (底)2.2 (高)1.6	内 ナガニタココロコナデ 内 ナガニタココロコナデ	やや 更	S3Y7/4に似る程	口縁1/12	外表面から下に保付器	
21	8-7	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)34.0 (底)3.0 (高)1.6	内 ナガナガ 内 ナガナガ	更	T3YR6/2 黒面裏	口縁1/12	外表面に保付器	
22	8-3	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)44.0 (底)4.0 (高)1.6	内 ナガナガ 内 ナガナガ	更	S3Y7/1 黑面	口縁2/12	外表面に保付器	
23	8-1	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)45.6 (底)4.6 (高)1.6	内 工業付オサエニナガコナデ 内 ナガナガコロコ	更	Z3Y7/2 黑面	口縁1/12	外表面に保付器	
24	5-1	土器部	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)51.0 (底)5.0 (高)1.6	内 ナガニタココロ 内 ナガニタココロナナナ	更	T3YR7/2に似る裏面	口縁1/12	口縁外側に保付器	
25	1-4	陶器	高河原	皿口	天日葉模	22-1区	盆	(口)10.2 (底)1.6 (高)1.6	内 口沿付ズリ一筋脚 内 口沿付ズリ一筋脚	更	T3YR6/1 黑面 T3YR6/1 黑(縁)	口縁2/12	裏面第7小題 1bc中葉
26	1-3	陶器	高河原	皿口	天日葉模	22-1区	盆	(口)12.2 (底)2.0 (高)1.6	内 口沿付ズリ一筋脚 内 口沿付ズリ一筋脚	更	T3YR6/1 黑面 T3YR6/1 黑(縁)	口縁1/12	裏面第7小題 1bc中葉
27	2-4	陶器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)13.8 (底)2.0 (高)1.6	内 脱型付ナガニタコナデ 内 ナガナガコロコ	やや 更	T3YR7/1 黑(縁)	高台12/12	裏面付前部でない 裏面付は露組	
28	2-3	磁器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)15.0 (底)2.0 (高)1.6	内 塗装付シヤクマヨ(火炎火-7面脚)3-脚脚 内 有脚	更	NB 反白	高台12/12	1bc前半 裏付は露組	
29	2-2	磁器	高河原	皿口	22-1区	盆	(高)15.9 (底)5.9 (高)1.6	内 有脚 内 塗装付シヤクマヨ(火炎火-7面脚)3-脚脚 内 有脚	更	NB 反白 Z3Y7/1 反白 Z3Y7/1 反白	高台4/12	裏付のみ露組	
30	2-2	磁器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)14.2 (底)5.8 (高)1.6	内 安田式高脚盆 内 安田式高脚盆 内 有脚	更	Z3YR7/1 反白 Z3YR7/1 反白	口縁2/12	1bc前半 裏付は露組	
31	1-2	白磁	(伊万里)	皿口	22-1区	盆	(口)14.0 (底)5.8 (高)1.6	内 型脚付一筋脚 内 型脚付一筋脚	更	NB 反白	高台12/12	初期伊万里	
32	1-1	磁器	(伊万里)	皿口	22-1区	盆	(口)23.0 (底)6.0 (高)1.6	内 塗装ケツブリ-2-足付高脚盆 内 塗装ケツブリ-2-足付高脚盆 内 有脚	更	NB 反白 S3Y7/1 反白 高台12/12	初期伊万里 17c前半 裏付は露組 有脚が露		
33	2-1	陶器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)28.0 (底)8.0 (高)1.6	内 口沿付ズリ一筋脚盆 内 口沿付ズリ一筋脚盆 内 有脚	更	NB 反白 Z3Y7/1 反白 Z3Y7/1 反白	高台5/12	裏面系 露込みコチナ-底	
34	28-1	陶器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)30.0 (底)10.0 (高)1.6	内 固定ナガ付一筋脚 内 固定ナガ付一筋脚 内 有脚	更	Z3Y7/1 反白 S3Y7/2 反白 高台12/12	裏付12/12	裏付12/12 17c末	
35	4-1	陶器	高河原	皿口	22-1区	盆	(口)12.0 (底)12.0 (高)1.6	内 固定ナガ付一筋脚盆 内 固定ナガ付一筋脚 内 有脚	やや 更	T3YR6/2 反白 T3YR6/2 反白 高台12/12	裏面第1~4小題 17c前~中葉		
36	13-2	陶器	高河原	小口	22-2区	黑色シリ	(口)9.3 (底)3.8 (高)1.6	内 口沿付ケツブリ-2-足付高脚盆 内 有脚	やや 更	Z3Y7/2 反白 Z3Y7/2 反白	ほぼ完形	裏面第7小題 1bc中葉	
37	11-2	磁器	高河原	皿口	22-2区	黑色シリ	(高)16.5 (底)16.5 (高)1.6	内 安田式高脚盆 内 安田式高脚盆 内 有脚	更	NB 反白 高台9/12	「高河原」 1bc末 裏付は露組		
38	10-2	磁器	高河原	皿口	22-2区	黑色シリ	(口)10.0 (底)10.0 (高)1.6	内 安田式高脚盆 内 安田式高脚盆 内 有脚	更	NB 反白 高台9/12	「星科碗」の裏 1bc後半		
39	9-1	陶器	高河原	皿口	22-2区	黑色シリ	(口)10.9 (底)9.9 (高)1.6	内 安田式付一ロナガナ-底脚 内 安田式付一ロナガナ-底脚 内 有脚	やや 更	S3Y7/1 反白	春葉第1~2小題 17c後半~18c初頭		
40	9-4	陶器	高河原	皿口	22-2区	黑色シリ	(口)20.9 (底)4.1 (高)1.6	内 口沿付ズリ-2-足付高脚盆 内 安田式高脚盆 内 有脚	やや 更	S3Y7/1 反白 高台9/12	「星科碗」； 春葉第8~9小題 18c3/3~19c 内面にナラン		
41	11-3	磁器	(伊万里)	皿口	22-2区	黑色シリ	(高)16.5 (底)16.5 (高)1.6	内 安田式高脚盆 内 安田式高脚盆 内 有脚	更	NB 反白 高台11/12	初期伊万里 裏付は露組		

第2表 高原原跡出土土器観察表(2)

番号	実測値	様・質	地質	埋理等	次数	遺傳・器名	法面(cm)	調査・括注の特徴	出土	色・調	埋存度	特記事項
44	10-1	陶器	黄褐色	田	22-1層	褐色シルト	(厚)9.10	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削状 内、口付付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	瓦白 赤(裏付)	高台完存	18c後葉～19c初
45	9-2	陶器	灰戸	片口鉢	22-1層	褐色シルト	(厚)6.9	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	瓦白 赤(裏付)	底盤12-12	香葉第8-9小層 18c後葉～19c初葉 内側にチタン像3ヶ所
46	9-5	陶器	灰戸	三	22-1層	褐色シルト	(厚)9.11	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	瓦白 赤(裏付)	高台3-12	「被経瓦」
47	13-1	陶器	灰戸	三	22-1層	褐色シルト	(厚)24.1	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	25V8-2 瓦白	口縁2-12	豊葉第8小層 18c後葉
48	11-1	陶器	灰戸	環狀	22-1層	褐色シルト	(厚)24.4	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	25V8-2 瓦白	口縁2-12	豊葉第8小層 17c末～18c初葉
49	12-1	陶器	灰戸	環狀	22-1層	褐色シルト	(厚)31.7	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部に斜削付、直筒形	赤	25V8-3 瓦白	口縁2-12	豊葉第8小層 18c後葉
50	14-5	陶器	灰多	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)18.8	井口付直筒形、高台付、直筒形、底部付付、直筒形	赤	25V8-3 瓦白	高台9-12	「山羊頭」蟹多 環狀 高台に粗粒層 見込み に分化物付着
51	16-5	陶器	-	加工円盤	22-10層	褐色シルト	(厚)2.1	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	小片		鏡體部の転用
52	14-4	土師器	高伊勢	皿	22-10層	褐色シルト	(厚)9.7	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-3(2) 瓦白	口縁3-12	
53	17-1	陶器	灰戸	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)12.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(2) 瓦白 25V8-4(3) 瓦白(鉢)	口縁2-12	「筋毛目鉢」 豊葉第8小層 18c後葉
54	18-4	陶器	京都?	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)12.3	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(3) 瓦白 25V8-4(4) 瓦白(鉢)	高台12-12	粗粒が赤い 置付けは露胎
55	18-2	陶器	波佐見	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)9.6	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-7 瓦白	口縁7-12	「心ねむか手」 16c中葉～後葉 高台付は複数の打穴
56	15-2	陶器	肥前	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)11.8	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	高台12-12	内側にチタン像 三筋付 17c(4)の特徴 置付けは露胎	
57	15-3	青磁	肥前	鉢	22-10層	褐色シルト	(厚)14.7	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	高台12-12	13c中葉無鉛	
58	16-3	陶器	(伊万里)	鉢	22-10層	褐色シルト	(厚)17.6	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	高台8-12	細密伊万里 置付けは露胎	
59	16-1	青磁	肥前	碗	22-10層	褐色シルト	(厚)8.4	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-5(2) 瓦白(鉢)	口縁5-12	17c後半
60	17-2	陶器	高瀬	深水人	22-10層	褐色シルト	(厚)4.3	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	口縁5-12	豊葉第7小層 13c中葉 上面は棒円形
61	15-1	陶器	灰戸	環狀	22-10層	褐色シルト	(厚)15.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	底盤4-12	
62	14-1	土師器	高伊勢	高足A	22-10層	褐色シルト	(厚)11.5	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-2 瓦白	口縁4-12	外内に保付着
63	14-2	土師器	高伊勢	皿C	22-10層	褐色シルト	(厚)24.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-3(2) 瓦白	口縁1-12	
64	14-3	土師器	高伊勢	皿D	22-10層	褐色シルト	(厚)28.3	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(2) 瓦白	口縁1-12	外側に保、内側に露化物付着
65	29-2	陶器	肥前	碗	22-10層	褐紅色化	(厚)13.3	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	口縁3-12	「高麗碗」(大型) 18c末
66	29-3	陶器	肥前	碗	22-10層	褐紅色化	(厚)13.6	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	高台12-12	机の皿形高台 18c後葉 鏡頭が底付
67	29-1	陶器	美濃	皿	22-10層	褐紅色化	(厚)13.9	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	高台12-12	「舟形」 豊葉第5-6小層 17c後葉～18c初 頭
68	29-4	陶器	美濃	萬葉抄伊香	22-10層	褐紅色化	(厚)13.2	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-1 瓦白 25V8-2 瓦白	口縁3-12	豊葉第6小層 13c末～18c初葉 壁面は露化物付着
69	28-3	陶器	美濃	火照台	22-10層	褐紅色化	(厚)7.4	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-2 瓦白 25V8-4 瓦白	口縁3-12	豊葉第7小層 13c中葉 口縁部は露地
70	17-4	土師器	高伊勢	皿A	24-10層	灰	(厚)9.2	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白	歪み大きい	
71	20-4	陶器	肥前?	高麗A	24-10層	灰色色輪し	(厚)8.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-1 瓦白	口縁6-12	戸戸の可能性有り 18c後半 置付けは露地
72	23-4	陶器	肥前	鉢	24-10層	灰色色輪し	(厚)18.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白	口縁1-12	上面端は八角形 18c前半
73	23-1	陶器	灰戸高須	碗	24-10層	灰色色輪し	(厚)13.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-2 瓦白	高台11-12	「継麗碗」 18c末～19c初
74	24-3	陶器	(伊万里)	皿	24-10層	灰色色輪し	(厚)16.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	高台8-12	初期伊万里 1630-40年代	
75	20-3	陶器	肥前	鉢	24-10層	灰色色輪し	(厚)18.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-1 瓦白	高台12-12	「高麗碗」 18c中葉～後半 花文は織紋 花文は露地
76	23-2	陶器	美濃	皿	24-10層	灰色色輪し	(厚)12.8	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-1 瓦白	高台12-12	「高麗碗」 豊葉第5-6小層 17c後葉～18c初 頭
77	23-3	陶器	灰戸	皿	24-10層	灰色色輪し	(厚)14.2	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-2 瓦白	高台11-12	「継麗碗」 18c末～19c初
78	19-5	土師器	高伊勢	皿C	24-10層	灰色色輪し	(厚)16.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(2) 瓦白	口縁1-12	
79	19-3	土師器	高伊勢	皿C	24-10層	灰色色輪し	(厚)24.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-3(2) 瓦白	口縁1-12	外側に保付着
80	21-2	土師器	高伊勢	皿	24-10層	灰色色輪し	(厚)26.9	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-2 瓦白	口縁1-12	外側に保付着
81	21-1	土師器	高伊勢	皿A	24-10層	灰色色輪し	(厚)24.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(2) 瓦白 25V8-4(3) 瓦白	口縁1-12	外側に保付着
82	19-4	土師器	高伊勢	皿A	24-10層	灰色色輪し	(厚)23.0	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V8-4(2) 瓦白 25V8-4(3) 瓦白	口縁1-12	外側に保付着
83	19-2	陶器	美濃	天目茶碗	24-10層	灰色色輪し	(厚)11.4	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-1 瓦白	口縁1-12	豊葉第1小層 17c初頭
84	19-1	陶器	灰戸	丸瓶	24-10層	灰色色輪し	(厚)10.6	井口付直筒形、高台付、直筒形	赤	25V7-1 瓦白 25V7-1 瓦白	口縁8-12	豊葉第1小層 17c初頭

第3表 高河原遺跡出土土器観察表(3)

番号	実測 寸法	様式	底面	縁形等	次数	造形・形名等	法面(cm)	調査・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
85 21-3	陶器	京焼	碗	24-1区	灰褐色土	(口:11.9 底:7.6 高:5.2)	内:ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ出し→束縛鉢兼用 外:一条筋	素	23SY8-2 白底 23SY8-1 黒(糊)	口縦10-12	17c中葉 高台内に落款「漢水」	
86 17-3	陶器	美濃	丸皿	24-1区	支撑 圓盤	(口:11.7 底:6.7 高:5.7)	内:ロゴリカズレ→一筋斜	素	SYV1-1 白底 SYV1-2 ライフ質地	口縦9-12	曾葉第6小頭 17c末~18c初頭 内面に墨な字有	
87 22-2	陶器	伊賀?	皿	24-1区	丸	(口:2.6 底:2.0 高:4.2)	内:ロゴリカズレ→切妻 外:ロゴリカズレ→束縛鉢兼用 内:ロゴリカズレ→束縛鉢兼用	素	23SY8-4 直裏	口縦7-12		
88 18-1	陶器	美濃	屋	24-1区	褐色シルク (上唇)	(口:32.0 底:28.0 高:1.0)	ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ→正直縄台輪付(内:五 筋アラベスク)→束縛鉢兼用→束縛 内:ロゴリカズレ→一筋斜	素	23SY8-1 白底 (糊)	口縦2-12	曾葉第8小頭 18c後葉	
89 22-1	瓦		新桃瓦	24-1区	丸	(丸幅:12.0 厚:1.0)	白系(表面) 内:ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ→束縛 内:ロゴリカズレ→束縛	素	SYV8-1 素	瓦当部 4-12		
90 20-1	陶器	美濃	鉢	24-2区	褐色シルク (上唇)	(口:33.3 底:28.0 高:1.0)	内:ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ→一筋斜 内:ロゴリカズレ→束縛(内:花文)→一筋斜	素	23SY8-2 白底 23SY8-1 黒(糊)	6-12	「若原村」 曾葉第3~4小頭 17世紀中葉 表面は風化	
91 18-2	陶器	美濃	壺	24-2区	褐色シルク	(口:27.8 底:22.8 高:1.0)	内:ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ→束縛 内:ロゴリカズレ→束縛	素	SYR1-3 直裏	口縦2-12	模様1型 曾葉第5小頭 17c後葉	
92 24-6	陶器	美濃	碗	24-5区	SE1	(口:12.8 底:10.0 高:1.4)	内:柔軟カゼリ(内:束縛(深毛密度)) 内:柔軟カゼリ(内:束縛)	やわ やわ	(DW87-1) 24-6 直裏 (DW87-2) 24-6 直裏	高台5-12	「刷毛目模様」 曾葉第8小頭 18c後葉	
94 26-1	陶器	佐東?	碗	24-5区	SE1	(高:14.8 底:11.4 高:1.4)	内:柔軟カゼリ(内:束縛)	素	23SY8-1 白底 (糊)	高台2-12	高台部は黒斑	
95 24-1	磁器	波佐見	碗	24-5区	SE1	(口:10.2 底:8.0 高:1.0)	内:白系(表面)→雪輪文(内:團扇)	素	NB 白底 23GY1-1 勾絞灰 (糊)	口縦3-12	「らわんか手」 18c末~後葉	
96 24-5	磁器	戸戸美濃	碗	24-5区	SE1	(高:5.0 底:4.0 高:1.0)	内:朱色(表面)→内面不規則(内:束縛)→一筋斜 内:朱色(表面)→束縛(内:束縛)	素	NB 白底 (糊)	高台3-12	「唐伝模様」 曾葉第10~11小頭 18c前~中期 黒縁模様 曾葉付は黒斑	
97 26-2	磁器	肥前	小坪	24-5区	SE1	(高:14.4 底:11.4 高:1.0)	内:朱色(表面)→内面不規則(内:束縛)、高台に文字 内:束縛	素	23SY8-1 直裏 23SY8-2 直裏	高台3-12	「真白内に染付」(大羽祭紋)	
98 24-2	磁器	肥前	碗	24-5区	SE1	(口:9.2 底:7.0 高:1.0)	内:朱色(表面)→シラコ形(内:束縛)、束縛1-3筋斜	素	23SY8-1 白底 23GY1-1 勾絞灰 (糊)	口縦2-12	18c末~19c初 外面に焼成時の墨の斑痕	
99 24-4	陶器	美濃	浅利	24-5区	SE1	(口:2.7 底:2.0 高:1.0)	内:無縫隙 内:刷毛(一筋斜)	素	23SY8-1 白底 23SY8-2 白底	口縦3-12	曾葉第7小頭 18c中葉	
100 25-1	陶器	美濃	壺	24-5区	SE1	(口:32.4 底:24.9 高:11.9)	内:ロゴリカズレ→舌瓦ケツリ→一筋斜 内:ロゴリカズレ→束縛(内:束縛)	素	23SY8-2 白底 23SY8-2 直裏	口縦3-12	曾葉第7小頭 18c中葉 横縁	
101 27-1	磁器	不破	風炉	24-5区	SE1	(口:24.4 底:21.4 高:1.0)	内:ナガリヨコラジ 内:オホナ・ナガリ・ハマヤ	やや やや	SYR1-1 壁面	口縦3-12	口縦からA字の方形? 宮あり	
102 26-4	土師器	南伊賀	美濃置	24-5区	SE1	(口:12.0 底:10.0 高:1.0)	内:ユカリカゼリ 内:ナガリヨコラジ	やや やや	SYV8-5 素	底4-12	内面の擦痕は火炎	
103 26-5	土師器	南伊賀	美濃B	24-5区	SE1	(口:16.0 底:14.0 高:1.0)	内:ハマナカ・ヨコナダメ・ミコナダケズリ 内:オホナ・ナガリ・ハマヤ	やや やや	SYR8-4 にいり	口縦2-12	外間に探付有	
104 27-2	土師器	南伊賀	信濃A	24-5区	SE1	(口:32.0 底:28.0 高:11.9)	内:オホナ・ナガリ・ヨコナダメ・ミコナダケズリ 内:ハマナカ・ナガリ・ヨコナダメ・ミコナダケズリ	やや やや	SYV8-5 素	口縦3-12	外間に探付有、内面に化粧物付	
105 27-3	土師器	南伊賀	信濃	24-5区	SE1	(口:36.0 底:32.0 高:11.9)	内:オホナ・ナガリ・ヨコナダメ 内:ヨコナダメ	やや やや	DW87-2 白底	口縦3-12		
106 26-3	陶器	美濃	天日根碗	24-5区	SE1	(高:14.2 底:12.0 高:1.0)	内:柔軟カゼリ(内: 内:ナガリヨコラジ)	やや やや	23SY8-2 直裏 23SY8-1 黒(糊)	高台9-12	大業第4段階 16c末~17c初頭	
107 31-4	白磁	肥前	合子	25-2区	縁壁	(口:5.4 底:4.8 高:1.0)	内:刷毛(一筋斜) 内:無縫隙	素	23SY7-1 白底	口縦5-12	18c末	
108 31-5	陶器	美濃	明鏡	25-2区	縁壁	(口:4.2 底:3.8 高:1.0)	内:ロゴリカズレ	素	SYV1-2 白底 SYR0-2 直裏	底12-12	曾葉第10~11小頭 18c前~中期 内見込みに墨な字	
109 30-5	磁器	肥前	碗	25-2区	縁壁	(口:13.2 底:11.0 高:1.0)	内:朱色(表面)→雪輪文(内:團扇) 内:安治高須彌	素	NB 白底	口縦3-12	18c末~19c初	
110 30-2	磁器	肥前	碗	25-2区	縁壁	(口:7.4 底:6.0 高:1.0)	内:朱色(表面)→雪輪文(内:團扇) 内:安治高須彌	素	NB 白底	口縦3-12 「笠形模」 18c後葉~19c初 置付は黒斑		
111 30-4	青磁	信濃	五	25-2区	縁壁	(口:7.0 底:6.0 高:1.0)	内:ロゴリカズレ 内:無縫隙	素	NB 白底	底12-12	板の目立高須彌 18c1-2~18c初	
112 21-10	磁器	肥前	五	25-2区	縁壁	(口:11.0 底:10.0 高:1.0)	内:朱色(表面)→内面不規則(内:束縛) 内:刷毛(一筋斜)→束縛	素	NB 白底 23GY1-1 勾絞灰 (糊)	底12-12	17c後半 置付は黒斑	
113 30-3	磁器	美濃	碗	25-2区	縁壁	(口:14.8 底:12.8 高:1.0)	内:朱色(表面)→雪輪文(内:團扇) 内:安治高須彌	素	NB 白底	底14-12	曾葉第10~11小頭 18c2-4 高台内に黒縁が足の 置付は黒斑	
114 31-2	陶器	美濃	鉢	25-2区	縁壁	(口:18.0 底:16.0 高:1.0)	内:柔軟カゼリ 内:安治高須彌	素	23SY8-1 白底	口縦2-12 「葉子鉢」 曾葉第11小頭 18c3-4		
115 31-7	陶器	美濃	壺	25-2区	縁壁	(口:20.2 底:18.0 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ 内:無縫隙	やや やや	SYV1-1 白底 SYR0-1 にいり	口縦3-12	曾葉第5小頭 17c3-3	
116 33-1	陶器	美濃	壺	25-2区	縁壁	(口:36.4 底:34.4 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ→舌瓦ケツリ 内:ロゴリカゼリ→束縛	素	23SY8-1 白底 23SY8-2 直裏	口縦2-12	曾葉第7小頭 18c中葉	
117 31-9	陶器	美濃	要	25-2区	縁壁	(口:32.1 底:30.1 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ 内:無縫隙	素	23SY7-1 白底 SP83-1 直裏	口縦1-12		
118 31-2	陶器	不破	瓦片鍋	25-2区	縁壁	(口:16.3 底:14.3 高:1.0)	内:無縫隙 内:無縫隙	素	SYV8-1 にいり NB 黒(糊)	口縦2-12	京都か東か? 口縦部に墨付外の跡痕 あり	
119 31-4	土師器	南伊賀	信濃A	25-2区	縁壁	(口:30.0 底:28.0 高:1.0)	内:オホナ・ナガリ・ヨコナダメ 内:ヨコナダメ	やや やや	1DHW1-1 黑(糊)	口縦1-12		
120 31-6	陶器	美濃	要	25-2区	縁壁	(口:61.0 底:56.0 高:1.0)	内:ナガリヨコラジ 内:刷毛(一筋斜)	素	23SY7-1 白底 23SY8-1 にいり	口縦2-12	17c後半	
121 37-2	磁器	肥前	小舟合子	25-2区	瓦色粘土	(口:6.1 底:5.6 高:1.0)	内:朱色(表面)→雪輪文(内:團扇) 内:安治高須彌	素	SYV8-1 白底	口縦4-12 18c前半~中期 置付は露胎		
122 37-3	磁器	肥前	瓦	25-2区	瓦色粘土	(口:10.0 底:9.0 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ 内:安治高須彌	素	SYV8-1 白底 SYV8-2 黒(糊)	口縦4-12 18c前半~中期 置付は露胎		
123 37-4	青磁	信濃	明鏡	25-2区	瓦色粘土	(口:12.2 底:11.2 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ 内:安治高須彌	素	SYV7-1 白底 SYV7-2 黒(糊)	口縦12-12	18c末~19c前葉 置付は露胎	
124 38-4	青磁	肥前	鉢	25-2区	瓦色粘土	(口:30.0 底:28.0 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ 内:ロゴリカゼリ	素	SYV7-1 白底 SYV7-2 黒(糊)	口縦3-12	せんじ 曾葉第8小頭 18c3-3	
125 38-3	陶器	美濃	明鏡	25-2区	瓦色粘土	(口:14.1 底:12.0 高:1.0)	内:柔軟附けナデ・無縫隙	素	SYV8-1 白底 SYV8-2 黒(糊)	口縦6-12	せんじ 曾葉第8小頭 18c3-3	
126 37-5	陶器	美濃	明鏡	25-2区	瓦色粘土	(口:10.2 底:9.2 高:1.0)	内:ロゴリカゼリ→心臓(内:切り込み)→無縫隙 内:柔軟附けナデ・無縫隙	素	SYV8-1 にいり SYV8-2 黒(糊)	口縦3-12	曾葉第10~11小頭 18c2-3	

第4表 高原原跡出土土器観察表(4)

番号	実測番号	様・質	產地	埋理等	次數	遺傳・器名	法面(cm)	調査・括注の特徴	地土	色・調	残存度	特記事項
127	38-2	陶器	戸戸	皿	25-2区	灰色粘土	(D) 13.6	内・指輪 内・平行溝痕跡・内部不規則・縫合部→一部剥離	密	SYT-2 四角 SYT-2 灰白(中)	口縦4-12	食糞第8~9小期 1a(c3/3~1b(c1/3
128	38-1	陶器	戸戸	中皿	25-2区	灰色粘土	(D) 20.8	内・指輪 内・平行溝痕跡・斜格子文→一部剥離	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	食糞第7~8小期 1a(c2/2~2-3
129	38-5	陶器	戸戸	葉物香炉	25-2区	灰色粘土	(E) 12.0	内・ロウナリ→ヨウカセリ→縫合部付→一部剥離 内・指輪	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦4-12	食糞第6~7小期 1a(c4/4~1b(c2/2 近畿外金剛輪・御陵跡3ヶ所
130	38-6	陶器	戸戸	環狀	25-2区	灰色粘土	(E) 13.0	内・工芸ナガルホリ→一部剥離 内・環狀・縫合部付→一部剥離	密	SYT-1-2 皿 SYT-1 灰白(中)	口縦4-12	内面の研磨跡・食糞第1召層 1a(c1
131	39-3	土師質	?	火鉢	25-2区	灰色粘土	(D) 26.0	内・ナゲコナギテ・源流灰 内・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1 灰白	口縦1-12	
132	39-2	土師質	?	火鉢	25-2区	灰色粘土	(D) 35.2	内・ナゲコナギテ・源流灰 内・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1-2 ない・真横	口縦1-12	食糞面甚か?
133	39-1	土師質	南伊賀	埴輪	25-2区	灰色粘土	(D) 42.0	内・ナゲコナギテ・源流灰 内・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1-4 ない・真横	口縦2-12	外面上半に埋・内面下部に灰化物付着
134	39-2	磁器	把柄	壺	25-2区	褐色土 粘土・砂利・粘土	(D) 9.6 (E) 4.4 (F) 2.0	内・平行溝痕跡・壺・手・系・縫合部・頂部付・手付 内・縫合部付・手付	密	SYR-1 灰白	口縦4-12	「施瓦ニ」壺 1b(c中葉
135	39-1	磁器	把柄	壺	25-2区	褐色土 粘土・砂利・粘土	(D) 6.6 (E) 4.4 (F) 2.0	内・平行溝痕跡・壺・手・系・縫合部・手付 内・縫合部付・手付	密	SYR-1 灰白	口縦5-12	「広葉壺」壺 1b(c末 桶形・記載内容不明)
136	31-1	磁器	把柄	壺	25-2区	褐色粘土	(D) 11.4	内・平行溝痕跡・手付・縫合部付・ヨコナギ付	密	SGVY-1 灰白	口縦3-12	1a(c末~1b(c初
137	30-3	磁器	把柄	小皿	25-2区	褐色粘土	(D) 9.8 (E) 2.2 (F) 0.2	内・平行溝痕跡・内部不規則・縫合部付	密	SYR-1 灰白	高台5-12	1a(c後半~1b(c前葉 対付は眞助
138	30-1	磁器	把柄	皿	25-2区	褐色粘土	(E) 11.4	内・平行溝痕跡・壺・手・縫合部付・ヨコナギ付	密	SYR-1 灰白	高台5-12	1a(c末~1b(c前葉 対付は眞助
139	30-6	陶器	戸戸	碗	25-2区	褐色粘土	(E) 13.6	内・内凹入り・手・縫合部付・ヨコナギ付・縫合部付	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	高台11-12	「筋毛口碗」 食糞第9小期 1b(c初
140	30-4	磁器	戸戸美濃	皿	25-2区	褐色土 粘土・砂利・粘土	(D) 14.0 (E) 3.7 (F) 0.1	内・平行溝痕跡・壺・手・縫合部付・縫合部付	密	SYR-1 灰白	高台5-12	1b(c中葉
141	30-3	陶器	戸戸	中皿	25-2区	褐色粘土	(E) 10.8	内・ロウナリ→ヨウカセリ→一部剥離	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	高台2-12	食糞第3~4小期 1a(c2/3
142	33-3	陶器	戸戸	便利	25-2区	褐色粘土	(E) 6.0	内・ロウナリ→ヨコナギ付→縫合部付	やや 密	SYR-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦6-12	食糞第8小期以降 1b(c後葉~
143	36-5	陶器	戸戸	内耳瓶	25-2区	褐色土	(D) 16.2	内・縫合部付	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	
144	36-2	陶器	戸戸美濃	鉢	25-2区	褐色土 粘土・砂利・粘土	(D) 21.6	内・ロウナリ→一部剥離 内・ロウナリ	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	食糞第10小期 1b(c2/4
145	36-4	陶器	戸戸	鉢	25-2区	褐色土 粘土・砂利・粘土	(E) 18.2	内・平行溝痕跡・手付・縫合部付	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	食糞第2回層 1a(c2/4
146	32-2	陶器	戸戸	水差	25-2区	褐色粘土	(D) 28.6	内・ハサウエ工具による流水差・側突起・一部剥離	やや 密	SYT-1 灰白	口縦1-12	食糞第2小期 1b(c後葉
147	32-1	陶器	戸戸	水差	25-2区	褐色粘土	(D) 30.1	内・ハサウエ工具による流水差・側突起・一部剥離	やや 密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	食糞第9小期 1b(c初
148	34-1	陶器	戸戸	環狀	25-2区	褐色粘土	(E) 12.4	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付→一部剥離	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦4-12	食糞第11小層山 1b(c後葉 高脚なし
149	33-2	陶器	戸戸	十升	25-2区	褐色粘土	(E) 10.0	内・ナゲコナギテ	やや 密	SYR-1 灰白	琵琶小舟	
150	36-1	陶器	戸戸	粗木瓶	25-2区	褐色粘土	(D) 33.1	内・ロウナリ→一部剥離 内・ロウナリ	密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦1-12	食糞第7小期 1b(c中葉
151	34-2	瓦	新平瓦	25-2区	褐色粘土	(E) 10.0	内・セキナリ→ヨコナギ付 内・ヨコナギ付	粗	NK 灰 鮮紅色 8-12		瓦池	瓦池に「川口」の印
152	47-5	土師質	南伊賀	D	25-2区	下槽	(D) 8.0	内・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1 灰白 SYT-1 灰白(中)	口縦5-12	D型・口縦面に落CB埋蔵
153	47-4	土師質	南伊賀	D	25-2区	下槽	(D) 9.3	内・ヨコナギテ・ナゲコナギテ	密	SYT-1-3 ない	口縦5-12	D型・口縦面に落CB埋蔵
154	47-6	土師質	南伊賀	D	25-2区	下槽	(D) 9.2	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付	密	SYT-1 灰白	口縦4-12	C型
155	47-7	土師質	南伊賀	D	25-2区	下槽	(D) 10.6	内・ナゲコナギテ	密	SYT-1 灰白	口縦2-12	
156	47-2	土師質	南伊賀	D	25-2区	下槽	(D) 7.3	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付	やや 密	SYT-1-1 瓦池	口縦1-12	台付の軒の裏 内面に黒い付着
157	47-1	陶器	戸戸美濃	青瓦	25-2区	褐色粘土	(D) 9.4	内・ロウナリ→ヨコナギ付	密	SYT-1-2 灰白 SYT-1-2 灰白(中)	口縦5-12	口縦5-12
158	47-3	陶器	戸戸	小坪	25-2区	褐色粘土	(E) 10.5	内・セキナリ付・ヨコナギ付	密	SYT-1-2 灰白 SYT-1 灰白	高台11-12	食糞第3~4小期 1a(c2/3 内面にトドン依存
159	48-1	土師質	南伊賀	透底C	25-2区	褐色粘土	(D) 15.0	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付 内・工芸ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1 灰白	口縦2-12	小形透底
160	48-2	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 24.4	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付 内・工芸ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1-2 瓦池	口縦1-12	外蓋保付器
161	48-3	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 24.0	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付 内・工芸ナゲコナギテ	密	SYT-1 灰白	口縦1-12	外蓋保付器
162	48-4	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 24.0	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付 内・工芸ナゲコナギテ	密	SYT-1 灰白	口縦1-12	外蓋保付器
163	46-1	陶器	東原	窓	25-2区	褐色粘土	(D) 63.0	内・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1 灰白	口縦1-12	1b(c後半
164	59-7	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 8.0	内・ヨコナギテ・ナゲコナギテ 内・ユコオタニ・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1-2 瓦池	口縦2-12	
165	59-6	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 7.7	内・ロウナリ→ヨコナギ付	やや 密	SYT-1 灰白	口縦3-12	
166	59-5	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 7.8	内・ナゲコナギテ・ヨコナギ付	やや 密	SYT-1-3 ない	口縦2-12	口縦部に塗装
167	59-5	土師質	南伊賀	透底	25-2区	褐色粘土	(D) 8.0	内・ヨコナギテ・ナゲコナギテ 内・ユコオタニ・ナゲコナギテ	やや 密	SYT-1-3 ない	口縦1-12	口縦部に塗装

第5表 高河原遺跡出土土器観察表(5)

番号	実測 値	種類等	度量	次数	遺物・形名等	法面(cm)	調査・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
168 55-4	土師器	東伊賀	四口	25-3区	灰色粘土 (高)1.2	(口)8.0 (高)1.2	肉 ユビオナリ-ナデ-ヨコナヂ	黒	TSYR8/4にない様	口縁5/12	中空C形+D形? 口縁部に泥痕
169 55-1	土師器	東伊賀	四口	25-3区	灰色粘土 (高)1.6	(口)9.5 (高)1.6	肉 オリエ-ナデ-ヨコナヂ	やや 黒	TSYR8/4にない様	口縁5/12	口縁部に泥痕
170 55-2	土師器	東伊賀	四口	25-3区	灰色粘土 (高)1.7	(口)9.4 (高)1.7	肉 ナデ-ヨコナヂ	やや 黒	TSYR8/2にない異物	口縁5/12	口縁部に泥痕
171 52-1	磁器	中国(頃)	碗	25-3区	灰色粘土 (高)5.0	(底)15.0 (高)5.0	肉 磁器直腹碗(底付)一例	青	NB. 青白 TSYR7/1 須磨灰	底付5/12	裏邊縁、高台置付は露ぬ。のち研磨
172 54-2	陶器	肥前	碗	25-3区	灰色粘土 (高)5.2	(底)15.2 (高)5.2	肉 陶器直腹碗(底付)一例	青	TSYR7/2 須磨灰 TSYR7/3にない異物	底付12/12	須磨灰陶器、17c後業
173 52-3	磁器	窓戸	碗	25-3区	灰色粘土 (高)4.1	(口)7.5 (底)15.0 (高)4.1	肉 磁器直腹碗(底付)一例	青 白	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	底付11/12	登葉第10小類 肥前の可能性も有り(17c3/4) 青白は露ぬ
174 52-2	磁器	肥前	小杯	25-3区	灰色粘土 (高)3.6	(口)7.2 (底)15.0 (高)3.6	肉 磁器直腹碗(底付)一例	青	NB. 青白 TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	底付5/12	17c4.4 置付は露ぬ
175 54-1	陶器	美濃	丸瓶	25-3区	灰色粘土 (高)4.4	(口)10.0 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/2 須磨灰 TSYR7/3 須磨灰	高台12/12	登葉第5~7小類 17c3/3~18c1/3
176 53-6	陶器	窓戸	天井基盤	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)10.0 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁5/12	登葉第6小類 17c4~18c1/2 底部無輪
177 53-5	陶器	窓戸	天井基盤	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)10.0 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	登葉第6小類 17c4~18c1/2 底部無輪
178 53-4	陶器	窓戸	天井基盤	25-3区	灰色粘土 (高)4.4	(口)10.7 (底)15.0 (高)4.4	肉 ロウカズリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	登葉第6小類 17c4~18c1/2 底部無輪
179 54-4	磁器	肥前	仏頭瓶	25-3区	灰色粘土 (高)4.5	(口)14.5 (底)15.0	肉 指輪-リム-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-強輪	青	NB. 青白 TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	底付11/12	17c復元?~18c前業
180 53-1	磁器	肥前	皿	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)13.8 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁7/12	17c復元?~18c前業
181 52-5	陶器	肥前	皿	25-3区	灰色粘土 (高)4.6	(口)14.0 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨロクレヨリ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	底付12/12	内山窯 17c後業
182 52-4	磁器	肥前	皿	25-3区	灰色粘土 (高)4.6	(口)14.0 (底)15.0	肉 磁器直腹碗(底付)一例	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	底付3/12	17c4.4 置付は露ぬ
183 54-5	陶器	窓戸	香炉	25-3区	灰色粘土 (高)7.6	(口)14.5 (底)15.0	肉 ロウカズリ-一例台付碗(ヨコナヂ-強輪)	青 白	TSYR7/2 須磨灰 TSYR7/3 須磨灰	底付5/12	内面無輪 口付ののみ残
184 53-3	陶器	窓戸	香	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)14.4 (底)15.0	肉 ロウカズリ-ヨリ-強輪	青 白	TSYR7/2 須磨灰 TSYR7/3 須磨灰	口縁1/12	登葉第1~4小類 17c4~18c2/3 口縁部は研磨
185 54-3	陶器	窓戸	蘆薈	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)34.2 (底)15.0	肉 ヨコナヂ-強輪	青	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	登葉第6小類 17c4~18c1/3
186 53-2	陶器	窓戸	蘆薈	25-3区	灰色粘土 (高)4.0	(口)13.0 (底)15.0	肉 ヨコナヂ-強輪	青 白	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	登葉第1~4小類 17c4~18c2/3
187 49-1	陶器	東濃	壺	25-3区	灰色粘土 (高)7.6	(口)16.0 (底)15.0	肉 工芸ナ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁6/12	内面化物付唇
188 51-1	土師器	東伊賀	千足	25-3区	灰色粘土 (高)8.2	(口)19.2 (底)15.0	肉 ユビオナリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青	TSYR7/2 須磨灰 TSYR7/3 須磨灰	体側的 5/12	外蓋側
189 45-1	土師器	東伊賀	高足B	25-3区	灰色粘土 (高)13.0	(口)13.0 (底)15.0	肉 土師器-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰 TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
190 42-1	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)13.0	(口)12.6 (底)15.0	肉 ハラタケ-ヨコナヂ	青	TSYR8/1 須磨灰	口縁2/12	外蓋保付唇
191 49-2	土師器	東伊賀	高足C	25-3区	灰色粘土 (高)13.0	(口)21.3 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1にない異物	口縁6/12	外蓋保付唇
192 40-1	土師器	東伊賀	高足D	25-3区	灰色粘土 (高)13.0	(口)20.9 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青	TSYR8/2 須磨灰	口縁12/12	外蓋側から下に保付唇下間に化物付唇
193 40-2	土師器	東伊賀	高足C	25-3区	灰色粘土 (高)13.0	(口)19.9 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
194 43-3	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)18.4	(口)18.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
195 41-1	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)20.2	(口)20.2 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇下間に化物付唇
196 43-1	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)22.1	(口)22.1 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
197 41-2	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)21.4	(口)21.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
198 42-2	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)22.5	(口)22.5 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇
199 44-1	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)23.4	(口)23.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁6/12	外蓋保付唇
200 44-2	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)23.5	(口)23.2 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/1 須磨灰	口縁5/12	外蓋保付唇
201 41-3	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)25.5	(口)25.5 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/3にない異物	口縁2/12	外蓋保付唇下間に化物付唇
202 42-1	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)26.2	(口)26.2 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/3にない異物	口縁3/12	外蓋保付唇
203 50-3	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)24.6	(口)24.6 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/3にない異物	口縁8/12	外蓋保付唇
204 40-3	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)26.4	(口)26.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/4にない異物	口縁3/12	外蓋保付唇
205 50-2	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)26.4	(口)26.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/3にない異物	口縁3/12	外蓋保付唇下間に化物付唇
206 51-2	土師器	東伊賀	高足	25-3区	灰色粘土 (高)30.1	(口)30.1 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/3にない異物	口縁11/12	外蓋保付唇
207 42-2	土師器	東伊賀	高足A	25-3区	灰色粘土 (高)30.6	(口)30.6 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/2にない異物	口縁3/12	外蓋保付唇
208 50-1	土師器	東伊賀	高足A	25-3区	灰色粘土 (高)31.4	(口)31.4 (底)15.0	肉 ユツクシ-ヨリ-ヨロクレヨリ-ヨコナヂ-ヨコナヂ	青 白	TSYR7/2 須磨灰	口縁3/12	外蓋保付唇

第6表 高原原跡出土土器観察表(6)

番号	実測番号	様・質	産地	整理等	次数	遺物・器名等	法面(cm)	調査・括注の特徴	地土	色・調	種序度	特記事項
209	44-3	土師器	高伊賀	焼成A	25-35X	灰色粘土	(D)35.2	内.オモテ・ナデー・コナデ・ケズリ 内.エヌ・タコ・タコナデ・ケズリ	やや 湿	TEYRA1/1 深灰	口縁6-12	外壁保、内底皮化物付着
210	51-1	土師器	高伊賀	焼成A	25-35X	灰色粘土	(D)35.8 (E)8.4	内.ナデー・ハマーメ・ヨロナデ・ケズリ 内.エヌ・タコ・タコナデ・ケズリ	湿	TEYRA1/1 黄白	口縁11-12	外壁底部以外に僅、内底の見込みに皮化物付着
211	57-12	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.6 (E)1.0	内.ナデー・サス・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	口縁部に油煙痕
212	57-11	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.7 (E)1.0	内.ナデー・サス	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁12-13	口縁部に油煙痕
213	57-5	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.1 (E)1.0	内.ナデー・サス・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 未焼	完形	
214	57-6	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.1 (E)1.0	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁11-12	
215	57-1	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.3 (E)1.1	内.ナデー・サス・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	完形	底成後底部に穿孔
216	57-10	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.7 (E)1.1	内.ナデー・サス・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	完形	
217	57-7	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.2 (E)1.2	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁部に油煙痕	
218	57-8	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.6 (E)1.2	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	
219	57-9	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.7 (E)1.2	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 未焼	口縁8-12	口縁部に油煙痕
220	56-10	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.0 (E)1.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁10-12	
221	57-3	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)17.8 (E)1.2	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁5-7	
222	56-9	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)16.4 (E)1.2	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	口縁6-12	
223	57-2	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)17.8 (E)1.0	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	底成後底部に穿孔	
224	57-4	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)17.8 (E)1.0	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	
225	56-11	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)18.0 (E)1.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 未焼	口縁5-7	
226	56-3	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.4 (E)1.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	口縁3-7	
227	56-8	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 未焼	口縁3-7	
228	56-4	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)2.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/1 黄灰	口縁4-12	口縁部に油煙痕
229	59-5	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)2.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/2 黄灰	口縁8-12	口縁部に油煙痕
230	60-5	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.4 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/1 黄白	完形	口縁部に油煙痕
231	56-2	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁5-7	
232	56-5	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.4 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/2 黄灰	口縁4-12	口縁部に油煙痕
233	56-6	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.2 (E)1.5	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	口縁部に油煙痕
234	56-7	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.5	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 未焼	口縁3-7	口縁部に油煙痕
235	61-6	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.4	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁8-12	口縁部に油煙痕
236	59-10	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.8 (E)1.3	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/6 黄	口縁4-12	口縁部に油煙痕
237	59-11	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.7 (E)1.7	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	25Y1/2 黄灰	口縁5-7	
238	59-7	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁6-12	口縁部に油煙痕
239	59-9	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 未焼	口縁4-12	口縁部に油煙痕
240	59-8	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁3-7	油煙痕
241	60-7	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.8 (E)1.5	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	完形	口縁部に油煙痕
242	60-4	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.6 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.エヌ・タコ・タコナデ・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	口縁11-12	口縁部に油煙痕
243	59-6	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 未焼	口縁4-12	口縁部に油煙痕
244	58-11	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.1 (E)1.8	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	
245	60-2	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.6	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁4-12	
246	60-1	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.1 (E)1.9	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	口縁12-12	口縁部に油煙痕
247	61-5	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.9	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	口縁3-12	口縁部に油煙痕
248	60-3	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.1 (E)2.1	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA4/2 ない真積	完形	口縁部に油煙痕
249	60-6	土師器	高伊賀	Ⅲ	25-4X	灰色シルト	(D)19.0 (E)1.8	内.ナデー・サス・ヨロナデ 内.ナデー・ヨロナデ	やや 湿	TEYRA3/2 ない真積	口縁4-12	口縁部に油煙痕

第7表 高河原遺跡出土土器観察表(7)

番号	裏面 番号	様・質	底面	縁様等	次放	邊様・形名等	法面(cm)	調査・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
250 56-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.2 (底)1.7 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/1 黒灰	口縁部に埋理痕		
251 61-7	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.0 (底)1.5 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/1 地區	口縁部に埋理痕		
252 58-12	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.0 (底)1.7 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
253 59-4	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)10.8 (底)2.3 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
254 58-8	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.4 (底)1.7 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
255 58-7	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.6 (底)1.7 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
256 61-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)10.9 (底)1.4 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/2 黒灰	口縁部に埋理痕		
257 58-5	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.8 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
258 58-6	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.4 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
259 58-10	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.4 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
260 58-9	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.4 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
261 59-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
262 59-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.4 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
263 59-3	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)10.8 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
264 60-10	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.6 (底)1.9 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/2 黑灰	口縁部に埋理痕		
265 60-6	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.8 (底)1.6 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/1 地區 完形	口縁部に埋理痕		
266 61-4	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.6 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
267 60-9	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)11.2 (底)1.6 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/2 に点状 TSYR8/2 に点状	口縁部に埋理痕		
268 61-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.9 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
269 58-4	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
270 58-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
271 58-6	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
272 58-3	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)12.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	やや 薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
273 61-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)20.2 (底)1.6 肉	内:ユガモエヌナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕		
274 60-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)14.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
275 70-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)10.6 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕	口縁部に埋理痕あり	
276 68-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)16.8 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/4 に点状 TSYR8/4 に点状	口縁部に埋理痕	口縁部に埋理痕	
277 68-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)18.8 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/2 塗膜灰	口縁部に埋理痕	口縁部に埋理痕	
278 71-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)21.0 (底)1.6 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に埋理痕		
279 71-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)24.9 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/2 塗膜灰	口縁部に埋理痕	外面に剥がれた痕跡あり	
280 69-3	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)23.8 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/2 反覆灰	口縁部に埋理痕	外面に剥がれた痕跡付近まで化物付帯	
281 70-3	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)28.1 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/2 塗膜灰	口縁部に埋理痕	外面に剥がれた 番内下半は黒変	
282 72-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)26.3 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/2 黒變 TSYR8/2 黒變	口縁部に剥がれ 口縁部に剥がれ	外面に剥がれ、口縁下半は黒変	
283 71-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)28.7 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/2 塗膜灰	口縁部に剥がれ	外面に剥がれ、内面が黒変	
284 72-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)30.8 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/3 に点状 TSYR7/3 に点状	口縁部に剥がれ	口縁部に剥がれ	
285 69-2	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)31.0 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/2 黑變	口縁部に剥がれ		
286 69-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)31.0 (底)2.4 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR8/3 に点状 TSYR8/3 に点状	口縁部に剥がれ		
287 70-1	土器部	東伊賀	四	25-4区	灰色シルト	(口)39.5 (底)3.5 肉	内:ナ-サツナ-ヨコナヂ 外:ナ-サツナ-ヨコナヂ	薄	TSYR7/4 に点状 TSYR7/4 に点状	口縁部に剥がれ	外面に剥がれ	
288 80-2	磁器	肥前	四	25-4区	灰色シルト	(口)1.0 (底)0.8 肉	内:白 外:青 内:青 外:白	白 白	TSYR8/1 白在灰 TSYR8/1 白在灰	口縁部は「白台手足」 青は「白」	高台は「白台手足」 青は「白」	
289 62-6	磁器	肥前	四	25-4区	灰色シルト	(口)4.8 (底)4.2 肉	内:青 外:白	青 白	TSYR7/2 塗膜灰 TSYR7/2 塗膜灰	口縁部は「白台手足」 青は「白」	高台は「白台手足」 青は「白」	
290 80-3	磁器	肥前	四	25-4区	灰色シルト	(口)8.2 (底)7.5 肉	内:青 外:白	青 白	TSYR7/3 白在灰 TSYR7/3 白在灰	口縁部は「白台手足」 青は「白」	高台は「白台手足」 青は「白」	

第8表 高原原跡出土土器観察表(8)

番号	実測番号	様・質	産地	埋理等	次数	遺傳・器名等	法面(cm)	調査・挂注の特徴	地土	色 調	残存度	特記事項
291	75-4	磁器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 11.4 (2) 5.1 (3) 3.0	内 奈竹内造業者(草花文・圓窓2)一張輪 内 奈竹内造業者(草花文・圓窓2)一張輪 (1) 10.0 (2) 4.8 (3) 3.8	泥	NB: 灰白	口縁6-12 25GV1/1灰白(1脚)	17.0cm~18.0cm 豊付は露地 体部外面に無 縫合跡あり
292	75-3	磁器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 11.0 (2) 5.0 (3) 3.8	内 奈竹内造業者(草花文・圓窓2)一張輪 内 奈竹内造業者(草花文・圓窓2)一張輪 (1) 11.0 (2) 5.0 (3) 3.8	泥	NB: 灰白 25GV1/1灰白(1脚)	口縁6-12 17.0cm~18.0cm 豊付は露地	
293	62-3	磁器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 11.6 (2) 5.0 (3) 3.8	内 奈竹内造業者(内平手)一張輪 内 奈竹内造業者(内平手)一張輪	泥	SIV/1 灰白	高台6-12 「望月屋」 18.0後半~19.0初	
294	80-1	白磁	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 11.0 (2) 5.0 (3) 3.8	内 壁輪	泥	白色	高台5-12 乳白手(終右奥葉束) 17.0末 豊付は露地	
295	79-2	磁器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 11.4 (2) 5.8 (3) 3.6	内 奈竹内造業者(留文・圓窓4)一張輪 内 奈竹内造業者(留文・圓窓4)一張輪	泥	TSIGV1/1留縫底	口縁5-12 17.0cm~18.0cm 豊付は露地	
296	62-4	磁器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 11.2 (2) 5.0 (3) 3.8	内 奈竹内造業者(留文・圓窓4)一張輪 内 奈竹内造業者(留文・圓窓4)一張輪	泥	NB: 灰白 TSIGV1/1留縫底(1脚)	口縁3-12 17.0cm~18.0初	
297	62-5	磁器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 10.4 (2) 5.0 (3) 3.8	内 奈竹内造業者(圓窓3,6)一張輪(1)一張輪 内 奈竹内造業者(圓窓3,6)一張輪(1)一張輪	泥	SIV/1 灰白	高台4-12 「望月屋」 17.0後半~18.0初	
298	79-3	磁器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 13.9 (2) 7.0 (3) 5.4	内 奈竹内造業者(草花文・圓窓3)一張輪 (1) 13.9 (2) 7.0 (3) 5.4	泥	SDY/1 灰白	口縁5-12 17.0cm~18.0cm 豊付は露地	
299	75-6	青磁	肥前	鉢	25-4区	灰色シルト	休耕带	内 壁輪	泥	NB: 灰白 25GV1/1留縫底(1脚)	小片 17.0後半	
300	72-3	白磁	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 9.7 (2) 4.8 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	NB: 灰白 NB: 灰白(1脚)	口縁3-12 25GV1/1留縫底(1脚)	
301	79-6	陶器	瀬戸	碟口	25-4区	灰色シルト	(1) 9.1 (2) 4.3 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	豊偏第8~9小期 18.0/3~18.0/1-3 豊付は露 地	
302	79-5	陶器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 9.3 (2) 4.3 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	高台12-12 「歌毛日曇」 17.0前半 豊付は露地	
303	78-4	陶器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 9.1 (2) 4.3 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	高台11-12 志佐風陶器 17.0cm~18.0初	
304	62-1	陶器	肥前	平盤	25-4区	灰色シルト	(1) 12.8 (2) 7.0 (3) 5.0	内 壁輪	泥	SIV/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	口縁5-12 志佐風陶器 17.0cm~18.0/1-3	
305	76-2	陶器	肥前	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 12.6 (2) 6.8 (3) 5.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	口縁3-12 志佐風陶器 17.0cm~18.0初 高台は無地	
306	80-4	陶器	肥前?	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 12.0 (2) 6.0 (3) 4.5	内 壁輪	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0前偏 潟戸: 豊偏第8~9小期の 可能性あり	
307	78-3	陶器	瀬戸?	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 10.2 (2) 5.0 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪	泥	SIV/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	高台12-12 貝殻陶器かも知れない 17.0cm~18.0初	
308	74-4	陶器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 11.1 (2) 5.7 (3) 4.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SDY/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁3-12 志佐風陶器 17.0cm~18.0/1-3	
309	76-4	陶器	肥前	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 13.0 (2) 6.8 (3) 5.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	口縁3-12 志佐風陶器 17.0cm~18.0初 高台は無地	
310	76-6	陶器	肥前	皿	25-4区	灰褐色シルト	(1) 12.9 (2) 6.8 (3) 5.0	内 壁輪	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	17.0後半~18.0前偏 潟戸: 豊偏第8~9小期の 可能性あり	
311	74-1	陶器	美濃	中皿	25-4区	灰色シルト	(1) 11.1 (2) 5.8 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SDY/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁3-12 豊偏第7~8小期 16.0/2~17.0/2-3	
312	79-2	陶器	肥前	葉刷火人	25-4区	灰色シルト	(1) 10.8 (2) 5.7 (3) 3.3	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SDY/2 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 潟戸: 内外壁は無地	
313	74-3	陶器	備前	利口	25-4区	灰色シルト	(1) 7.7 (2) 4.0 (3) 3.3	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0中皿	
314	63-2	陶器	不明	碟口	25-4区	灰色シルト	(1) 4.4 (2) 2.4 (3) 2.0	内 壁輪(1脚) 内 壁輪(1脚)	泥	SDY/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁3-12 豊偏第7~8小期 16.0/2~17.0/2-3	
315	80-5	陶器	美濃	小碟	25-4区	灰色シルト	(1) 5.6 (2) 4.5 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	口縁5-12 豊偏第6~8小期 17.0cm~18.0/3	
316	76-3	陶器	瀬戸	丸皿	25-4区	灰色シルト	(1) 8.2 (2) 4.0 (3) 3.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 SDY/2 17.0cm~18.0前偏(1脚)	口縁3-12 豊偏第6~7小期 17.0cm~18.0/2-3	
317	79-4	陶器	瀬戸?	丸皿	25-4区	灰色シルト	(1) 8.5 (2) 4.5 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	NB: 灰白 25Y1/4 灰白(1脚)	口縁3-12 豊偏第7~8小期 18.0/2-3	
318	75-5	陶器	瀬戸?	丸皿	25-4区	灰色シルト	(1) 9.4 (2) 5.0 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 高台は無地	
319	76-5	陶器	瀬戸?	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 11.1 (2) 6.5 (3) 4.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SDY/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁10-12 豊偏第6~8小期 17.0/3~18.0/1-3 高台は無地	
320	74-2	陶器	瀬戸	碗	25-4区	灰色シルト	(1) 12.0 (2) 6.5 (3) 4.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0/2-3	
321	77-3	陶器	美濃	蓋物	25-4区	灰色シルト	(1) 7.0 (2) 4.0 (3) 3.4	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0/2-3	
322	77-2	陶器	瀬戸?	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 10.0 (2) 5.0 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/1 灰白 25Y1/1 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0/2-3	
323	80-6	陶器	瀬戸	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 10.5 (2) 5.5 (3) 3.8	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁5-12 豊偏第6~7小期 17.0cm~18.0/2-3	
324	78-2	陶器	瀬戸	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 12.9 (2) 6.0 (3) 4.0	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0/2-3	
325	79-3	陶器	美濃	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 13.0 (2) 6.5 (3) 3.1	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁11-12 豊偏第6~7小期 17.0cm~18.0/1-3	
326	62-2	陶器	美濃	皿	25-4区	灰色シルト	(1) 12.6 (2) 6.0 (3) 3.4	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁6-12 「姫皿」 豊偏第6~7小期 17.0cm~18.0/3	
327	79-1	陶器	美濃	中皿	25-4区	灰色シルト	(1) 18.2 (2) 8.0 (3) 4.0	内 壁輪	泥	25Y1/1 灰白	高台7-12 豊偏第7~8小期 17.0cm~18.0/2-3	
328	79-2	陶器	美濃	小皿	25-4区	灰色シルト	(1) 9.0 (2) 4.5 (3) 3.2	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/2 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	17.0後半~18.0初 17.0cm~18.0/2-3	
329	79-1	陶器	瀬戸	口片皿	25-4区	灰色シルト	(1) 15.0 (2) 10.4 (3) 7.4	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/3 灰白(1脚)	口縁6-12 豊偏第7~8小期 17.0cm~18.0/2-3	
330	63-1	陶器	美濃	口片皿	25-4区	灰色シルト	(1) 16.0 (2) 11.0 (3) 7.4	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	SIV/1 灰白 25Y1/2 灰白(1脚)	口縁3-12 豊偏第5小期 17.0/3	
331	78-1	陶器	美濃	口片皿	25-4区	灰色シルト	(1) 21.0 (2) 13.0 (3) 8.2	内 Dコロナ一張輪(1脚) 内 Dコロナ一張輪(1脚)	泥	25Y1/3 灰白 25Y1/3 灰白(1脚)	口縁2-12 豊偏第5小期 17.0/3~18.0/2-3 見込みに「ナラン」付	

第9表 高河原遺跡出土土器観察表(9)

番号	実測値	様・質	地質	基盤等	次数	遺物・器名等	法面(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
332 75-1	陶器	灰戸	露頭	25-4区	灰色シルト	(口)27.8	内: 四面ナメー胎頭 外: 四面アーランナメー胎頭	粗	SIVR2-1 基礎	口縁1/12	登葉第5小間 17c3/3 品津村	
333 64-2	陶器	灰戸	露頭	25-4区	灰色シルト	(口)39.0	内: 四面ナメー胎頭 外: 四面アーランナメー胎頭	粗	SIVR2-3 滝瀬 TSVNA2.3 滝瀬(輪)	口縁1/12	登葉第6小間 17c4(3~18c1/3	
334 64-1	陶器	灰戸	露頭	25-4区	灰色シルト	(口)49.2	内: 四面ナメー胎頭アズメー胎頭 外: 四面アーランナメー胎頭	粗	SIVR2-2 岩出 TSVNA2.2 岩出(輪)	口縁1/12	登葉第6小間 17c4(3~18c1/3	
335 65-2	陶器	灰戸	露頭	25-4区	灰色シルト	(口)29.0 (底)12.4	内: 四面ナメー胎頭アズメー胎頭 外: 四面アーランナメー胎頭	粗	SIVR2-7 滝瀬 TSVNA2.7 滝瀬(輪)	口縁7/12	登葉第8小間 18c3/3 品野村	
336 65-1	陶器	灰戸	露頭	25-4区	灰色シルト	(口)41.2	内: 四面ナメー胎頭 外: 四面アーランナメー胎頭	粗	SIVR2-7 滝瀬 TSVNA2.7 滝瀬(輪)	口縁1/12	登葉第8小間 18c3/3 品野村	
337 76-1	陶器	灰戸	灰戸	25-4区	灰色シルト	(口)37.4	内: ナメー工業ナメー 外: 四面アーランナメー	粗	SIVR2-8 稲	口縁1/12	「赤」	
338 77-1	陶器	灰戸 (灰多)	灰戸	25-4区	灰色シルト	(口)55.8	内: 灰多ナメー 外: 灰多アーランナメー	やや 粗	SIVR2-2 岩瀬	口縁1/12	葉城留置	
339 66-1	瓦	瓦戸	25-4区	灰色シルト			④ 織物一工間にによる割裂法 (口)ウエ	粗	ND/ 緑灰		凸面から凹面へ穴を穿つ	
340 67-1	瓦	平瓦	25-4区	灰色シルト			内: ナメー 外: 四面アーランナメー	粗	TSVNA4に記入			
341 63-4	瓦	新桃瓦 (丸瓦)	25-4区	灰色シルト	(瓦当付) 9.2	外: 巴ス-底点		粗	NA/ 反			
342 63-3	瓦	新桃瓦 (半瓦)	25-4区	灰色シルト		外: 番草文		粗	SIVR2-1 緑灰			

第10表 高河原遺跡出土木製品・石製品観察表

番号	実測値	様・質	基盤等	密理・石材	次数	遺物・器名等	法面(cm)	調整・技法の特徴	色 調	残存度	特記事項
344 33-4	木製品 (漆器)	皿	ケヤキ	22-1区	盆	(口)9.6	樹脂 口縁後脚は高さ、その他は低さ	赤褐色	TSVNA4.5 漆器	口縁1/12	広葉樹材
345 32-1	木製品 (漆器)	皿	ケヤキ	25-3区	褐色シルト	(口)11.9 (底)8.8	樹脂 口縁後脚と両台書き付のみ裏赤褐色、ほか 各色濃	TSVNA.5 漆器	口縁1/12		
346 3-3	木製品 (漆器)	皿	白樺	24-1区	灰色粘土	(口)11.6 (底)7.7	樹脂 全面に赤緑	TSVNA.5 漆器	口縁9/12 底台12/12	外面に焼けた痕跡 黄苔内に「大吉」	
347 33-3	木製品 (漆器)	瓶	ブナ	25-3区	褐色シルト	(高)5.8	樹脂 外面は黒度、内面は黒度の後赤緑	赤褐色	TSVNA.3 漆器	底台12/12	広葉樹材
348 33-2	木製品 (漆器)	瓶	アヌラ	22-1区	瓶	(高)5.2 (底)5.4	少部分赤緑 内部は赤緑、外側は黒度	赤褐色	TSVNA.5 漆器		広葉樹材
349 32-2	木製品	大皿・鉢	トヨリコ属	25-3区	褐色シルト	(口)35.9	樹脂			口縁2/12	針葉樹 2片
350 32-5	木製品	納刃ワ	ヒノキ	25-3区	灰色粘土	(高)7.5 (底)5.0	漆皮剥落が無いもの、外側を赤み込ミスティル と見えられる。				納刃の違か? 内盤形
351 32-2	木製品	物置	ヒノキ	25-4区	灰色シルト	(高)10.2 (底)8.0	漆皮の直方角? を固定				物置の底板か? 片葉樹 程の度は2ヶ所に残
352 37-1	木製品	物置	(漆器)	25-2区	漆裡 漆色和土	(高)11.8 (底)10.0	漆皮の直方角を固定	-			漆器の一部底みあり
353 32-3	木製品	物置	ヒノキ	25-3区	褐色シルト	(内高)7.6 (底)6.0	底が下がる、縁部に丸(17個)のみみ縫				針葉樹
354 34-1	木製品	蓋	ヒノキ	22-3区	黒褐色シルト	(高)20.8 (底)10.0	漆皮の裏側を片重みの削て要物	光澤	TSVNA.3 漆器		針葉樹材
355 34-2	木製品	板材	ヒノキ	22-3区	黒褐色シルト	(高)17.1 (底)11.1	1枚が傾ける、丸アリ				針葉樹材
356 34-2	木製品	板材	スギ	22-3区	黒褐色シルト	(高)17.2 (底)11.1	1枚2-3割り込みあり				針葉樹材
357 34-3	木製品	建伏戻	トガサワラ	22-3区	黒褐色シルト	(高)15.4 (底)10.7	中央部を研磨				針葉樹材
358 34-4	木製品	板材	スギ	22-3区	黒褐色シルト	(高)10.3 (底)6.0	口部削りや实る				針葉樹材
359 32-7	木製品	小板材	スギ	22-3区	灰色粘土	(高)2.3 (底)1.2	隙間に木栓を打ち込んだ痕跡あり				針葉樹
360 32-2	木製品	板材	スギ	25-3区	灰色粘土	(高)10.7~ 10.2	一舟に鉛色糸を打ち付けた痕跡あり				針葉樹
361 32-3	木製品	皿	スギ	25-4区	褐色シルト	(高)31.0 (底)19.0	縁の漆抜付(内丸、運び15cm)				針葉樹
362 35-1	木製品	割物	(正葉樹)	22-4区	灰色シルト	(高)13.0 (底)14.8	割物専用 斜面を丸めながら引くのが1脚 中心に斜 線の入った痕跡 下方に赤い斑点				針葉樹材 縫の失端か?
363 32-4	木製品	下駄	トヨリコ属	25-4区	褐色シルト	(高)10.4 (底)8.5	靴の漆脱脱り 丸頭は、使用による摩耗範囲				針葉樹
364 3-2	石製品	理	板根前	22-1区	盆	(高)5.0 (底)4.1	裏面は黒度	ND/ 緑灰	小片		近江 高島城
37 3-1	石製品	理	板根前	22-1区	盆	(高)12.8 (底)11.4	表面の黒度が強い 市岡面取り 側面の縁に摩耗	ND/ 緑灰			縫山外完存 近江 高島城
38 20-2	石製品	砾石	板根前	24-1区	灰色粘土シルト	(高)9.0 (底)6.5	裏面に切削面直存	-			裏面使用 重量 25.63g
342 76-5	石製品	砾石	泥岩	25-4区	灰色シルト	(幅)3.7	裏面に切削面直存	-	-		重量44.22g

## V 調査資料の科学分析

### 1 分析の目的

高河原遺跡で出土した木製品のうち、保存処理を実施したものについて樹種同定を行った。また、漆器については漆皮膜の分析により、工法に関する分析も実施した。

実施機関は、保存処理業務を受託した株式会社吉田生物研究所および株式会社古環境研究所である。以下で示す分析結果は、掲載にあたって表現の調整をしたが、骨子の変更は無い。(伊藤)

### 2 高河原遺跡出土漆器の分析

#### a 樹種同定

**観察方法** 刃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

使用顕微鏡は「Nikon DS-Fi1」で、観察結果は以下の通りである。

■(344・345) ニレ科ケヤキ属ケヤキ

(*Zelkova serrata* Makino)

環孔材である。木口ではおむね円形で単独の大導管( $\sim 270 \mu\text{m}$ )が1列で孔圈部を形成している。孔圈外では急に大きさを減じ、多角形の小導管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圈部では導管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1~数列で多数の筋として見られる。柾目では大導管は單穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小導管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1~3列のものと大部分を占める6~7細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。

ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

■(347) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

散孔材である。木口ではやや小さい導管( $\sim 110 \mu\text{m}$ )がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では導管は單穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。導管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は内眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはつきりと見られる。

ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

折敷(348) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

木口では仮導管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。

アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

#### b 塗膜構造分析

資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエボキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

塗膜断面の観察結果を、第11表と以下に示す。

**塗膜構造** 下層から木胎、下地、漆層が観察された。344には、木胎と下地の間に布着せが見られた。

**布着せ** 344外面の木胎と下地の間に、布着せの布が観察された(写真7 b)。糸の縦断面と横断面が見られ、布とわかる。糸の横断面はさらに細かな植物纖維の横断面から成る。この植物纖維は複数の細胞の塊でなく、1細胞単独で存在している。その様子からこの糸は木綿の可能性が高い。試料を採取し

第11表 漆器の断面観察結果

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造(下層から)		
				下地		漆層構造
				膠着剤	混和材	
344	皿	内面	7a	漆	砥の粉	透明漆1層／赤色漆1層 朱
		外面	7b	漆／漆	砥の粉／砥の粉	透明漆1層／赤色漆1層 朱
		高台内	7c	漆／漆	砥の粉／砥の粉	透明漆2～3層 —
345	皿	内面	7d	柿渋／漆	木炭粉／砥の粉	透明漆1層／赤色漆1層 朱
		口縁端部	7e	柿渋／漆／漆	木炭粉／砥の粉／ 砥の粉	透明漆1層 —
		外面	7f	柿渋／漆	木炭粉／砥の粉	透明漆1層／赤色漆1層 朱
		高台端部	7g	柿渋／漆	木炭粉／砥の粉	透明漆1層 —
347	椀	内面	7h	柿渋	木炭粉	赤色漆1層 ベンガラ
		外面	7i	柿渋	木炭粉	透明漆1層 —
348	折敷底板	上面(赤色)	7j	漆	砥の粉	透明漆1層(極めて薄い) ／赤色漆1層 朱
		下面(黒色)	7k	漆	砥の粉	透明漆1層 —

たのは体部外面の口縁に近い箇所である。

**下地** 3種類の下地がみられた。膠着剤として漆を使用する漆下地、柿渋を使用する渋下地、漆下地と渋下地を併用したものの、3種類である。

膠着剤として漆のみが使用されたのは、344と348である。ともに漆に砥の粉が混和されていた。344の外面と高台内には2層の同様な下地が重ねられていた。

膠着剤として柿渋のみが使用されたのは、347である。濃褐色を呈する柿渋に木炭粉が混和された模様渋下地であった。

漆と柿渋がともに使用されたのは346である。柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地の上に、漆に砥の粉を混和した漆下地が重ねられていた。口縁端部には、漆下地が2層施されていた。

漆下地の上に透明漆のみが塗り重ねられる場合、344の高台内には見られなかつたが、それ以外の346口縁端部・高台端部、348黒色面には、漆下地と透明漆層との間に厚みの薄い黒色の層が認められた。

**漆層** 同じ色調の漆層の塗り重ねは、344高台内に認められた。344高台内は黒色を呈するが、断面を観察すると透明漆層が2～3層重ねられていた。それ以外は同じ色調の漆は塗り重ねられていなかつた。赤色の漆層の下層に透明漆層が施されたものは複数認められた。346外面、344外面、348の赤色面である。

**顔料** 赤色漆層には、二種類の赤色顔料が認められ

た。透明度が高く明確な粒子形状を呈する朱と、透明度が低く細かなベンガラとである。346外面、344外面、348赤色面には朱の混和がみられ、347内面にはベンガラが混和されていた。

**まとめ** 高河原遺跡出土の、江戸時代中期の漆製品4点について塗膜分析を行った。

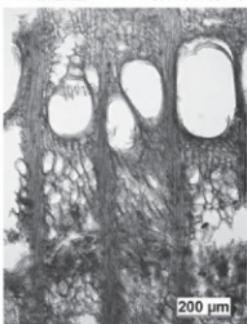
今回調査した資料の器種は皿2点、椀1点、折敷底板1点であるが、器種による製作法の違いはみられない。折敷の出土例は少數であるためその詳細は不明だが、椀と皿については素地の樹種と下地、赤色顔料の種類にはある程度の傾向がある。それはケヤキの素地の上には漆下地が施され、赤色顔料として朱が使用される。一方ブナ属などの素地の上には炭粉渋下地が施され、赤色顔料としてベンガラが使用される。塗り重ねはほとんどみられない。今回調査した3点の椀、皿についても同じ傾向がみられた。

(㈱吉田生物研究所)

#### 【参考文献】

- 林昭三『日本産木材顕微鏡写真集』(京都大学木質科学研究所、1991年)
- 伊東隆夫『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～V』(京都大学木質科学研究所、1999年)
- 島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』(雄山閣出版、1988年)
- 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』(保育社、1979年)
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿古代篇』(1985年)
- 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿原始篇』(1993年)

344 (漆器皿) ニレ科ケヤキ属ケヤキ



横断面（木口）

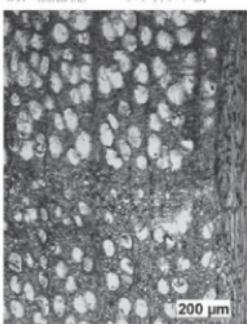


放射断面（桿目）



接線断面（板目）

347 (漆器椀) ブナ科ブナ属



横断面（木口）

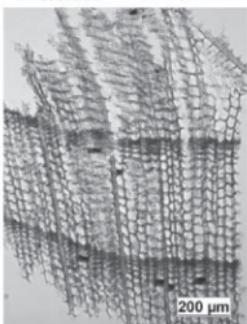


放射断面（桿目）



接線断面（板目）

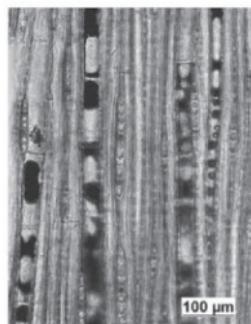
348 (折敷板) ヒノキ科アスナロ属



横断面（木口）



放射断面（桿目）



接線断面（板目）

写真6 出土木製品の使用木材(1)

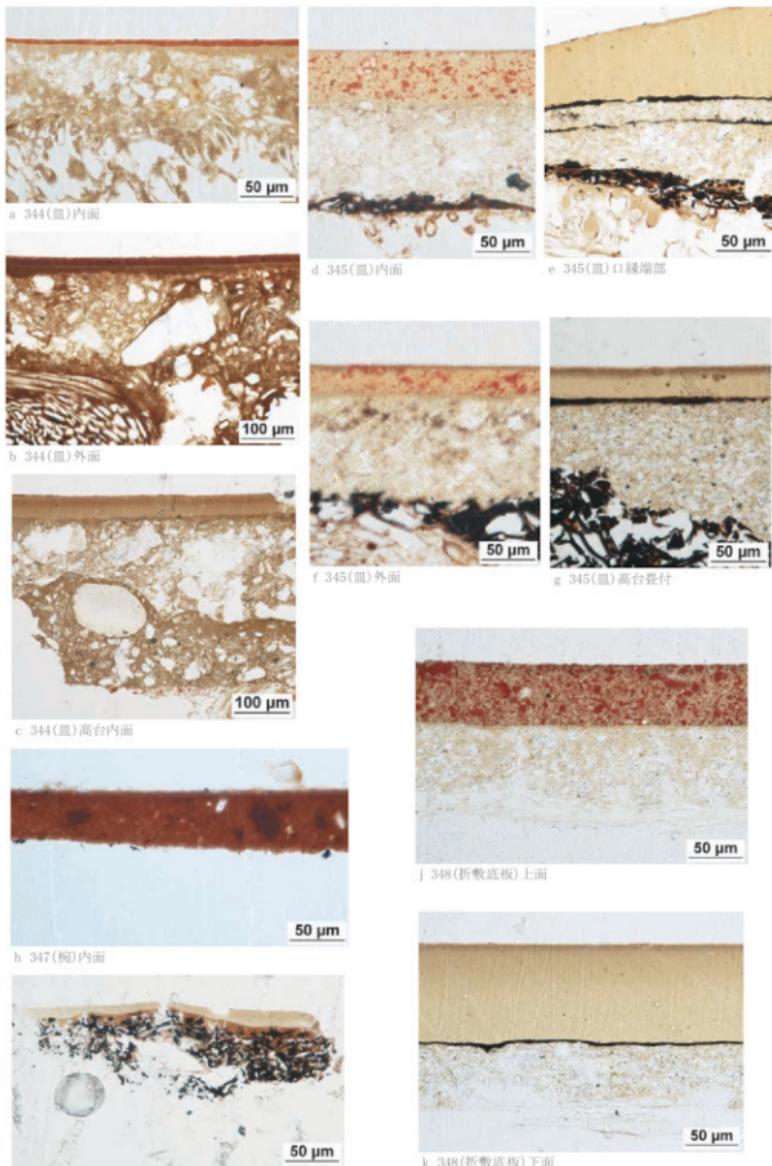


写真 7 漆皮膜断面

### 3 その他の木製品樹種同定

本報告では、出土木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

#### a 試料と方法

試料は、保存処理対象の木製品計10点である。方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口)、放射断面(柵目)、接線断面(板目)の基本三断面切片を作製し、生物顯微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

#### b 結果

以下に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

##### 棒状具(357) トガサワラ

*Pseudotsuga japonica* Beissn. マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平両樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的急で、正常垂直樹脂道が見られる。放射組織には、放射柔細胞と放射仮道管が存在する。放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3~5個存在する。また仮道管の内壁には、水平に近いらせん肥厚が密に存在する。放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。仮道管の内壁には密に並ぶらせん肥厚が見られる。

以上の特徴よりトガサワラに同定される。トガサワラは、現在では本州(紀伊半島)、四国(高知県)の深山のごく限られた地域に自然分布する。常緑高木で通常高さ20~30m、径60~80cmである。

##### 板材(356)・蓋(361) スギ

*Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁

孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

##### 底板(351)・箸(354)・板材(355) ヒノキ

*Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。接線断面では、放射組織は単列が同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の特徴よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目密緻で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

##### 底板(350・353) ヒノキ属 *Chamaecyparis*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔は1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。

##### 大皿(349)・下駄(363) トネリコ属

*Fraxinus* モクセイ科

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1~3列配列する環孔材である。孔圈部外では、小型であるいは厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は單穿孔である。内部にはチロシスが著しい。放射組織は同性である。放射組織は同性放射組織型で、1~3細胞幅である。

以上の特徴よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、道具、器具、

旋作、薪炭など広く用いられる。

### c 所見

ヒノキは底板・箸・棒材に、ヒノキ属は底板に利用されている。ヒノキないしヒノキ属は木理通直で大きな材が取れる良材であり、保存性が高い。耐久・体質にもよく耐え、工作が容易なため用途は広汎である。なお、ヒノキないしヒノキ属の木材は古墳時代以降になると多用され、律令期以降に頻繁に流通し、瀬戸内から東海地方では最もよく用いられる材である。

スギは板材、蓋に利用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。トネリコ属は大皿、下駄の足に利用されている。トネリコ属は、概して強靭で堅硬な材で、従曲性が非常に大きく、割裂は容易である。

トネリコ属の大皿の報告例は非常に少ないが、トネリコ属は挽物としてよく利用される。また、下駄に利用された例は多くはないが、下駄の歯以外に台、一本の下駄にも利用される。

トガサワラは棒状具に利用されている。トガサワラは日本特産の樹種であり、耐久・保存性は案外低く、材はやや軽軟であるため切削その他の加工、割裂が容易である。しかし、その自然分布域は本州（紀伊半島）、四国（高知県）の亜高山帯のごく限られた地域であり、トガサワラ自身の同定例は全国的に見て多くはない。なお、他の報告例では建築材や木橋に利用されている。

分布としては、ヒノキ・ヒノキ属は温帯を中心で分布する針葉樹で、特に温帯中部に多い。スギは温帯域に広く分布し、温潤地を好む高木である。トネリコ属は陽当たりのよい温潤な谷筋や斜面に生育する。トガサワラは寒冷な亜高山帯に分布する樹木であり、やや乾燥した尾根筋や急斜面などに分布する。ヒノキ、ヒノキ属、スギ、トネリコ属は温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、遺跡周辺から採取することができた樹木である。ただし、トガサワラは紀伊半島の深山などの寒冷な亜高山帯により、流通によってもたらされたと考えられる。

（㈱古環境研究所）

### 【参考文献】

- 伊東隆夫・山田昌久「木の考古学」（雄山閣、2012年）p.49。  
佐伯浩・原田浩「針葉樹材の細胞」『木材の構造』（文永堂出版、1985）p.20-48。  
佐伯浩・原田浩「広葉樹材の細胞」『木材の構造』（文永堂出版、1985）p.49-100。  
鳥地謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」（雄山閣、1988年）p.296。  
山田昌久「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第1号、植生史研究会、1993年）p.242。

## 4 自然科学分析結果の所見

### a 樹種同定

容器 漆器椀はブナ、皿はケヤキという同定結果が出た。ブナはトチノキとともに、近世漆器の中心用材とされ、ケヤキは近世では上級品に限定されるようになるという<sup>(1)</sup>。高河原遺跡の資料はその傾向に合う。大皿原材のトネリコ属は、中世の鎌倉市内遺跡で多く確認されている<sup>(2)</sup>ことを参考までに記す。

その他 多くが遺跡近隣で伐採可能な用材であるのに対し、棒状具(357)がトガサワラと同定されたことに注目したい。分析結果報告でも搬入品の可能性が指摘されている。

### b 漆塗膜構造分析

ケヤキとブナとでは、塗膜構造に違いがあり、高河原遺跡の事例はこれまでの分析傾向とも合致するとの報告である。

漆器塗膜の分析は、三重県ではほとんど実施されていないが、北奥遺跡（津市芸濃町）出土の16世紀代の椀・鉢を分析した事例がある<sup>(3)</sup>。事例が少なく、単純な比較はできないが、北奥遺跡資料で用いられた赤色顔料は水銀朱のみであった。高河原遺跡で見られたベンガラ使用事例との違いが興味深い。

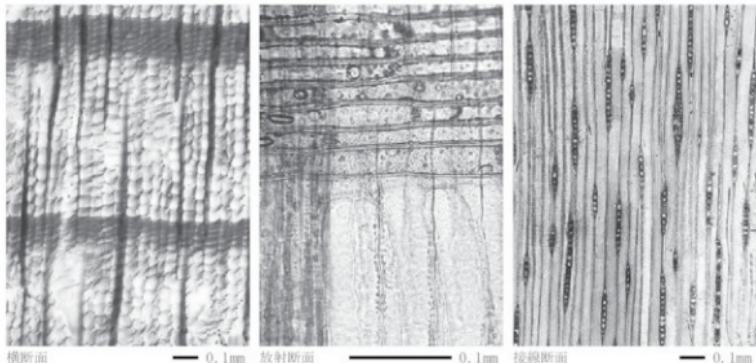
今回の分析結果をベースに、今後の資料蓄積が望まれる。

（伊藤）

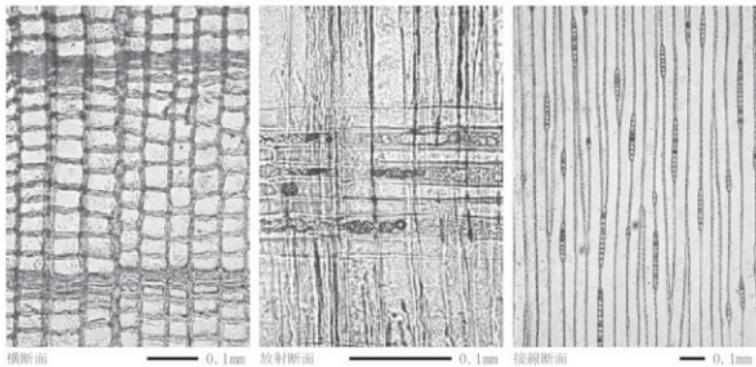
### 【註】

- (1) 中井さやか「漆器」（『図説江戸考古学研究事典』柏書房、2001年）。
- (2) 鈴木伸哉・鈴木恵「鎌倉の木材利用」（『木の中世一資源・技術・製品』第一回考古学と中世史シンポジウム資料集）考古学と中世史研究会、2014年）。
- (3) 三重県埋蔵文化財センター「北奥遺跡（第3次）発掘調査報告」（2010年）

357 (棒状具) トガサワラ



351 (柄杓?底板) ヒノキ



355 (板材) ヒノキ

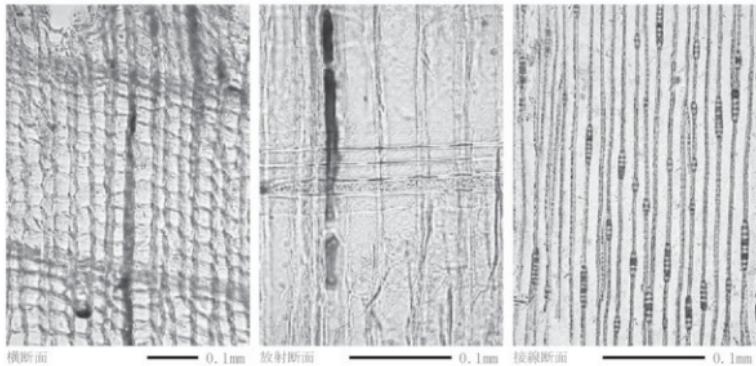
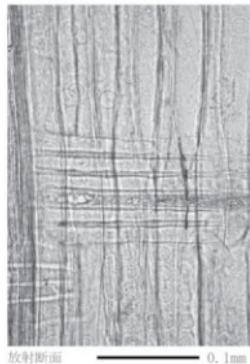


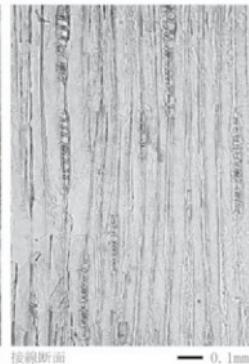
写真8 出土木製品の使用木材(2)

350 (曲物底板) ヒノキ属



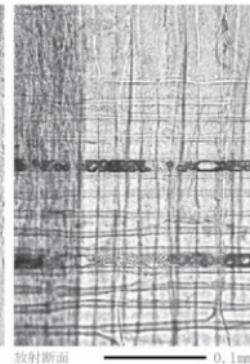
放射断面

0.1mm



接線断面

354 (曲物底板) ヒノキ属



放射断面

0.1mm

361 (蓋) スギ



横断面

0.1mm



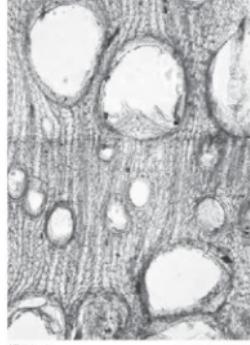
放射断面



接線断面

0.1mm

349 (大皿) トネリコ属



横断面

0.1mm



接線断面



放射断面

0.1mm

写真9 出土木製品の使用木材(3)

# VI 高河原遺跡と近世都市山田～調査のまとめと検討～

## 1 高河原遺跡の変遷

第Ⅱ章で触れたように、高河原遺跡の遺跡範囲は県道鳥羽松阪線とほぼ重複する。ここは、江戸時代の絵図や地形の状況から、かつて「清川」と呼ばれていた河川の流域に相当する。

今回の発掘調査で確認されたのは、主に流路内の堆積土である。遺構と言えるものは乏しいが、出土遺物も踏まえ、大まかな時間的変遷を見よう。

### a 室町時代以前

今回の調査で出土した最も古い時期の遺物は、鎌倉時代前期に相当する陶器碗（山茶碗、第8図50）である。流路内の遺物だが、近隣に鎌倉時代の生活域があったと考えられる。今回の調査地に比較的近接した郡邸試掘地点や中央公民館跡地試掘地点（第Ⅱ章参照）でも同時期の土器類が出土していることから、この付近に中世前期の遺跡が展開していることは確実と見てよいであろう。

中世後期の土器としては、16世紀中葉頃の土師器鍋（第10図105）がある。この時期の遺物も少ない。

出土遺物の状況から見て、中世以前の「清川」は、水流のある通常の川であったと考えられる。

### b 江戸時代以降

今回の調査で確認された「清川」堆積土のうち、灰色系シルト層は湿地状の土質で、人為的に持ち込まれた土ではなく、自然堆積層と考えられる。この層には、17世紀後葉から18世紀前葉にかけての遺物が多く認められる。「清川」の埋没が始まり、そこに遺物が投棄されたと考えられる。

24-5区で確認された井戸S E 1からは、18世紀後葉頃の土器類がまとまって出土している。S E 1の掘削ベースとなるのは整地土である。このことから、18世紀前葉までに自然埋没した「清川」は、18世紀後葉頃に整地され平地化したと考えられる。

### c 高河原遺跡近隣の状況

近世山田低地部の都市空間分析を行った伊藤裕久氏は、高河原遺跡の所在する宮後・西川原町の状況を分析・図示している<sup>(1)</sup>。伊藤氏が作成した図は、



第18図 18世紀宮後・西川原町の状況  
(伊藤裕久2000から引用)

「元文年中山田宮後町絵図」をベースとしている（第18図）。その図では、「清川」の南に茶屋ノ世古・専念寺ノ世古・蔽世古などの世古道（路地）が入り込み、「清川」の北部には鍛冶屋垣外という地名が確認できる。

茶屋ノ世古・専念寺ノ世古が行き止まる先に「清川」があり、そこが高河原遺跡にあたる。世古道の先に川（清川）があり、そこが次第に生活物資の廃棄場となっていたとを考えられる。

## 2 高河原遺跡と山田低地部の景観

今回報告した高河原遺跡の発掘調査地は、県道鳥羽松阪線上の南北200m、東西300mに配された小規模な調査坑である。そのため、当調査成果から遺跡の空間的な広がりを考えることは難しい。

しかし、外宮（豐受大神宮）を核として、東西約2,000m、南北約800mもの範囲に広がる、中近世の



第19図 山田懸絵図（17世紀後半） 真河川・水路部分を加筆・強調した。

「山田都市遺跡群」に関する発掘調査は、一部を除いてほとんど実施されていないのが実態である。県教育委員会による調査報告も、今回がはじめてといつてよい<sup>(2)</sup>。

そこで、僅かなデータではあるが、今回実施した高河原遺跡の調査成果から、この地の状況を可能な限り見ておこうと思う。以下、「山田都市遺跡群」を含む宮川下流部に相当する当地を「山田低地部」と呼称し、検討していく。

#### a 清川（宮川旧河道）の変遷

前述のように、高河原遺跡の範囲は「清川」と呼ばれていた河川の流域にあたる。「清川」は、おそらく数条に分流していたであろう宮川の旧河道に相当すると見られる河川である。

**絵図による山田低地部の水路** 第19図は寛文2（1662）年から3年にかけて作成されたと考えられる『山田懸絵図』<sup>(3)</sup>で、このうち河川および水路を強調した。第20図は、現況の都市計画図をから等高線を抽出し、さらに江戸時代末期に作成された歩測図面「山田舊々之図」<sup>(4)</sup>に記載された水路と道路を抽出したものである<sup>(5)</sup>。

2つの図を比較すると、近世前期と後期とで、山田低地部における河川・水路の位置はほとんど変化の無いことがわかる。また、以上の資料からも、高河原遺跡が清川流路にあたることが確認できる。

**清川下流の埋立** 今回の発掘調査では、24-4区を除くいずれの調査坑からも「清川」の堆積土が確認された。なかでも注目したいのが25-3・25-4区などで確認された灰色系シルト層内の土器の大量投棄である。土器群は、17世紀後葉から18世紀前半を中心としており、それ以前のものは少ない。そして、その上に形成された整地土層は18世紀後葉以降のものであった。

しかし、第20図に見える通り、「清川」は18世紀後葉の整地によって完全に消滅したわけではない。おそらく、水路としての機能を果たす程度の幅員が人工的に確保されていたものと考えられる。

以上のことから、高河原遺跡付近における清川の変遷は、つぎのように考えることができる。

① 自然流路の段階。元々は舟運も可能な水量があったと考えられる。17世紀中葉以前。

② 土器や木製品などの投棄場となった段階。湿地

状になっていたと考えられる。17世紀後葉から18世紀中葉頃。

③ 両岸が埋め立てられた段階。川幅は人工的に狭められ、人工水路になっていたと考えられる。18世紀中葉から19世紀代。

④ 川の痕跡がほぼ消滅し、埋め立てられ、一部が道路となった段階。19世紀後葉から現代。

### b 山田低地部の地形

第21図は、現状の地形図をベースに、上述した近世・近代絵図の状況も踏まえ、中世後期頃の微地形状況を復元してみたものである。これを基に、山田低地部を概観してみる。

**微高地の状況** 清川がそうであったように、山田低地部は旧宮川の分流が複数条認められる。また、当地の居住地は、宮川から排出された土砂で形成されていると考えられる。すなわち、山田低地部の微高地は、概ね自然堤防に相当すると見做される。微高地の形成土は、24-4区で確認された黄褐色粘土層の存在から、高河原遺跡よりも南東部は概ね河岸段丘に相当すると見てよいと考えられる。

第21図に見える通り、清川の南部には標高6mほどを最高所とする安定した微高地が広がっている。この微高地は南東端で天神丘丘陵に接し、西は二俣から上中之郷・下中之郷・曾祢・八日市場・一志久保・田中中世吉へと続き、東端は外宮の北、下場所前野にまで及んでいる。外宮の周囲には豊川が巡っているため、下場所前野のあたりで岬状に突出している。現在ここには「須崎橋」が架かっており、微高地先端が水域に突き出した洲の先端=須崎であったことを物語っている。この微高地を「中之郷微高地」と仮称する。

中之郷微高地は、清川の西延長部によって分断されている。この点については後述する。

外宮の北東部にあたる岩瀬・吹上地区も微高地である（岩瀬微高地）。ここは、中之郷微高地ほど安定していないが、それでも標高3m程度はある。

宮川東岸の中島地区から久留山にかけても微高地がある（中島微高地）。宮川の排出土と人工的な築堤によって形成されたと考えられる。南にある小太郎池と小柳川が宮川分流であった段階には、中島は文字通り「中島」だったと見られる。

**外宮の立地** 外宮境内は、中之郷微高地と高倉山丘陵との間にある。現在では鬱蒼とした樹林で覆われているため、その地形は体感しづらい。しかし等高線図を見ると、外宮は水域に囲まれた浮島のような立地だとわかる。外宮境内の外周をめぐる河川は「豊川」で、現在の伊勢市豊川町にその名が残る。豊川は、高倉山丘陵を水源とする小河川だが、この地形は上中之郷微高地の南部に宮川旧分流があったかなり古い段階に形成されたと考えられる。

この地形環境により、外宮は中州の中央に鎮座するような景観となる。そして、中之郷微高地（つまり、人びとが居住するエリア）よりも低い位置に境内がある、ということになる。

このような景観は、熊野本宮大社（和歌山県田辺市）や出雲大社（島根県出雲市）など、格式が高く、歴史も深い社に見られる特徴と一致する。これらの神社に見られる占地の特徴が何を意味するのかは、今後検討を深めるべき重要な問題である。

**街道と集落道** 第21図には、参宮道を中心に、近世前期的主要道も入れている。これを見ると、参宮道は中之郷微高地上を走っていることがわかる。街道は中之郷微高地西端の二俣で枝分かれしているが、それもやはり微高地の上であることも認識できよう。

街道から枝分かれする集落道は、ほとんど規則性が無い（第20図）。自然発生的な道がそのまま踏襲されているのであろう。そのなかで、外宮から月読宮（月夜見宮）に至る道は、地形を無視して直線的である。中之郷微高地を中心に展開する集落道とは好対照をなす。宗教的な要因がその背景に考えられる。

**吹上光明寺の位置** 第II章で見たように、現在の伊勢市岩瀬三丁目にある光明寺は、かつては世木社の東側、現在の伊勢市吹上一丁目であった。南北朝期に光明寺住職となった恵觀は、北畠親房から祈祷を依頼されている<sup>(6)</sup>ことからも知れるとおり、南朝方と関係の深い人物であった。

恵觀は康永2（1343）年に志摩國の円応寺雜掌から「致海賊由事」として訴えられている<sup>(7)</sup>。この子細に関しては稻本紀昭氏が詳述している<sup>(8)</sup>のでここでは触れないが、注目しておきたいのは、海との関係で恵觀が登場することである。

第21図に見えるとおり、光明寺の旧地は清川が二



第20図 山田低地部の流路と微地形・道路

股に分かれる要の位置にあたる。清川が豊かな水量をこの時期まで保っていたとすれば、光明寺は清川から瀬田川を経て、海へと直結しているといえる。

また、現在の光明寺には、伝城宗広塔をはじめとした宝篋印塔・宝塔・塔頭などがある。これらが清川から眺められる位置に造立されていたとすれば、舟運で行き交う人々とのランドマーク的な機能を果たしたと考えられる。

#### c 清川と「公界堀」

山田低地部を考えるうえでのポイントとなるのが、「公界堀」をどう見るかという点である。

西山克氏によると、清川は中世には外宮「遠四至」の北を画す結界線で、その内側を「聖域」となす重要な河川であった<sup>(9)</sup>。西山氏は史料的通説により、10世紀中葉から12世紀後葉頃までの清川は豊富な水量を蓄えていたが、その後は次第に水量が減じ、「清川はもはや『宮河』とは呼ばれなくなった」<sup>(10)</sup>

とする。また、中世後期から近世にかけての山田には「公界堀」と呼ばれる水路がある。それは筋向橋から山安寺（法住院）の北部を通るもの（第21図）で、西山氏の分析では、ここも清川に相当する。

高河原遭跡付近はともかく、山安寺北部の水路は清川流路とは見なし難い。というのも、この水路は中之郷微高地を斜めに縦断しており、自然地形としては異様だからである。

「公界堀」は、久留山・天神丘間の滞水を山田低地部北部へと流すために開削されたと想定する。つまりその名称は、概念的なものではなく、まさに人工的な「堀」であることに由来すると考えられる。この水路が開削された主因は、外宮神域方面への流水を避けることにあると想定する。

なお、自然流路としての清川の西延長は、中之郷微高地と大間国生社との間を通り、小柳川と合流して小太郎池方面に至ると考えるのが素直である。



第21図 中世後期の山田低地部地形環境復元想定

#### d 山田低地部の景観

以上、山田低地部の地形環境を見てきた。山田低地部には、現状からは想像もできないほど縱横に水路が通っていた。山田にとって、水域が近接する環境は極めて重要なのである。中世の山田を考える場合には、この環境への視座が不可欠である。

### 3 出土遺物の特徴

今回の発掘調査では、17世紀後葉から19世紀前半頃にかけての近世に相当する遺物が比較的多く出土した。三重県内では、近世資料の報告事例は少ない。そのなかで、高河原遺跡の資料は質量ともに豊富である。さらに、列島屈指の近世都市である山田に関する情報が得られる重要な資料である。

ここでは高河原遺跡の特徴を把握するために、それぞれの種類毎に特徴を見していく<sup>111</sup>。

#### a 土師器類

土師器類は全て南伊勢系で占められる。最も多いのは口縁部径10cm内外の皿類で、その多くが灯明皿として用いられていた痕跡を残している。次いで多いのが、鍋・熔炉・茶釜などの煮沸用具である。外側に厚く煤が付いたものが多いため、実用品と考えてよいと思われる。

土師器類の用途は、以上のようにいずれも火に関係しているとすることができる。なお、土師器類については次項で再度触れる。

#### b 陶磁器

陶磁器類は瀬戸美濃産のほか、肥前産のものが相当量見られる。また、京焼や備前焼と考えられるものもある。18世紀後葉以降になると信楽産のものも見られるようになる。

**瀬戸美濃産陶器** 瀬戸美濃製品では、碗皿類が最も多い。碗では釉薬を掛け分けているもの（第15図319・320）が目立つように感じられる。他には、鉢・鍋・壺などのほか、十能といった特殊なものもあり、多様な器形があるといえる。この背景には、山田低地部が生産地に比較的近いこと、山田には中世後期に「せともの座」があり、瀬戸焼の流通拠点と考えられることなども関係していると見られる。

**瀬戸産磁器** 碗皿類に見られる。概ね19世紀代以降に増加するが、当遺跡での確認数量は多くない。

**肥前産陶器** 肥前産陶器では、京焼風陶器や「カブト鉢」と呼ばれる器形が目立つ。その他では、筒形火入（第15図312）のような珍しいものも見られる。

**肥前産磁器** 染付のほか青磁・白磁がある。数は少ないが、大皿や壺もある。碗皿類は、瀬戸産陶器と並んで最も多い組成を示す。また、17世紀前半代に相当する『初期伊万里』の皿（第7図31）・大皿（第8図43・58）・鉢（第7図32）などのほか、柿右衛門素地の乳白手の碗（第15図294）などもあり、注目できる。

**京焼** 京焼では、碗がある（第9図85）。高台内面

に「清水」の落款があり、清水焼にあたる。清水焼のなかでも比較的古い段階と考えられ、注目できる。備前産陶器 徳利が1点ある（第15図313）。外面は糸目が入り、精緻なものである。なお、備前産と考えられる個体はこれ1点のみである。

信楽産陶器 信楽産と断定できないが、その可能性が高いものとして、蓋（第9図87）がある。これ以外では、19世紀代以降の行平鍋がある。全体として、信楽産と考えられるものは少ない。

產地不明 碗（第8図54）は陶胎で、褐色の素地に真須筆描の風景を配し、白色釉を掛けたものである。京焼かも知れないが、正確には產地不明である。

中国産磁器 染付の碗がある（第12図171）。明代後期のものである。中国産磁器の確認事例はこの1点に止まる。

#### c 木製品類

漆器類 梶と皿がある。とくに興味深いのが、高台内面に「大吉」と書いた皿である（第17図346）。遊興の席で用いた「おみくじ」であろうか。

また、車軸と考えられる木製品（第17図362）も興味深い。外面は漆塗りで装飾されているので、荷車のものではなく、人力車か何かの部材と見られる。時代は不明（江戸時代末期頃か）ながら、これも遊興的な意味が考えられよう。

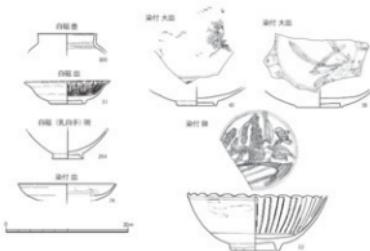
なお、江戸時代後期の山田では「伊勢春慶」と呼ばれる、木目の美しさを残した漆器が生産されている<sup>⑩</sup>。残念ながら今回の発掘調査では、それに該当するものは確認できなかった。

#### d 高河原遺跡出土遺物の傾向

高河原遺跡出土の近世遺物は、以上のように極めて多様である。注目できるのは、少ないながらも優品や稀少品が含まれることである。

肥前産磁器では、「初期伊万里」とされるものに優品がある（第22図）。京焼にも古手のものが含まれていた。また、「大吉」銘の漆器皿も珍しいものといえる。さらに、漆塗りの装飾を施した車軸と考えられる遺物も優品に含めてよいであろう。

さて、初期伊万里や「大吉」銘の漆器皿、あるいは華美な車軸などの出土遺物は、今回の調査区では月夜見宮寄りの22区に集中する。一方、調査区東部域を中心とした24・25区からは、土師器類の出土が



第22図 高河原遺跡出土の初期伊万里

圧倒的に多い。

前出の近世絵図を見る限り、高河原遺跡に隣接する大規模な屋敷は見られない。『山田惣繪図』で見ると、最も近い該当施設は極楽寺だが、それでもやはり距離がある。今回の高河原遺跡出土遺物は、極楽寺、さらには近隣の御師屋敷を含む施設から廃棄された優品を含んでいると考えておく。

#### e 高河原遺跡出土土器の組成

今回の調査で出土した土器類の組成を見る。検討にあたっては、一定程度の出土量があり、なおかつ調査時に遺物の大半を回収できた調査区の状況を見る必要がある。これに該当するのは、25-2~4区のみである。そのため、前項で見たように、土器類が多く出土した場所の組成ということになる。

組成の把握は、口縁部計測法（口縁部残1/12を「1」とカウントする方法）を、各部位に援用する方法で行った。第12表は計測データ。第23図はそれを基に組成をグラフ化したものである。

まずは第23図右に示した器種別比率を見る。最も多いのは土師器皿類で全体の40%強、次いで陶器碗皿類、磁器碗皿類である。これらを供膳具とすれば、全体の80%以上を供膳具が占めることになる。ただし、先述のように土師器皿類は灯明具としての利用が中心で、陶磁器類とは同一視できない。鍋や焰塔などの土師器煮沸具類は、全体の15%ほどを占める。

第24図は、これまでに作成してきた中世後期の比率<sup>⑪</sup>の中に高河原遺跡のデータを入れたものである。高河原遺跡の組成は、土師器皿類が突出して多いという点では南伊勢地域の中世後期遺跡との共通性が窺えるといえる。特徴的なのは、中世後期の中南勢地域における陶磁器組成は10%程度であったのに對

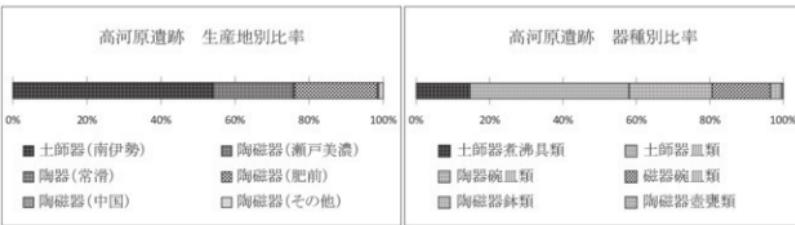
第12表 高河原遺跡25~2~4区出土土器組成

調査区	土器種別	高河原(戸戸美濃)										高河原(先史)					高河原(後世)														
		口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁										
25-29*	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21										
25-29*	11	66	2	43	40	19	19	5	3	6	18	40	1	1	1	2	1	2	1	4	1	1									
25-39*	2	5	12	40	51	3	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1	12									
25-49*	88	91	188	12	13	17	21	7	1	29	40	30	65	8	9	11	6	17	22	1	1	1	22	64	12	200					
25-49*	18	121	55	3	15	1	4	4	4	6	31	3	17	2	4	2	1	5	2	2	1	6	1								
合計	120	283	240	70	79	36	40	8	25	1	6	6	51	120	53	103	21	24	19	11	33	22	1	1	7	6	23	70	19	205	1
使用数総	120	283	240	70	79	36	40	25	1	6	120	103	24	19	11	33	22	1	7	7	76	20	1								

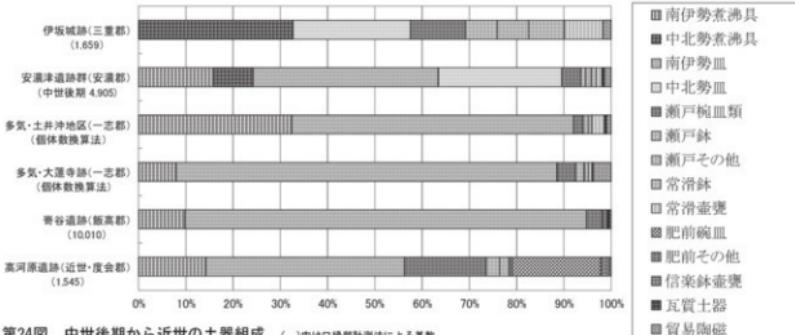
  

調査区	高河原(その他の生地)										高河原(戸戸美濃)					高河原(その他の生地)							
	口縁	通縫	その他	口縁	通縫	その他	口縁	通縫	口縫	通縫	口縫	通縫	口縫	通縫	口縫	通縫	口縫	通縫	口縫	通縫			
25-29*	12	19	10	3	2	30	1	1	9	1	1	6	5	1	2	1	1	1	1	1			
25-29*	2	6	14	2	23	3	3	3	3	3	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18			
25-39*	2	6	2	2	27	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
25-49*	6	11	23	34	13	20	1	1	12	12	24	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
合計	0	0	0	0	0	46	7	57	98	121	40	27	97	1	26	25	31	19	61	51	0	0	3
使用数総	0	0	0	0	0	40	7	97	1	1	28	19	8	16	0	0	0	0	0	0	0	3	

【注】\*は、報告書不掲載  
資料のデータである。



第23図 高河原遺跡出土土器器種別・生産地別組成



第24図 中世後期から近世の土器組成 ( )内は口縁部計測法による基数

し、高河原遺跡では45%近い組成を示すという点である。近世土器の組成を検討する中では、陶磁器類、とくに肥前陶磁器類の状況が重要であることを示している。

第23図左には、生産地別の比率を示した。南伊勢系土器が全体の55%ほどを占め、最も高い。南伊勢系土器の需要は、中世後期に引き続き、近世に

おいても高かったということができる。

陶磁器では、瀬戸美濃製品が21%、肥前製品が22%で、両者はほぼ拮抗しているといえる。伊勢地域全体として、中世後期の陶磁器類は瀬戸美濃製品が多く占めていたことを考えれば、それを凌ぐほどの出土量がある近世肥前製品の持つ意味は、極めて重要であることが改めて認識できる。

なお、久居城下町遺跡の発掘調査では、18世紀後半頃の陶器組成が分析されている。これに拠れば、久居城下町遺跡の組成は肥前製品が優勢で、その傾向は19世紀前半にも継続している<sup>101</sup>。地理的には山田（高河原遺跡）よりも久居城下町の方が瀬戸美濃地域に近いが、それは組成に影響を与えていないと推測できる。先述のように、山田は中世後期以来「せともの」の集荷地であり、それが影響の一端と考えられる。土器流通に関しては、集荷地のあり方を考慮しなければならないことを示す事例である。

#### 4 近世土師器の形態と変遷

高河原遺跡では、とくに17世紀後葉から18世紀前葉にかけての土師器類が豊富に出土した。先述のように、当地の土師器は中世南伊勢系土師器の系統上にある。高河原遺跡の資料は、当遺跡だけではなく、近世南伊勢系土師器を評価していくためにも重要である。そこで、高河原遺跡出土土師器の分類を行っておく（第25図）。

なお、近世土師器の形態は、外山遺跡（明和町）の調査で報告されている<sup>102</sup>ように変化に富んでいる。そのため、ここでは高河原遺跡の資料に一定程度限定しつつも、当遺跡で見られないが他では確認されている形態も随時触れていく。また、近世南伊勢系土師器は中世後期の伝統を引き継いでいるため、中世後期の分類<sup>103</sup>を前提とする。

##### a 盆類

皿類は、基本的には中世後期の形態を踏襲しつつ、いくつかの新たな形態や要素が付加されたものとなっている。また、同じ形態を取りつつも、法量（口縁部径）が異なるという組合せも、中世後期以来の伝統といえる。

形態は大きくA～Dの4類に区分できる。そして口縁部径から見た法量構成は、1：直径6cm前後、2：8cm前後、3：9～10cm、4：11～12cm、という4つに区分できる。さらに、この区分に合わない形態も存在している。

**皿A** 深さの無い、扁平な形態のもの。中世後期のA形皿からの伝統と考えられる。口縁部径8cmのA2のみ確認されている。

**皿B** ヨコナデを施さず、口縁部がやや立ち上がっ

て開くもの。中世後期のB形皿からの伝統と考えられる。B1とB3が確認できる。なお、B1は中世後期からの直接的伝統と考えられるが、B3は近世に至って改めて登場する形態と考えられる。

**皿C** ヨコナデを施す口縁部が、丸く立ち上がるものの。中世後期のC形皿からの伝統と考えられる。C1～C4の4法量が存在するが、確認個体数は少ない。

**皿D** ヨコナデを施す口縁部が、2段の緩やかな屈曲を伴って開くもの。中世後期のD形皿からの伝統と考えられる。D1～D4の4法量が存在する。確認個体数は最も多く、土師器皿類の主体となっている。

**皿X** 脚台のある皿を皿Xとした。中世後期にも同様な形態がある。いずれの時期も確認個体は少ない。

**皿Y** 口縁部径が16～20cmある大型の皿。実測図では奈良時代の土師器皿のように見えるが、明らかに近世のものである。出土事例は少ないが、外山遺跡（明和町）でも確認されている<sup>104</sup>。

##### b 鍋・焙烙類

鍋・焙烙類は煮沸具類で、形態・調整手法とともに中世後期からの伝統を引き継いでいる。いずれも丸底で、体部下半は外型作りと考えられる。

鍋と焙烙は近似する要素が多い。ここでは便宜的に、口縁部径が器高の4倍以上のものを焙烙、それ以下のものを鍋とした。中世後期の鍋Aからの系譜は判然としないため、ここでは除外する。

なお、外山遺跡出土資料分析により、18世紀後葉の焙烙には24cmから46cmまでの法量幅があり、28cmと40cmに量のピークがあることがわかっている<sup>105</sup>。法量差の違いは高河原遺跡出土資料に關しても見られるが、ここでは形態の区分を優先し、法量区分は後考としたい。

**鍋B** 口縁部径30cm弱のもので、中世後期の鍋Bの伝統と考えられる。17世紀代までは存在しているようと思われるが、その後は消滅すると考えられる。

**鍋C** 直立する体部に短く聞く口縁部が付くもの。中世後期の鍋Cの伝統を考えられる。

**鍋D** 頭部の締まりが無く、焙烙形に近い。中世後期には見られないので、近世に鍋と焙烙の折衷形として登場したと考えられる。ただし、18世紀以降に

土師器皿類の分類

形態 (cm)	皿 A (中世 A形盤皿系統)	皿 B (中世 B形盤皿系統)	皿 C (中世 C形盤皿系統)	皿 D (中世 D形盤皿系統)
~ 6 ~		211	212	218
~ 8 ~	221		165	166
9 ~ 10		154	231	239
11 ~ 12	20m		244	264
		皿 X	皿 Y	
		156	273	

土師器煮沸具類の分類

鍋・焰烙	羽釜	茶釜・蓋
鍋 B (中世鍋B系統) 	羽釜 A 	蓋 茶釜 A 
鍋 C (中世鍋C系統) 	羽釜 B 	茶釜 B 
鍋 D 	羽釜 C 	
焰烙 B (中世焰烙B系統) 		十能 
焰烙 A 		
焰烙 C 	鍋 X 	

第25図 高河原遺跡出土近世土師器分類

は消滅している可能性が高い。

**焰烙A** 口縁部が短く外反し、扁平な体部を持つものである。中世後期にこの形態にあたるものがあるが、中世後期の鍋Bとも関連しながら成立したと考えられる。近世を通じて確認できる器形で、18世紀代以降はさらに扁平化が進む。法量は、口径30cm前後と40cm前後のものがある。

**焰烙B** 焰烙Aよりも締まりのある頭部のもの。中世後期の鍋Bの直接的な伝統を引き継ぐ形態と考えられる。17世紀前半に見られ、同後半には焰烙Aに融合・消滅していると考えられる。

**焰烙C** 口縁部径が20cmに満たない小形のもの。高河原遺跡以外では、円座近世墓群（伊勢市）に数例見られる<sup>(3)</sup>。あるいは、これが中世後期の鍋Aにつながる形態かも知れない。

**鍋X** 潰れた球形体部に直立する口縁部が付くもの。中世後期に形態的伝統は無く、近世においてもほとんど存在しない形態であるため、鍋Xとしておく。

#### c 羽釜

体部に鋒が付き、口縁部が広く開くものを羽釜とする。これも鍋・焰烙と同様、中世後期以来の形態・調整手法の伝統を引き継いでいる。

なお、羽釜は基本的に金属器模倣だが、高河原遺跡で確認された形態は土器系統で、「鋒付鍋」と表現してもよいものである。また、この煮沸具は、カマドではなく炉（團炉裏）で使うものと考えられる。その意味からも金属製品の羽釜とは異なるが、形態の類似により「羽釜」と呼称する。

**羽釜A** 口縁部が内側するもの。口縁部は内面に折り返しが見られる。

**羽釜B** 直立する口縁部となるもの。口縁端部の收め方は羽釜Aと共通する。

**羽釜C** 口縁部は鍋と類似した「く」の字形の屈曲となるもの。南伊勢の中世後期にこの形態は見られないが、大和や伊賀では存在しており、関連も注意しておく必要がある。

#### d 茶釜

直立気味の口縁部で、体部径に比べて口縁部径が小さいものを茶釜とする。また、蓋も付いている。この器形も金属器模倣が基本形であるが、中世後期以来の形態・調整手法の伝統を引き継いでいる。

なお、この形態で肩部に注口を付加したものもある。用途としては「土瓶」であろう。高河原遺跡にこの出土事例が無いため、ここでは省略する。

**茶釜A** 肩部に2個一対の耳を付加するもの。耳は本来鉄輪を通して吊紐を掛けるためのものだが、全く用を為さない痕跡器官となっている。なお、耳の痕跡器官化は近世ではじまる要素ではなく、中世後期以来のものである。

**茶釜B** 体部に鋒部を伴うもの。その他の形態は茶釜Aに共通する。

**蓋** 茶釜の蓋である。中央には板状の摘部が付く。この形態も中世後期以来見られる。

#### e 十能

貫通する注口部が、先端の開いた箱状のものに取り付いた形態のもの。劍先スコップの金属部分のような形である。底面には煤が付着している。火處で木や灰を運ぶために用いられる道具と考えられる。

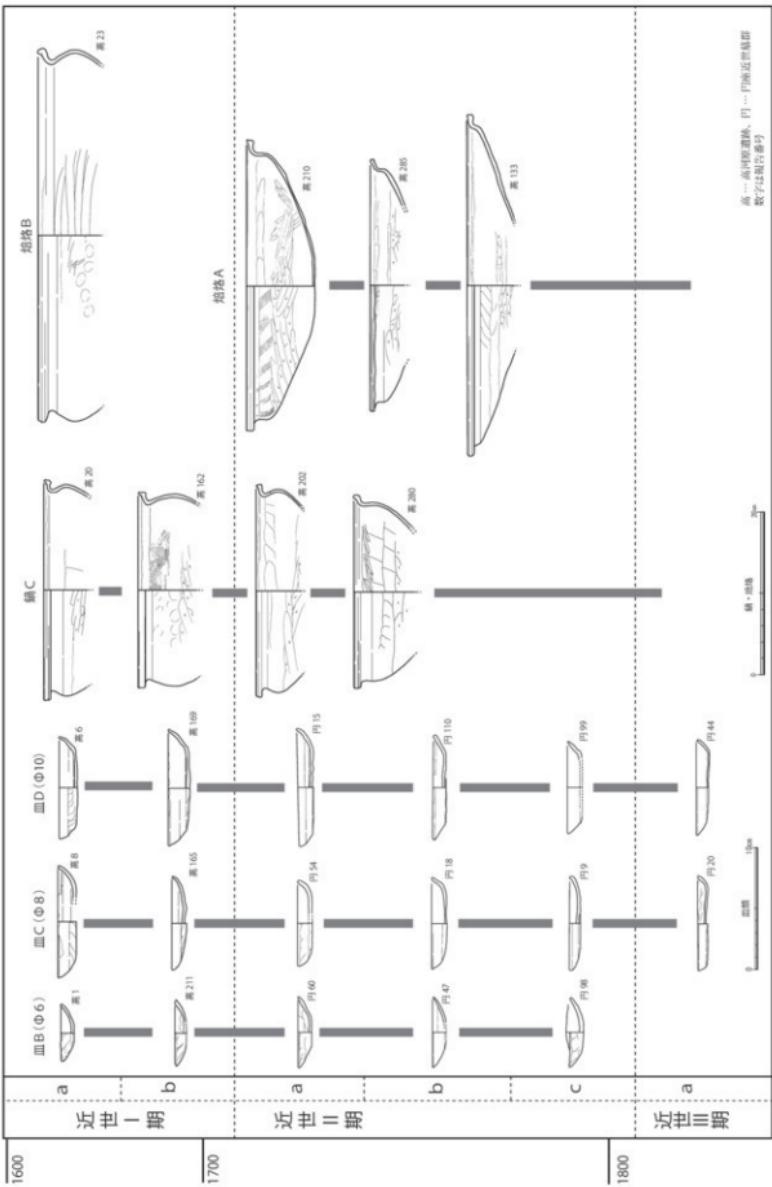
この形態も中世後期以来見られる。

#### f 土師器類の変遷と特徴

**変遷** 以上の分類を基に、大まかな変遷を示したのが第26図である。近世の時期区分は、円座近世墓群の報告で示したもの<sup>(3)</sup>を準用した。高河原遺跡出土の土師器は、一括性が高くはないものの、22-1区に17世紀前半のものが集中すること、25-3区黄褐色シルト層および灰色粘土層で大まかな時期的変遷が追えること、25-4区もある程度まとまった資料であること、などから推定した。推定根拠は、伴出する陶器類の年代観である。円座近世墓群で示した土器も適宜入れ込んでいる。

近世土師器の資料は、三重県内ではこの時期の遺跡・遺物に対する关心と意識が永らく低かったこともあります、あまり充実していない。そのため、高河原遺跡の資料では大まかな変遷を示すに止めざるを得ない。いずれ資料の充実を待って、型式学的な検討を行っていく必要がある。

**特徴** 高河原遺跡で出土した近世土師器類は、いずれも中世南伊勢系の系統下にあると考えられる。それは形態的な諸特徴からも首肯されよう。中世との明らかな違いは、中世後期が鍋主体であったのにに対し、近世は焰烙主体だという程度である。中世後期から近世への連続性は明確だと評価できる。



第26図 近世南伊勢系土師器編年案

一方、中世前期と中世後期との間には大きな違いがある。中世後期の南伊勢系土師器は、素地粘土の均質化、硬質な焼成、器形の多様化などの特徴があり、中世前期とは隔絶している。この違いは、中世後期と近世との違い以上に大きい。

土器を総合的に見れば、中世後期と近世の差よりも、中世前期と後期との差の方が大きい<sup>30</sup>。高河原遺跡の資料を分析した結果、その状況はより一層明確になったと考えられる。

## 5 総括

高河原遺跡の調査により、山田低地部における近世遺跡の状況がようやく判明はじめた。今回の調査は点的な調査で、いくつかの制限があった。それでも、今回報告したような豊かな情報を入手することができたことを強調しておきたい。

第Ⅱ章で触れたとおり、山田低地部には「山田都市遺跡群」というべき遺跡が広がっている。ここには中世から近世にかけて、列島屈指の「都市」が形成されていた。中世前期には、一大権門勢力としての神宮を核とした構造があり、岡野友彦氏は山田を「権門都市」と評価する<sup>31</sup>。中世後期の山田では様々な経済活動が展開し、伊勢湾沿岸地域の中核であった。そして中世末期から近世にかけての山田は、神宮参詣を目的に列島各地から人びとが集う、いわば「観光都市」であった<sup>32</sup>。

このように様々な侧面を併せ持つ山田と同様な場は、京都・奈良など極めて限られている。つまり、全国的に見ても稀有な存在なのである。

であるにもかかわらず、当地での調査事例はほとんど蓄積されていない。「市街化されている」という事実により、「埋蔵文化財公庫」として認識が難しいことは確かなのだが、だからといって「発掘調査は必要無い」ということにはつながらない。まずは、この地の持つ重要性を謙虚に見直すことからはじめなければならない。

今回の調査は小規模であった。それにもかかわらず、極めて貴重な成果が挙がった。この事実こそ、この地に眠る「山田都市遺跡群」が、国民共有の財産として適切に対処されるべき対象であることを明確に示しているといえよう。

(伊藤)

## 【註】

- (1) 伊藤裕久「都市空間の分節と統合～伊勢山田の都市形成～」『年報都市史研究』8、山川出版社、2000年。
- (2) 三重県教育委員会では、近畿自動車道建設に伴って古市町／地蔵町遺跡の調査を実施しているが、この調査は開ノ山丘陵部であり、山田低地部には当たらない。三重県埋蔵文化財センター「近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概要」Ⅵ（1992年）。
- (3) 『山田悲翁園』（伊勢古地図研究会編、財団法人伊勢文化会議所、1985年復刻）
- (4) 伊勢市蔵、伊勢市立郷土資料館「地図で見る伊勢のすがた」（展示図録、2010年）に掲載。
- (5) 第20回に示した近世末期の道路は、現況地割に残っているものを中心に表示した。地割が大きく変更されている場所の道路は、推測できる範囲で破線表示したが、不可能な部分はあえて示していない。
- (6) 延元元年12月21日付、北条親房御教書（「光明寺文書」1-8、「三重県史」資料編中世2、2005年）。
- (7) 康永2年8月4日付、円応寺雄掌重訴状（「国立公文書館所蔵光明寺文書」2-11（前掲「三重県史」資料編中世2））。
- (8) 稲本紀昭「中世の鳥羽」（『鳥羽市史』上巻）、同氏「伊勢・志摩の交通と交易」（『海と列島文化』8、小学館、1992年）。
- (9) 西山克「道者と地下人～中世末期の伊勢～」（吉川弘文館、1987年）。
- (10) 西山氏前掲書p34。
- (11) 南磁器類は、瀬戸美濃製品については藤澤良祐氏、肥前製品およびその他の製品については梶内秀樹氏のご教示に拠るところが大きい。
- (12) 伊藤裕像「中世伊勢湾岸の漁津と地域構造」（岩田書院、2007年）、千枝大志「中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織」（岩田書院、2011年）。
- (13) 『宇治山田市史』（宇治山田市役所、1929年）には、神宮御師大主量の開拓のほか、室町期まで遡るという口伝が記されている（p630～631）。
- (14) 伊藤裕像「安濃津遺跡群の出土遺物に関する再検討」（『研究紀要』16-1号、三重県埋蔵文化財センター、2007年）。
- (15) 三重県埋蔵文化財センター「久居城下町遺跡・東蘆跡古墳」（2008年）。
- (16) 「今泉郡明和町外山遺跡・本郷遺跡」（三重県埋蔵文化財センター「平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」第1分冊、1990年）。
- (17) 中世後期の分類に関しては、皿類は伊藤裕像「土師器皿類の変遷」（美杉村教育委員会編『北岳島館跡9』2005年）、鉢類は同「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム、1996年）を参照されたい。
- (18) 前掲註(16)文献。
- (19) 小林秀「有爾郷の「ほうろく」について」（前掲註(16)文献）。
- (20) 三重県埋蔵文化財センター「円座近世墓群発掘調査報告」（2014年）。
- (21) 前掲註(20)文献。
- (22) 伊藤裕像「戦国期土師器の系統とその流通から見た地域構造」（『戦国時代の考古学』高志書院、2003年）。
- (23) 岡野友彦「雄門都市宇治・山田と地域経済圏」（『年報中世史研究』38、2013年）。
- (24) 稲本明「近世伊勢神宮領の社會觀念と被差別民」（清文堂、2014年）。

## 写真図版



高河原遺跡出土近世遺物

写真図版 1

調査区  
(1)



22-3区（東から）



24-1区土層（西から）



24-2区（南から）



24-4区（東から）

写真図版 3

調査区  
(3)



24-5区土坑 SK 1 検出状況（西から）



25-1区板材出土状況（南から）



25-2区土層（南から）



25-3区近景（南東から）

写真図版 5

調査区  
(5)



25-3区漆器(345)出土状況（南西から）



25-4区土層（東から）

写真図版 6



遺跡近景（24-5区付近、東から）



25-4区近景（北から）

写真図版 7

出土遺物  
(1) 土器類・硯



22-1区土器類



写真図版 8

出土遺物（2）土器類



38



41



50



39



44



54



40



46



55



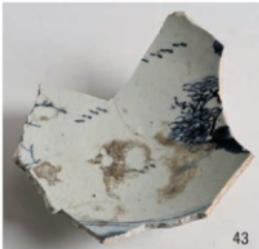
40内面



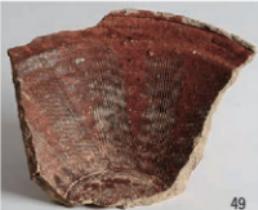
47



56



43



49



57



58

写真図版 9

出土遺物（3）土器類





写真図版11

出土遺物（5）土器類



24-5区土器類



25-2区肥前座磁器類



25-2区陶器・磁器類



25-2区瀬戸美濃産陶器類

写真図版13

出土遺物（7）土器類





25-3区陶器類



写真図版15

出土遺物 (9) 土器類



25-3区土師器鍋・釜類





206



191



206裏側



192



199



210



200



205



210裏側



208



209

写真図版17

出土遺物 (11) 土器類



25-4区土師器皿類



25-4区土師器皿類

写真図版18

出土遺物  
(12) 土器類



写真図版19

出土遺物  
(13) 土器類



25-4区土師器鍋・釜類





写真図版21

出土遺物  
(15) 土器類



318



325



329



319



327



330



320



328



331



321



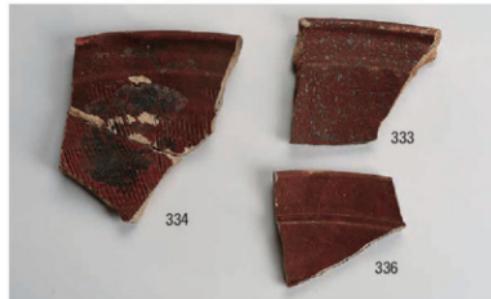
335



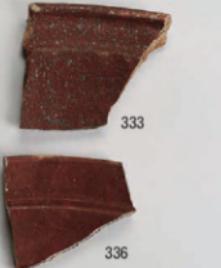
338



322



333



336



323



341



324



342



326

写真図版22



## 報告書抄録

ふりがな	たかがわらいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	高河原遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	359							
編著者名	伊藤裕偉							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 Tel. 0596(52)1732							
発行年月日	2015年3月13日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 綏	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
たかがわらいせき 高河原遺跡	いせみやじいづちょうめ 伊勢市宮後一丁 目ほか	24203	a32	34° 29' 30.9"	136° 42' 30.31"	20101206～ 20130522	40 75 39	新国道共同電線構整備事業
所収遺跡名	種別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
高河原遺跡	散布地	中世 近世	流路	土師器・陶器・磁器 石製品・木製品			初期伊万里 近世における神宮（外宮）門前町・山田の土器組成を知る好資料	
要約	<p>高河原遺跡は、伊勢神宮外宮（豊受大神宮）の門前に広がる中近世都市「山田」にあり、宮川の旧流路である「清川」の旧河川敷にあたる遺跡である。調査の結果、近世の土器類が大量に出土した。土師器は南伊勢系で構成され、陶磁器類は瀬戸美濃・肥前が多い。なかでも「初期伊万里」の優品が含まれる点は注目できる。また、17世紀後葉から18世紀前葉頃の近世南伊勢系土師器が大量に出土し、当時の基準資料となる。土器類は、近隣に所在していた伊勢御師屋敷や寺院に関わるものと考えられる。外宮門前町・山田の発掘調査事例は数少なく、その意味からも重要である。</p> <p>当報告では、木製品の保存処理と合わせて実施した漆器の皮膜構造分析と、樹種同定結果も合わせて掲載した。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 359

### 高河原遺跡発掘調査報告

2015（平成27）年3月  
編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 光出版印刷株式会社